
カミサマのご縁

稲垣圭吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カミサマのご縁

【Nコード】

N0681K

【作者名】

稲垣圭吾

【あらすじ】

水分神社に居候する俺は、葛城家の温かさに包まれながら日々を過ごしていた。しかしある日、通っている高校で自殺を図った少女を偶然に救うことになる。それからというものの、その少女に付きまといられるようになってしまふのだが、どうも家庭環境が複雑らしく……。

プロローグ

悪人と呼ばれる人間が、いつの時代にもいる。

ところがどうも、形態を問わずあらゆる物語において現代の物語きというのは『悪人』を『悪人』らしく書きたがらないエゴに囚われているように思う。

最後に明かされる真相。それは得てして『悪人』への同情を誘うものに終始するのだ。

これは違うだろう。

『悪人』は、ただただ『悪人』なのだ。

例えば、多額の金を騙し取った男がいたとする。事件解決にあたっては『悪人』となるその人物も、実は難病を患った娘がいて、彼女を救うには莫大な金が必要だった。だからこの事件を起こした。犯罪に手を染めた。

別に例え話は何でもいい。誰かを守るために人を殺めたとか、誰かを救うために盗みをしたとか。

だが、こんな悪人はフィクションの中にしか存在しない。

現実には棲まう『悪人』とは、誰かへの優しさなど微塵も持ち合わせていない。唯一己の私欲に固執し、その妄執によってやがて身を滅ぼす。

本当の『悪人』とは、そういった人間のことを指すのだ。

俺は、それを思い知った。

第一話

逃げたくても逃げられない——人は誰しもが、そんな場面に出くわす事がある。そこで世の人は『ここで逃げたら僕はダメになる!』とか勇気を奮って立ち向かうのだろうか、そんな気概も何もないチキンハートの俺としてはやっぱり逃げ出したかった。

俺の目の前には今、肌色の山が聳え立っている。と言っても標高三十センチくらいの法的には山にも認められないような小山だが、確かにそこはこんもり盛り上がっていた。

その正体は、妊婦さんのお腹。どうだ、逃げ出したいだろう。

新婚さんらしい女性が座敷に敷かれた布団の上で横になり、妊娠八ヶ月くらいの結構大きくなったお腹を高校生男子であるところの俺の前で晒し、しかもその旦那さんが俺の一挙手一投足を見逃すまいと目をギラギラと血走らせ、何か疚しいことをすれば即座に絞め殺せるように、手の指を解すみたいになきわき動かししているのだ。セオリーの根性論などでは覆せないほどの居たたまれない感覚を男性諸君は分かってくれることと思う。

正座を始めてから大して時間も経っていないはずなのに、既に痺れてきたように感じる足の間受を取り戻すように小さく身動き。それから隣で同じく正座をしている見目麗しい女性を盗み見た。

微動だにしない背筋はスターラップでも埋め込まれているかのようになきわき直ぐで、その直立ぶりは、もうちょっと奥側に立っているこの座敷の柱である磨き丸太の方がどちらかというと傾いているように錯覚してしまうほど。

白の襦袢に緋袴という、いわゆる巫女装束で芙蓉の顔に浮かべているのはデフォルトの笑顔。腰まで伸びた艶やかな烏の髪は半ばくらいで一つに束ねられ、僅かな透影にも煌めくそれは屋内においても輝きを失わせることなどなかった。

「それでは、治療を始めたいと思います。方法は先ほどご説明した

通りですの」

女性は正座のまま頭を下げる。そんな礼でさえいちいち雅な動作に見えてしまうから不思議なもんだ。この人だからこそ、というところか。

「それで、どちらが痛むのでしょうか？」

声が彷彿とさせるのは霊山を流れる清流。『名は体を表す』というは正しくその通りで、この女性の名前は葛城静流という。流麗かつ透き通った声で語りかけられたなら、何を言われても不安を抱く人など居はしまい。

「えー……っと、ここの辺りが……」

それを受けて正直に答えてくれた妊婦さんはお腹の下の方を擦る。それだけで痛みに顔を顰めるのだから、よっぽどのだろう。

「分かりました。……それじゃ、康司さん」

静流さんに促され、いよいよ退路を絶たれたと察知した俺——ちなみに名前は大神康司——の中にあるのはポジティブな熱血理論などではなく、逃げられないならやるしかねーじやんなネガティブ巻き込まれ型人生観。どうせやるなら静流さんのポイントを稼がないと損だという楽観的思考を自分の中に生み出し、覚悟を決めて奥さんの盛り上がったお腹に目を落とす。一瞬、旦那さんがこちらを睨んでいるのが視界の端っこに映った気がしたが、ここでそれを認識してしまっては、せっかくのポジティブ思考も萎えてしまうという自己防衛本能が働き、脳が理解することを拒否してくれたらしい。そんなチキン脳に感謝すると同時に、俺は奥さんのお産に関して当の奥さん以上にナーバスになる旦那さんもこの世にはいらっしゃるということ、今後の教訓として頭に刻み込んだ。

俺は横に置いてあった漆塗りの小箱を手取る。少しでも金粉による装飾の施された、そこそこの張りの黒い箱だ。その中に長さ別で仕舞ってある物の中から、十二センチほどのものを選んで取り出した。

それは針。

静流さんの視線を感じながら俺は心を落ち着けるように両目を瞑る。そしてもう一度開くと、針の先端を奥さんの示していた患部へと持っていた。

「……………」

奥さんが息を呑んだのが分かる。当たり前か、いきなり男が針取り出して自分に向けたら、いくら説明されてたってそりゃ怖いよな。「大丈夫ですよ。少しちくつとしますが、それだけですから。すぐに終わります」

俺が安心させるための言葉を言おうかどうか迷っていたところ、絶妙なタイミングで妊婦さんに声を掛ける静流さん。さすがだ、よく気が付いてくれる。全世界に三十億人以上いるだろう全ての女性を調査対象にした『奥さんにしたい女性ランキング』でもトップスリーに食い込んでくると信じて疑わないね。

奥さんの方もこんな青二才に言われるよりも、落ち着いた雰囲気的女性に励ましてもらった方が不安は拭えるだろうしさ。何だか少し足が浮いて見える旦那さんも、静流さんにこう言われては手を出せまい。

これで俺は集中できる。

「――禁厭の一念を通す御針」

針の先端を近づける。そして、軽く触れさせると同時にもう一言を付け加えた。

「――当病治癒」

瞬間、奥さんの表情が驚愕に彩られる。ま、そうだろうな。ほんの十秒ほどで治療が終わり、しかもそれで痛みがバッチリ引いたんだから。

さつきとは違う緊張で痺れてきていた足を滑らせ、俺は静流さんに場所を空ける。

「終わりました」

「ええ、ご苦勞様」

心から労わってくれていると分かるその笑顔が見られるなら俺は

水垢離だろうが護摩行だろうが、どんな苦行にだって耐えて見せましょう。例えば目の前で囁かれる呪詛に耐え抜くなんていう難行にだって。

信じられないように患部を摩っている奥さんに、上品な所作で音もなく傍に移動した静流さんが語りかける。

「どうでしょう？ 痛みは残っていませんか？」

「は、はい……………、全く……………」

胡乱な目で俺を見ていた旦那さんも未だ驚きの抜け切らない奥さんの様子を目の当たりにして、ようやく呪詛を止めてくれた。

「女性は」

破顔したまま話し始めた静流さん。新婚夫妻もその清らかな声音に心奪われる。

「一時とはいえ、ご自身と、旦那様との愛の結晶であるお子さんの命を同時にその身に宿すのです。お子さんの身体を育み、そして奥様の体調管理もしなくてはならないのですから身体にとっては大変ですが——これは凄いいことなんです」

優しい声色に釣られるように自身も笑顔になっていく奥さん。その奥さんを助け起こしている旦那さんも、ついさっきまで呪詛を唱えていたとは思えないほどの清々とした表情を浮かべていた。そして二人は微笑み合う。

何だかんだで俺も釣られて頬を緩め、それから静流さんの横顔に視線を移したところで不意に二つの事を悟った。

一つは、いつもながら静流さんは凄いな、ということ。

そしてもう一つは——

「また何かございましたら、いつでも当神社にお越しく下さい。当神社——水分神社は、数多いる女性の味方です」

——男は女性の尻に敷かれる運命にある、ということだった。

最終的には共に朗らかな笑顔になって帰っていたご夫婦を見送った後、俺は社務所の居間に戻ってきていた。

今なら空だって飛べそうな開放感に包まれていたところで実際に重力を緩和するなんて神の御業を扱えるはずもなく、畳に五体を投げ出すことで精一杯のノビノビ感を得ていた俺。ふと近づいてきた足音の正体を首だけを捻って確かめてみれば、盆に急須と三人分の湯飲み茶碗、そして茶請けの煎餅を乗せた静流さんだった。

緋袴の長さを嘆くのは心の中だけにしておくのが吉。

「……………いよつと」

心残りを振り切るように俺が首の反動で起き上がっていると、盆を卓袱台の上に置きながら静流さんが話しかけてきた。

「いつもありがとうございますね、康司さん」

「いえいえ。こっちとしてもお役に立てたなら嬉しいですよ」

こうして静流さんの、お茶を湯飲みに注ぐ淑やかな所作も拝めることですね。その手によって淹れられた緑茶はアムリタ以上の甘露に違いないのです。

「社務所の一室を独占させてもらってますし。しかもアルバイト代としてお小遣いまで貰ってるんですから、むしろお礼を言うのは俺の方ですよ」

「でも、鍼治療ができる康司さんがここに来てくれたお陰で私たちは本当に助かってるんです。水分神社は安産に御利益有りなんて言われていても、今までは御祓いしかできませんでしたから」

神社なんですから御祓いとお祈りできれば十分だと思いますよ。

「鍼治療を始めてから別に初穂料も頂けるようになって、神社の経営もだいぶ楽になりました」

随分と現実的な理由ですね。まあそりゃそうか、神社に住んでる人たちだって生きていかなきゃいけないんだから。

静流さんは自分の湯飲みをゆらゆら揺らしながら、

「いくら税制で優遇されているとはいえ、康司さんが来てくれるまではやはり財政は逼迫してしましたから」

「最近じゃあ初宮参りとか氏子入りなんて話もめっきり聞かなくなってますしね、どこの神社も似たような状況でしょう」

現代人の神社離れは今に始まったことではないといっても、やっぱりそれを生業にしている人たちにとったら死活問題だからな。

俺と静流さんはやるせない溜息を吐き、それから一口熱いお茶を啜った。

それにしても、静流さんはお茶を飲んでるってだけでも絵になる。ほんと、大和撫子オブ大和撫子とか大和撫子オブザイヤーとかって賞があったら毎年静流さんの独壇場になりそうだ。そして俺は今、そんな人と一緒にのんびりお茶を啜っている。至福の時間。

そこから発展させて俺が一人妄想に耽っていたところ、最後の清流四十川の如き静流さんの御声とは違った、ゲリラ豪雨の後の最上川みたいな刺々しい声が俺の外耳道に不法侵入してきやがった。

「何よニヤニヤしちゃって。顔面筋が弛緩しきってるわよ、全く。お姉ちゃんをネタに変なこと考えてたんじゃないでしょうね？」

コイツの名前は葛城日向。静流さんの生まれた家系からどうして誕生してしまったのか甚だ疑問な性悪かつ凶暴な生物だ。コイツに限って言えば名は体を表すというのは迷信に成り下がり、正体は日向なんて生易しいものじゃない。間違はなく真夏の直射日光、しかもそれを真っ黒なアスファルト路面の上で四方を全面ガラス張りビルに囲まれながら浴びている状態を想像してもらえれば問題ない。つまるところ、生けるヒートアイランド現象みたいな人間なのである。

しかし、その近代都市問題に凶星を指されたのも、また事実で。

「……………考えてねーよ」

「何よ？ 今のみょーな間は」

単騎バイクを携え敵陣に速攻を仕掛ける西洋騎士ように追求の目を鋭くする日向から、視線を逸らして逃げる。ついでに聴覚認識に割く脳容量もカットして、静流さんの「あらあら」という苦笑も聞かないフリをすることに決定した。

そんな俺のチキンな行動に呆れて興味を失ったのかどうなのか、日向は嘆息を一つ挟んで俺の正面に腰を下ろした。視線はもう卓袱

台の上に置かれた煎餅へと注がれている。

仕返しの意味も込めて、今度は俺が日向をじっと観察することにした。

いわゆる女の子座りでペタンと座っている姿は、悔しいかな静流さんと同じ血統に生まれたサラブレッドだと如実に示していた。やはりどこか静流さんに似た雰囲気を持っている顔の造形は整っているといって差し支えない。それに花を添える髪は肩まで伸ばされ、艶やかな黒にちよつとした反抗なのか少しだけブラウンが混じる。スラリと長い手足も健康的な印象を損なわない程度に白く、どう言い繕ったところでかなり目立つ美少女であることに違いなかった。

黙っていれば男に苦勞することは無いだろうが如何せん黙るってことがないので、そこら辺の事情は推して知るべし、だ。目を鋭く細めた顔に頬杖を付きながら、バリバリ音を立てて煎餅を咀嚼している目の前の少女の姿は、先ほどの攻撃的な言動とも合わせて美少女の美の部分をも物の見事に打ち消している。

「そういえば康司さん」

と微笑の静流さんが鵯色の唇を開いたのは俺が美の没落を嘆いていたその時だった。

「こちらの高校にはもう慣れましたか？ そろそろ康司さんがウチに住むようになってから二ヶ月が経ちますけど」

「ええ、だいぶ。っていうかちゃんと受験して入学したんですから、どの高校とも大差ないですよ。強いて良かったところを挙げるんなら、そこそこレベルの高い進学校なので中学からエレベーターみたいな団体さんが少ないところですかね。皆人間関係リセット状態だったので、お陰で友人も作りやすかったです」

俺は中学卒業までを実家で暮らしていたのだが、とある理由から高校入学を機にこちらへと越してきた。それ以来、この水分神社でお世話になっている。

あっと言う間に過ぎていった時の流れの早さに俺が郷愁の念を得ていると、それに水を差す濁流が介入してきた。

「そっか、アンタが来てからもうそんなに経つんだ」

啜えていた煎餅を口から離し、しかし視線は煎餅から外さぬまま、
「初めてアンタがここに住むって聞いた時はどうなることかと思っ
たんだけど、今のところ問題行動は起こしてないわね」

「……どういう意味だ」

「いつか破廉恥な行為に及ぶんじゃないかっていう年頃の女子当然
の懸念よ。でもまだ完全には信用できないわ。さっきもお姉ちゃん
で妄想してたし」

確かに妄想は膨らませたが、破廉恥な行為なんてするかボケ。こ
んな神の御許で。しかもここは女性の味方水分神社。そんな行為に
及んだらどんな天罰が下るか分かったもんじゃない。別に水分神社
じゃなかったら問題ないとかそういう意味ではないぞ。

でも日向、もし良かったら日本書紀でも読んでみる。価値観が変
わるかも知れないぞ。

しかし、それを口に出して言えないのはどういう訳だ、俺。文句
も言えずに口を噤むとは、この歳で既に女子の尻に敷かれていると
でもいうのか。

『思いやり』とか『配慮』って言葉が欠落しているコイツの脳ミソ
では俺への罵倒が止む可能性は低い。それを諫めてくれるのはいつ
も静流さんで、可愛い仕草で人差し指を立てながら「だめです
よ、日向ちゃん」という貴女の声が俺の唯一の清涼剤です。

しかし突然、静流さんは辛そうに表情を崩して俯いてしまった。
俺に関する話題で、この人がそんな顔をするのは一つしかない。

「……三輪神社の御当主夫妻が亡くなられてから、もう……一年で
すか、それだけ経ちましたけど、……私たちが簡単に『大丈夫？』
なんて訊くことは出来ません。……でも、どんな小さな事でもいい
ですから、私たち『家族』を頼ってくださいね」

……全く、日向も見習わないものかね。貞淑という形容がこれほ
どまでに似合う日本人女性としての最高の手本がこんな身近に居る
というのに。

——なーんて、こんな事を考えられるくらいには。

「心配してくれてありがとうございます。でも大丈夫ですよ。ウジウジしてられる年齢なんてとうに過ぎてますし、心の整理をする時間だって結構ありました。今ではもうこの水分神社が俺のもう一つの実家で、おじさんお婆さん静流さんも俺の大事な家族です」

「ちよっと」

前方から茶色い円月輪が俺の眉間目掛けて飛来してきたが、首を捻って難なく交わす。

「両親が死んで何が何だか分からなくなった俺に、もしおじさんとお婆さんが声を掛けてくれなかったら、親の後を追おうとか馬鹿なこと考えていたかもしれません。俺が今もここにこうして生きていられるのは、おじさんお婆さん静流さんのお陰です」

「ふーん」

今度は二枚同時に襲い掛かってきたが問題ない。

「これからの俺のおじさんお婆さん静流さんへの家族孝行っぷりを是非楽しみにしててください」

「へえーあいた」

今度はどうやら両手指に挟めるだけ、つまり八枚の円月輪を用意していたらしいくノ一だが、脳天唐竹割りの形で具現した天誅によってその陰惨な殺戮劇は未然に防がれた。当然だな。食べ物で粗末にするべからずってことだ。

天罰を下す際に神様が浮かべていたニツコリ満面の笑顔は、見ているこっちの身を震わせる程の恐怖を孕んでいたのは余談として付記しておく。

しかし、人ごとのように不届き者を断罪していた俺が次なる標的として自分の額にレーザーポインターを向けられていることに気付いたのは、狙撃手が次弾を装填する作業、言ってしまうえば女神様による空手チョップの予備動作が終了してからだった。

恐怖を感じる暇すら与えない鮮やかな手腕。

その優秀な狙撃手ならびに笑顔の女神様の名を、葛城静流という。

「康司さんも、意地悪はやめましょうね」
ニコッ☆
バスッ。

「……………」

……………もうしません。

第二話

季節は晩春。心なしか五月よりもギラギラしているように感じる太陽が俺的許容温度を超える勢いで熱量を振りまき始める六月だ。道路の生垣に植栽された梔子や民家の柵に絡みついている忍冬の甘ったるい香りと相まって茹だるような熱気は粘着質となり鬱陶しく身体に纏わり付いてくる。

今の俺は高校への通学途中。流石に着慣れてきた制服も今は夏服で、表面積の差分は熱を逃がしてくれるかと思いきや結局次から次へと降り注ぐ眩しい陽光のせいで目下の暑さを緩和してくれることなどゆめゆめなかった。しかも俺の隣には同じ高校の制服を着た女子、歩くヒートアイランド現象こと葛城日向もいるってんだから、体感気温も鰻昇りだ。

並んで歩いているとはいえ、そこに会話は皆無。ただ黙って俺の隣を歩き、居たたまれない空気を醸成するのが現在の日向に課せられた唯一の仕事となっている。不自然ながらもそこから前線にオーバースラップしていくなんて度胸もない俺としては、堅苦しい空気を甘んじて受け入れ歩き続けるしかない。

通学路は俺が今歩いている大通りを直進していけば学校まで一本道。どんな細い道もこの大通りに合流するので、当然ながら所どころで登校途中のクラスメイトと目が合うのだが、誰もが軽く手を上げて挨拶するのみで俺に近づいてこようとはしない。視線を俺の隣で一瞬停止させ、気まずそうに目を逸らす。その繰り返しだ。

これが我が高校における男子の抱く日向の印象な訳だが、女子からするとそうでもないらしい。以前日向本人に聞いたところによるとクラスの女子とは普通に仲が良いそうだ。初めは訝った俺だが、入学してこの方、確かに通学路の途中で女子と軽く手を振り合い、それからニヤニヤ笑いを浮かべて走り去っていく光景を何度も目にしている。

クラスで孤立説は否定されたわけだが、いったい女子は何を勘違いしているのやら。

まあ、どうにしたって誰も寄ってこない通学時間を消化し、通称日向ゾーン（誰も寄ってこない円形の空間）から抜け出せないまま校門へと到着した。

さすがにクラスまで一緒にするなんて試練を科すことのなかったどこぞの神様に多大なる感謝を捧げつつ、下駄箱で靴を履き替えるのと安普請の校舎に踏み込んだ。

階段を上って一年生の教室のある二階へと向かう。これから一年毎にこの労苦が二倍三倍になっていくことに、かなりの先走りで暗澹たる気分をゲット。それを振り払うようにさして長くもない階段をダッシュし、上りきったところで本日の英語の宿題を思い出して結局暗澹たる気分が晴れることはなかった。

教室の前に移動すると立て付けの悪い引き戸を開ける。開けたままにしておき、後から来る人の苦労を省いてやった己の行動に小さな自己満足を得て、窓側に割り当てられた俺の席へと向かう。

机に鞆を置くや否や、二人のニヤケ顔男子が寄ってきた。近藤と斉藤である。

「やあやあ大神君。本日も同伴出勤ご苦労さん」

「丸くて見事なクレーターだったぜ」

顔だけ見ていると俺の不幸を見て楽しんでいるのか、もしくは僻んだ上での皮肉かいまいち判断が付かなかったが、クレーターの中心で周囲から突き刺さる視線に晒されている俺を見ながら「ご愁傷様！」とか叫んでいたに違いないこの二人は、どう考えても前者だろう。それを拝むために俺より早く登校するその熱意を別のところに向ければいいのに。

本気で脳細胞を死滅させてやろうかと思ったところで、これ以上この二人の脳細胞を破壊してしまったら同じ学校にいられなくなってしまうかも、と不安を感じた俺はチョップの形で上げかけた腕を下ろす。

近藤の方は眼鏡に天パというどちらかと言うとインテリな外見なのだが、入学して間もない時期にあった実力テストでそのネジの外れっぷりを遺憾なく発揮して、学年最下位というたった一人しか得られない栄誉ある称号を手にした実力者だ。しかもそれを自慢してくる辺りコイツのアホは筋金入りだろう。

一方の斉藤。コイツはそこそこ頭も良く、認めたくないものだが短髪の似合う顔はそこそこ整っている。しかしながらどうも頭のネジがちよつとずつズレているようで、通常授業開始から一週間ほど経過した頃、授業中に突然立ち上がって「そうだ、保健室行こう」と某鉄道会社のCMのニュアンスで呟き、教師の制止も聞かずに飛び出していった事件は既に全クラスに伝わるほどの伝説と化している。

そんな二人と、もう何度繰り返されたかも分からない朝のルーチンワークに律儀に答えてやるなんて愚は犯さず、俺は話を変えることにした。

「そういえば今日って朝礼あるんだよな」

「おうよ。微妙に寒く感じる体育館で小一時間棒立ちだ」

「つかあれってやる意味あんの？ 朝のホームルームで事足りんじゃない」

一学生にとっては遭遇する頻度の少ない催眠生物である校長の生存を、唯一確認できる機会すら無くてもいいという二人に同意しつつ、ちよつと校長を不憫に思う。

「なんでわざわざ立ちっぱなしで長ったらしい話を聞かなきゃなんねーんだよ」

「俺はそれよか校歌斉唱のがダリー。あれの時大声で歌ってるヤツとかいるけど、ぜってー学校の用意したサクラだろ」

もし本当にそうなら、サクラにバイト代を払う前に俺たちの学費を下げろと抗議したいところだ。まあ、そんな訳ないだろうけど。

教師に聞かれたらデンジャーな話題も時間を浪費するのには最適で、気付くとホームルーム開始のチャイムが鳴っていた。

タイミングを計ったかのように前の引き戸を開けて教室内に入ってきたのは担任教師である男性の芹沢氏。このクラスが初の担任らしく、明るいクラスにしようとか常に笑顔で振舞っているのだが時々昔見て懂れたのだろう熱血教師ドラマのような情熱が覗く。卓球部の顧問であるということで入学早々女子部員の少なさを嘆いていたが、それが逆に女子の不安を煽り、結局女子部員は増えていないらしい。

二ヶ月してこなれてきた感のあるクラス委員の生徒が「きりーつ、れーい、ちやくせーき」と脱力した号令を掛けるとダルそうに従うのが今の高校生のトレンドだ。

「ええー、今日は朝礼がありまーす。朝のホームルームが終わったら体育館に移動してください」

それから本日の事務連絡を済ませ、早々にホームルームを切り上げた芹沢氏は一足先に教室を出ていった。残された生徒はぞろぞろと立ち上がって、先に蟻の熊野参りに参列している他クラスの生徒に混じりながらのんびりした移動を開始した。

体育館に到着してから何故か暗めにしてある照明の下でクラス数列を為しながら、ぶつぶつ文句を垂れているのは近藤斉藤の友人二人。ストレス発散に付き合っている義理もない俺は馬の耳に大祓祝詞状態で聞き流していると、やがて壇上にスダレ禿げのおっさんが登場し本日の催眠集会が始まった。

校長は「中間試験は全体的に不甲斐ない成績だった」とか「下校中に近頃再開発されている駅前への立ち寄りが目立つ」とか、催眠電波にやられてうつらうつらしている高校生たちには大した効果も望めない御小言を重ね、特に興味もない俺としては話半分についていると、そのうち館内が拍手に包まれたので同じように手を叩く。

続いて始まった表彰も、当事者でも何でもない俺は力の籠っていない拍手を繰り返す。全ての表彰者を全校生徒の前で晒し者にしたところで予定は全て消化できたようで、ようやく催眠集会はお開きとなった。

またもや始まった蟻の熊野参り……いや、蟻だっていつも熊野に行ったら詰まらないだろうから今回は吉野参りにしよう。気を取り直して、蟻の吉野参りに加わりながら己の所属するクラスへの長くもない道のりをたっぷり時間を掛けて移動する。

この後の授業が短縮されることを願ってさ。かく言う俺も英語の授業が潰れればいいなーなんて考えていたりする。英語はどうも苦手なのだ。

とか言っていたところで、英語の宿題をまだ終わらせていなかったことに思い至った。朝のホームルーム前に誰かに見せてもらえば良かったのだが、近藤斉藤に二人に惰性で付き合ってしまったため、すっぱり頭から抜けていた。

教室帰ったら誰に見せてもらうか計画を練る。思索に没頭していたせいかもしれないがさすがに遅すぎる前を歩く男子のアキレス腱にトーキックをかましてしまったのは許してほしい。

クラスの気前いい男子に頼み込んでどうか英語の宿題を写させてもらった結果、今日の学校生活も平穏無事に過ぎていった。

今週の教室掃除当番になっている俺の班にはサボタージュするよなメンバーもおらず、ダルダルながらもすなりと終わらせることができた。班員たちは皆部活があると言って掃除が終わるや否や教室から脱兎の如く飛び出していったが、花の帰宅部である俺は教室の戸締りを買って出て鍵を担任に返すと、後は帰るのみだ。

担任芹沢の言葉で女子部員が増えると踏んだ近藤斉藤の二人はまんまと卓球部に入部し、その変わらぬ女子の少なさを嘆いていることだろう。今頃は向かい合って、やけっぱちに「サァー!」とか叫びながら王子サーブの練習でもしているに違いない。

下駄箱で靴を履き替え、そこかしこに輝の見える校舎から外界へと踏み出した――

――ところで。

「――!」

本日の天気予報をチェックしてこなかったことを後悔した。

傘を持っていない時に限って雨に降られ、持っているのと逆に降らない。それはこの世に生きる全ての人が味わったことのある不条理システムの一つだろう。俺はそんな神様の御戯れに嵌ってあげるお人好しではないので、常に折り畳み傘を携帯している。

しかし、今日の天気は折り畳み傘でどうこう出来るものではなかった。

「……………」

脳内で気象庁への質問メールを作成。文面は『晴れ時々女学生という天気記号はどう表現するのか』とでもしよう。迷惑メールだと即座に削除されるだろうが、でも目の前で起こった現象はそうしか言い表せないのだ。

つまるところ、俺は混乱していた。

俺は今さっき昇降口から外に出たところだった。早いところ静流さんの笑顔を拝みたいと逸る気持ちを抑えずに早歩きで歩き出そうとして、しかしそれは叶わず、どうしたことか今の俺は、上から降ってきた女子学生を抱きかかえている。

突然上階から聞こえてきた悲鳴にそちらを見てみれば、俺と激突コースで重力に身を任せていた少女が一人。咄嗟にかわさなかっただけ俺にしては上出来だったと思う。

しかし、どうすれないのだろうか、これから。とりあえず立たせて服の埃を払ってやるのがいいのか？ このまま抱きかかえていればいいのか？

——それとも、降ってきた理由を尋ねればいいのか？

こんな時にも優柔不断を発揮する俺のチキンハートを今回ばかりは恨めしく思っていると、しかし抱きかかえた少女の方からアクシヨンがあった。

瞑っていた瞼が開いたのだ。

「……………あ、あれ……………」
……………どうし、て……………生き……………て……………」

もしかして今の自由落下は俺への殺意の表れ？　なんて洒落にならないボケを脳内で即否定し、おちゃれかけていられる雰囲気ではないことを再確認して気を引き締めた。

少女の瞳は焦点が定まっていないように虚ろで、ただただ咂然や呆然と言った言葉が似合う表情でブツブツ呟いていた。

「無事、だからだろ？」

話しかけたところでようやく自分が誰かの腕の中にいることに気付いたらしい。それから驚愕に目を見開くと次いで――

――その開いた瞳がぼやけるほどの涙が、頬を濡らし始めた。

「な、何でっ……………どうして、私は生きてるの！　……………どうして死んでないの！」

「お、おい！　落ち着け！」

聞く耳など持っていないのか、自分を抱きかかえている腕を振りほどくようにがむしゃらに両の腕を振り回しそうとする。

「……………っ！」

相変わらずどうすればいいのか分からない俺だが、この場で取れる行動は一つしかなかった。ただ、抱きかかえた腕に力を込める。

その少女を落ち着かせるように。

腕を動かせなくなった少女は観念すると俺の胸にその握りこぶしを当ててきた。叩こうとしているのだろうが、痛みを与えられるような力など一欠片も籠ってはいなかった。

「どうして、どうしてえ……………うひっ…、どうして私は死んでないの……………？　どうして向こうに行けないの？　どうしてあの子は死んでまで寂しい思いをしなくちゃいけないのよ……………！」

嗚咽交じりに漏らすのは、きっと俺の想像よりもずっと重い言葉。「あの子はずっと苦しんだのに！　それでも私たちに心配掛けないように気丈に振舞って！　私はそんなあの子の優しさを何も分からないまま平気で笑顔を返してた！　あの子はその裏でずっと一人ぼっちだったのに！」

後悔や憎悪、他にも多くのマイナスの感情がごちゃ混ぜになって

溢れ出し、少女は空知らぬ雨を流す。

「私は、傍に行つてあげることも出来ない……！」

……ここまで聞けば俺にも大体分かる。

あの子というのがどの程度の関係の人間なのかは想像するしかないが、かなり近い人間なのは間違いない。弟や妹あたりが妥当か。そしてその弟なり妹が自殺したのだろう。

この暗い世の中だ。ニュース番組をつけっ放しにしていれば暗いニュースなんて余るほど出てくる。その殆どは最低限の情報を事務的に伝えるのみで、すぐに人々の記憶から消えていく運命だ。また、この世にはそんな事務的な連絡にさえならない、近所のおばさんたちの暇つぶしの話題となつて消えていくだけの小さなニュースも数多転がっている。この少女もそういった小さなニュースの当事者なのだ。無責任に話すおばさんの言葉で傷付いていた、そんなニュースの当事者。

自殺の原因なんて今の世には溢れすぎていて分からないが、彼女はそこに自分の責任を見出し、同じ道を辿ることを選んだ。

あの子の生前の苦しみを思い、死んだ時の痛みを思い、そして死後の寂しさを思い、彼女はあの子に寄り添おうとしたのだ。

「……その子も、あんたと一緒に優しかったんだろうな」

俺は彼女を胸に抱いたまま呟く。

彼女の行動、それ以前にあの子の行動は、きっと人間の倫理に反するものだったろう。常識人たちなら揃つてこう言うはずだ。

『親から貰った命を自分から捨てるなんて、道理に反する』

『死んで苦しみから逃げているだけだろう』

そこで常識人に問うてみたい。

——だったらアンタは死ぬのか。誰かのために死のうとできるのか。

落ちてきた際の勢いからして一階とか二階とかから飛び降りたんじゃない。恐らくは屋上から。その時、少女はこれから己がぶつかるであろうコンクリートの舗装を目にしたはずで、どれだけ痛いん

だろう、死ぬのってどれだけ痛いんだろう、と無機質な地面を見て
少なからず考えたはずだ。その時の恐怖は死のうとしたことのない
人間には分からないだろう。

人というのは生物だ。常識人の人たちが言うように、自らの命を
粗末にせず、脈々と次代に命を続けていくべき生き物だ。だが、生
きているからこそ人は『死』に恐怖する。己の生命を停止させる『
死』に先天的な恐怖を抱く。

この少女は、あの子への想いでその恐怖を捻じ伏せたのだ。これ
を優しさと言わずしてなんと言う。

「……そうだなー」

重い空気が支配しているこの場から上空を見上げてみれば、これ
でもかというくらいに透き通った真っ青な空。その明るさ、その広
大さ、目にして思い出すのは中三の夏、周りの皆が高校受験の準備
を始めた時期のことだった。

両親が揃って死んだ時、俺は本気で後を追おうとした。

唐櫃に収まった真っ白い顔の両親を見て何を考えたかなんて覚え
ていない。でもその後に、山道を登って崖から飛び降りようとした
ことははっきりと憶えている。

なぜなら、俺はそこで恐怖に打ち勝てなかったからだ。

崖の縁に立って自分が激突して死ぬはずのグレーの岩肌を見た。
大きな目のごつごつとした岩が幾つも転がっており、それに自分は肌
を破られ血をしぶかせ内蔵を曝け出し、そして死ぬのだと、そう考
えたら、全身が総毛だってそのまま固まってしまった。その映像は
今でも時々脳裏にフラッシュバックするくらいに強く俺の頭に焼き
付けられている。

そこにやってきたのが、俺の両親とも旧知の仲だった葛城夫妻。
俺の様子がおかしかったからと付いてきており、崖っぷちで固まっ
ている俺を抱きしめ「水分神社においで」と言ってくれたから、今
俺はこうして生きている。

すぐに他のコミュニティに入っていけるだけの気持ちの整理はつ

かず、さんざん心配してくれた気のいい仲間たちもいたため、中学だけは地元の方で卒業したいと申し出て、おじさんはそれを笑顔で了承してくれた。おばさんなどは時々短くない距離を苦にもせずにやって来てはご飯を作ってくれたりもして、本当にもう頭が上がる。ない。

もしかしたら、追い詰められた状態で誰かに手を差し伸べてもらった人は、逆に救われなかった人に対して何か言う権利は無いのかも知れない。そもそもが相手に対しての冒瀆に当たる可能性だってある。

でも、ここで言わなかったら、俺は後悔する気がする。

自殺しようとした彼女を擁護した手前、彼女の行動を否定することなどないが、ここまで関わった俺個人の感情として彼女には生きてもらいたい。

そして、今の俺に出来る事が一つある。というか、俺の頭では一つしか思いつかない。

「日本の天国って、どうなってるんだろうな」

あの子が、もう寂しくないと思ってもらえればいいのだ。

彼女の悲しみを拭うことはできないかもしれないが、そうすれば少なくとも自殺をしようとした動機はなくなる。

それに、俺は今まで二つの神社から御利益を頂いていたのだ。三輪神社と水分神社、そろそろ片方の御利益を別の人に分けてもいいだろう。ほら、複数の神社で同じ内容を祈願すると神様同士が喧嘩して御利益がなくなるって言うだろ。俺の場合、水と酒の神様が幸運にも意気投合して喧嘩しなかっただけで。

胸元の優しい彼女に目を移してみれば、いきなり語りかけてきた俺をポカンと見つめている。泣き腫らした跡でその目元は赤く、三輪神社出身の俺としては『因幡の素兎』を連想してしまう。反射的に頭を撫でてしまった自分に苦笑し、俺は恐れ多くも大国主神を演じることにした。

泣き叫ぶ素兎を救った大国主神を。

「本当に天鈿女命は素っ裸のまま桶の上で踊ってんのかな」

できるだけ明るく。それを己に命じていたが、実際に想像してたら本当に面白くなってきた。何やってんだ、神様。

いきなり意味の分からないことを喋り始めた俺をきょとんと見つめる彼女の頭をもう一度撫でる。この楽しさ、あの子の向かった場所がこんなにも楽しいところなんだと伝わることを願って。

「朝には常世の長鳴鳥が鳴いて、昼間は天照大神が世界を明るく照らして、夜には月読尊が仄かな月明かりを注いで、飯時には豊受大神の作った美味しい飯を食って、その時に大物主神の醸造した酒なんかも飲んで、木花之開耶姫と一緒に富士山の花見をして、でも時々素戔鳴尊が大暴れしたりもして、騒がしい毎日を過ごしてんだろくな」

こんなことを言ったところで、彼女が仏教徒とかクリスチャンだったら意味ないんだけども、な。でも大丈夫。ここは世界でも有数の無宗教国家である日本。きっと問題ない。

外国人からしたら結構馬鹿にされるみたいだけどな。無宗教って。

「……………ふふっ」

と少しだけ彼女の顔が綻びそうになったところで、騒ぎを聞きつけた部活の生徒などで構成された野次馬どもが集まりだしてしまった。これではおちおち話をしていられる状況ではない。

たぶん上で悲鳴を上げた女子なのだろう、一人の女性徒が先生を引き連れてやってきていた。その女生徒も半分泣いていて、俺の腕の中にいる少女の無事を確認すると周囲を憚ることなく涙を流し始めた。いい友人がいるんだな。

俺は彼女に兎少女を預けることにした。教師もいるし問題ないだろう。

何か言いたそうな目を俺に向けてきた兎少女だが、これ以上俺に伝えられることは何もない。そのままゆっくりと踵を返す。

振り返る直前、友人の胸に抱かれもう一度泣き出す少女の姿が見えたが、きつともう大丈夫だ。ポジティブにそう考える。

俺はそそくさとその場を後にした。ちょっとだけ早足で高校の敷地を出る。

ちよつとノスタルジックな気分になってもう一度青い空を見上げると、そこには白いふわふわした雲が一つだけ流れていた。止まって見えるあの雲は、これからどこへ行くんだろうか。もしかしたら神代にまで行っちゃったりするのかな。そう思うと何だかあの雲も楽しそうに見えてくるから不思議なもんだ。

ふと体感温度が上昇してきたことに気付くと案の定、後方から小走りに俺を追いかけてきていた一人の少女が隣に並んだ。もちろん日向だ。

……その胡乱な目はなんだ。

「何したの？」

いきなり疑ってきやがった。こいつの中で俺の評価はどうなっているんだろかね。きつとヒエラルキーの最底辺、食物連鎖でいうと植物プランクトンとかなんだろな。

「何もしてねーよ」

「でも泣いてたじゃない」

「だからそれは俺のせー、ん？　もしかして俺のせいなのか？　で、でも！　ちゃんとあの場で解決したはずだ」

俺は歩くスピードを速める。しかしそれにも付いてくる日向は相変わらず突然やって来た訪問販売員を見るような目付きだったので、それから終始そっぽを向いていた。

確かに解決した……と、思う。そうでなければ彼女はもう一度自殺を図ってしまうのかもしれないが、俺にはそれを非難する資格はない。残念だが、ただ受け止めるだけだ。

葬式が神式だったら手伝えるんだけどな……って、何を不吉なことを。大丈夫だ。そう信じよう。こうなったら明日も腰を据えて登校するだけだ。

でも一応、帰ったら神楽でも踊ろうか。

翌日。

やはり通常通りに日向ゾーンの餌食となって、針の筵の中での移動を余儀なくされたがしかし、今日の俺はそれすら瑣末な問題だと感じられるほどに心臓がバクバクしている。やはり昨日のあの出来事の後だ。当事者としては緊張してしまうのも無理はないと自己弁護。

教室に入ってみると、やはり話題はそれで持ち切りだった。あれだけ野次馬がいたんだから当然の結果だが、彼女の心情を考えるとやりきれない。

真っ先によってきたのは近藤と斉藤の二人だ。

「なあなあ聞いたか。昨日うちの学校の女子が飛び降り自殺しようとしたんだってよ。未遂だったらしいけどさ」

「下にいた男子が受け止めたらしいぞ。あと、その事で今日の放課後に保護者会が開かれるとかって噂だ」

その男子であるところの俺としてはあのまま未遂で終わってくれたことに安堵した。

「その人も無事だったんだろ？　だったらいいじゃん。これ以上話題にするのもどうかと思うね」

「そりゃそうだけどさ………、なんかちよつと、やばくね？」

きつと一般人の感覚ではこの感想が当たり前なのかもしれないが、やはり少し腹立たしい。その無責任に面白おかしく口にした言葉で相手がどれだけ傷付くのか、もうちよつと考えてくれ。

その時――

バスンッ！　とデカイ音を立てて教室のドアが開かれた。ドアを開けた本人はそんな音を立てるつもりは無かったようで、いきなりクラス中の目を図らずも集めてしまったことに驚き、霞網に捕らわれた小鳥のように視線の網に絡まったまま身動きを止めると俯いてしまった。

さらに――

教室の一部でヒソヒソ話が始まった。それはドアを開けた少女を

見ながら開始されたもので、どうやら昨日の野次馬がこのクラスにもいたらしい。時々俺の方を見ているのだから確定的だろう。

ドアの向こうに立っていたのは、昨日の少女だった。

少女は明らかに自分を見ていると分かるヒソヒソ話に表情を無くし、顔面蒼白になりながらも萎縮してしまったようでそこから動けずにいる。

俺はヒソヒソ話グループに目を合わせるとちよつと目付きを鋭くしつつ『止めろ』の合図。それを受けて野次馬君は諸手を上げて降参のポーズを取ってくれる。話の分かるヤツで良かった。

昨日の今日だ。彼女がここにいるという事は、俺に用があったと自惚れてみてもいいだろう。急に立ち上がった俺を見て驚いている近藤斉藤の二人を後目に彼女の元へ向かう。誰かが近づいてきたことに気付いて顔を上げた彼女は、それが俺であったことに顔の緊張を少しだけ解いたがしかし、この場で話すのもどうかと思ったので俺は彼女の腕を掴むと階段の踊り場へと連行することにした。

踊り場に付くや否や、少女は俺にガバツと頭を下げてきた。それはもう凄い勢いで。

「ごめんなさい！　なんだか迷惑掛けたみたいで……」

「別にいいさ」

そういえば名前も知らない彼女の姿を今初めてちゃんと見た気がする。昨日は何せ超至近距離だったし、じつくりと眺められる状況でもなかったしな。

しかしまあ……。改めて見てみると、かなり綺麗な少女だった。

静流さんほどではないが長く伸ばされた黒髪はストレートで、蛍光灯の白い光を反射して煌めいている。鶺鴒色の唇や涼しげな目元、白皙の素肌が彩る顔の造形は綺麗という表現がしっくりくるもので、日向よりも静流さんに似た雰囲気を持っているように感じた。まあ、他の女性と比べるのもどうかと思ったけど。

この学校の女子の制服では胸元のリボンの色が学年によって違っており、彼女の胸元にあるのは日向やクラスの女子でも見慣れた赤

のリボン。同学年なのは間違いない。

「貴方の名前とクラス、先生に聞いたの。どうしても昨日のお礼が言いたかったから」

お礼、か。それが言えるんなら本当にもう大丈夫そうだな。

最後に確認の意味も込めて、俺は彼女に質問した。

「あの子は今、どうしてると思う？」

「……………うん。きっと、楽しくやってる」

彼女が浮かべたのは、小さな笑顔だった。

「……………そっか」

それならもう何も言うことはない。俺の役目は終わった。こんな綺麗な女生徒との接点が無くなることを惜しんでいる自分がいなくもないのだが、大国主神だって因幡の素兎を救ったあとも面倒を見たわけではない。

もうすぐ朝のホームルームも始まる。後ろ髪引かれながらも俺は教室に戻るべく反転した――ところで。

背後から伸びてきた白蛇の如くしなやかな二本の腕に右腕を絡め取られた。振り返ってみると満面の笑みの彼女。どこか、太ったカエルを目の前にしたアナコンダのような。

「私、E組の稲葉縁っていうの。これからよろしくね、康司君」

「……………、……………ああ」

聞きたいと思っていた名前（稲葉かよ）も聞いた。これからも接点を持つことも確約してくれた。いきなり俺のファーストネームも呼んでもらえた。しかし、今の俺がどうにも喜べなかったのは言い知れぬ不安が心の中で発生し、イメージでは鳴門の渦潮が如く俺を巻き込まんとグルグル渦を巻き始めたからだ。

一年E組。それはアイツのいるクラスだったから。

教室に戻ると今度は俺が霞網に引っ掛かって視線に包囲されたが、どんな質問にも知らぬ存ぜぬで返しているうちにクラスメイトたちは興味を失ってくれ、それでも時々背中に押し寄せる圧力には完全

無視をもって対抗した。

E組から不穏な噂が流れてくることもなく、朝の噂話も昼飯時には生徒の頭から薄れ始め、放課後には教室内からは自然消滅していった。高校生の頭の中には、毎日語りつくせないだけの話題が満載なのだし、一日中暗い話題を続けるのもどうかと考えたんだろう。できればこのまま終息していくことを願う。

当番の教室掃除を超特急で終わらせ、部活に精を出す生徒にも負けない勢いで教室を後にしたのは静流さんから例の鍼治療を仰せつかっていたからだ。指定された時間にはまだ余裕があったが俺の静流さんへの依存度ゆえに静流さんの笑顔の幻影が見えてしまい、その禁断症状を取り除くためにも無意識に脚の筋肉が高駆動にギアチエンジしたらしい。

靴を履きかえる時間ももどかしく、ようやく外履きを履くとトントンとつま先で履き心地を整える。それから静流さんの待つ水分神社へと向かうために笑顔で青空の下へ突撃——しようとしたところで、またも後方から伸びてきた白蛇の如き白い腕に右腕を絡め取られた。パブロフの犬と同じ効果、つまり反復による条件反射によって俺は蛇に睨まれた蛙状態へ移行。硬くなった首の筋肉を動かして何とか背後を振り返ると、やはりそこにはアナコンダスマイルがあった。

「康司君、一緒に帰ろう？」

稲葉縁であった。

何だか昨日の今日でテンションが違いすぎる気がするのだが、それは一先ず置いておいて。歴戦の漁師が万力を持って船を手繰り寄せるような力強さで俺の腕を縛り上げているくせに、ちゃんと拒否の選択肢は用意されているのだろうか。

いや、それもどうでもいい。なぜなら目の前の彼女は、どうしたって魅力的な笑顔で、絶妙な角度に首を傾げながら、しかもちよつと上目遣いでもって俺と並んでの帰宅を所望されたのだ。これで断れる男がいたら見てみたい。俺は無理だ。

「えへへ」

という訳で、現在ツーショット真っ最中。女子と二人だけで帰宅するというのは高校生男子にしたら垂涎モノのイベントかもしれないが俺の場合は日向という前例でそんな甘いイベントが夢想である事も理解している。その通り、ここに來てまた俺のチキンハートが真価を発揮してしまった。

どうしたって俺と稲葉は今日名前を知り合ったような、さらに言うなら昨日初めて顔を合わせたような間柄なのだ。しかも完全な赤の他人である女子と一緒に帰宅するなんて初めての事かもしれない。始めは話題も豊富にあるからと調子をこいていたのが、ネタの切れた今になって帰宅の道中は居たたまれない沈黙に包まれることとなった。

隣を見てみると稲葉は笑顔なので不機嫌ではないようだが、俺のチキンハートではその沈黙に耐えられない。

既に本日の学校で起こった楽しい話題は使い切ってしまった。それからは話題を探すためにさりげなく周囲の景色へと目を向けていたのだが視界に飛び込んでくるのは『何ちゃら副都心』みたいな触れ込みの再開発の結果誕生した似たようなモダン建築ばかりで、そんなものづくに使っている。白い花が咲いている花水木の並木に入った瞬間に『花の話題は女子向きだっ』と即座に話題にしたのは言うまでもないだろう。

そのまま歩いていくと周囲の風景も並んだ建築物の無機的なものから檜や椎などの雑木林の有機的美景観へと変化していく。もう水分神社も近いのか杉の木もちらほら見つけられるようになった。そういえば、今までこんなに通学路の周囲を見たこと無かったかも知れない。ふと林の中の姫娑羅に絡まる通草を見つけ、秋になったら収穫に來ようとかかなり先取りの予定を入れた。杉林があるということは、ここはもう水分神社の土地のはずだし。

とか考えてカーブを曲がると少し先に水分神社の灰色の鳥居が見えてきた。ようやく開放されると胸を撫で下ろしてしまったのは不

可抗力と思っしてほしい。

そこで、何か忘れているような気がして隣の稲葉を見る。彼女は
何故かちょっと驚いたような顔をしているが………って、あっ！
そこで思い出したのは俺たちが今何をしているかということだっ
た。

そう、帰宅である。学業という本日のお勤めを終えた俺たちは、
よく書類とかに書く自分の住所へと帰還しているのである。俺は話
題を探すのに必死だったし、隣の稲葉は笑顔で俺についてくるので
全く気にも留めなかった。つまり稲葉の家の場所など全く聞かず、
俺は自分の家へと何も考えずにビシバシ向かっていったのだ。

これはさすがにマズいな。慌てて隣の稲葉に謝った。

「わ、悪い！　俺、なんも聞かずに自分の家に向かっちゃまって！
家どころ辺だ？　送ってくから」

送り届けて全速力で帰ってきててもアルバイトにはギリギリ間に合
うかどうか、いや間に合わないといった感じだったが、この際しよ
うがない。俺の無神経さがそもその原因なのだ。甘んじて静流さ
んの叱責を受けよう。……悪くないかもしれない、なんてな。

しかし、当の稲葉は喋る鳥でも見たような表情のまま首を横に振
ってきた。

「……ううん、大丈夫」

「な、何が？」

「私の家も、この先だから」

指差したのは水分神社と同じ方向。ただ、水分神社は今歩いてい
る道路と階段で接続されており、稲葉の示したのは道路を更に直進
した先の方角だった。

一瞬俺に気を遣っているのかと思ったが、彼女の驚愕が途中まで
本当に家路が同じだったことに対するものだと思い至り、俺はほっ
と胸を撫で下ろした。

そうして水分神社の鳥居前にたどり着く。俺がそこで立ち止まる
と稲葉は不思議そうに鳥居の先に続く階段を見上げた。

「ここって……」

「水分神社だ」

「神社に住んでるの？」

「ああ」

稲葉は唐突にぽんっと手を打って、

「あっ、だから日本神話に詳しくったんだね」

俺も昨日の会話を思い出す。そして、今度は俺が驚いて稲葉を見つめた。

「へえ、知ってるのか」

「そりゃあ、天照大神くらいはね」

確かに日本神話で知名度の高い神様といえば天照大神、素戔鳴尊、日本武尊がトップスリーだろうが、今ではそれすらも知らない人がいるというのに。

「……………これは、ほん……的に……きょうしないと……
……」

「ん？　なんだって？」

小声での呟きだったので聞き逃してしまい、咄嗟に聞き返すが答えてくれるつもりは無いようだった。

「んーん、何でもない」

稲葉は長い黒髪を揺らしながら頭を振ると、それから俺に小さく手を振ってきた。

「それじゃあ、また明日ね」

「ん？　ん、ああ、また明日」

俺が階段を上り始めた時も手を振りながら見送って、上に着いても稲葉は笑顔でこちらを見上げていた。それからもう一度小さく手を振ると己の家路へと戻る。その足取りはどこか浮ついているようにも見え、なにか楽しいことでも待っているかのようだった。

まあ、楽しいことがあるなら、それに越したことはないよな。アイツだっていつまでも暗いままじゃ鬱病になるってもんだ。

稲葉の心がいい方向に向かいつつあることを実感して、俺は境内

へと目を戻した。

今日のお客さんを出迎えるためか、社務所の前では静流さんがいつもの巫女装束に身を包んで立っていた。『立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花』とはよく言うが、この人の場合には立っているのが座っているように歩いていようが、あらゆる動作を形容するのに百花繚乱が必要だ。全く罪な人。園芸業社さん、品種改良、頑張ってください。

それはさておき、静かに待っている静流さんの笑顔を見て間に合ったようだとい安心。

「あっ、康司さん。まだお客様はみえてませんよ」

「みたいですね。俺もすぐに用意してきます」

急いで己の部屋に鞆を放ると風呂場にて簡単な禊を済ます。その時願ったのは、今度は呪詛を囁かれませんように、ということ、それから狩衣括袴に着替えると針の準備をし客間へと向かった。そして――

――呪詛を囁かれました。

第三話

当然といえば当然なのだ。

お産に際して体調を崩しやすいのはやはり第一子の出産を経験する女性で、そうなるとう当たり前だが新婚さんが多いわけ。所帯を持った事のないどころか結婚できる年齢にもなっていないガキンチョの俺にはその時の旦那さんの気持ちなど分かるうはずもないが、想像するにきつと庇護欲と独占欲の塊なのだろう。愛する奥さんに別の男が触れようとしていれば、そりゃ呪詛も吐きたくなるか。もしかしたら俺が静流さんに近寄ってくる男を無意識に威嚇しているのと似ているのかもしれないな。

ともあれ明けて今日。昨日の呪詛のせいか優れない体調を押して朝食の席についた俺だが、心配してくれるおじさんお婆さん、そして静流さんの優しさに涙が出そうになった。このまま学校を休んでしまえば静流さんに看病してもらえするというこの上ない幸福の時間が俺を待っていたはずだが正面から漂ってくる『早く行くぞ』的なプレッシャーに負けてしまい鞆を持って立ち上がることを余儀なくされる。

いつも通り、二人並んで階段を降りる。今日も特に変わらぬ日向ゾーンに取り込まれて肩身の狭い通学路が待っているのかと思うと陰鬱たる気分になるが、しかし。

本日の日向ゾーンは鳥居を出て一メートルも歩かないうちに崩壊することとなった。その日向ゾーン崩壊因子は鳥居に背中を預けて降りてくる誰かを待っていたようで、足音に気付くと笑顔のまま振り返り――

「あっ、康――」

俺の隣にいる日向ゾーン形成因子であるところの葛城日向を目にして停止した。

「えっ、え？　か、葛城さん？」

「ん？ あ、稲葉さん」

空気が止まった。そこら中を舞っているはずの杉花粉すら空中で静止してしまったように空気が固い。二人が既知の間柄であるのは同じクラスに所属しているからだ。俺は知ってしまったている。これは俺の不安が的中してしまったんじゃないだろうか。

「ど、どうして、康司君の家から、葛城さんが出てくるの……？」

ガビーン！ と顔に影を作って呆けている稲葉に大体の事情を悟ったらしい日向は胡乱に目を細めると、どこか高圧的とも取れる上から目線で言い放った。

「前提が間違ってるけど、ここは康司の家じゃなくて、あたしの家よ」

言葉に棘があるのは気のせいかな。

「だ、だから！ どうして一緒に出てくるの！」

「一緒に住んでるからに決まってるじゃない」

またしてもガビーン！ と表情に影が差す。これはあれだ、ノルウェー出身表現派画家ムンク作の『叫び』に描かれた人物と同じような呆け方だ。

ど、同棲………！ と可笑しな方向へ、しかも物凄いスピードで勘違いした稲葉に、日向はしかし表情の怪訝を解くことはしなかった。

「てゆーか、康司のこと知ってるんだ」

その言葉で復活した稲葉は難題に直面した数学者のように顔を引き締めると、そそくさと俺の隣に近寄ってきた。

「も、もちろん！」

胸を張るな胸を。目のやり場に困るだろうが。……見比べてみたところ、どうやら稲葉の方がデカイ模様。ご内密に。

「それで、朝っぱらから人様の家の前で何やってんのよ？」

稲葉を完全に敵認定したようだった。言葉の抑揚に容赦がない。

「べ、別に貴女なんかには用はないわ！ 私はただ康司君と一緒に学校行こうと思って！」

こちら最初に話していたときの「挨拶くらいはするけど仲良くも悪くもない」みたいな初々しい感じが消失してるんですけど。

「うっわ、粘着」

「何ですって！」

両方ともタイプは違えど、美少女が口汚く罵りあうというのはこのインパクトがある光景なのかと俺は一人肩を震わせる。そもそもこの黒い言葉の応酬は俺を中心に据えて始まったはずだが、今では完全に俺を無視してお互いへの恨みつらみだけが先走っている。

不毛な口喧嘩に先に終止符を打ったのは日向だった。托卵された杜鵑の卵を見つけた鶯のような目で稲葉を睨み、ついでに俺にも一睨みくれながら日向は身を翻した。それから一人で学校へと向かう。最後に、今後長きに渡って稲葉を燻らせる事になる皮肉を残して「康司に気に入らいたいなら『貞淑』って言葉を辞書で調べた方がいいわよ」

それじゃお達者で、と手をひらひらさせながら日向は行ってしまった。その颯爽とした去り様を呆然と見送りながら背後を振り返ってみると、水分神社の鳥居がその威容を俺に見せ付けている。つまり、まだ神社の目の前だ。隣の様子をチラッと窺ってみれば遠ざかっていく日向の背中を恨めしそうに見つめるブスツとした稲葉がいる。

これはまた、学校まで苦難の道になりそうだ。

ところがどっこい。本日の朝の登校時間は稲葉が熱心に日本神話や水分神社の事を訊いてきてくれたお陰で話題に困ることもなかった。なにやら最近家で勉強しているらしい。今どき自分から神話を勉強する人なんて稀だろうし、神社に住んでる人間としちゃあ嬉しくないはずがない。そのお陰で、朝にはまったりした時間を過ごすことができた。

でも世の中、嬉しいことの後には辛いことが待ち受けてたりするもんなんだよな。

教室に到着すると、何やらいつもと内部の様子が違っていた。

俺がドアを開けた瞬間まず目に入ったのは、いつも俺の引き攣った顔を見て爆笑していたはずの近藤斉藤の二人をはじめ、程度は違えどその笑声に加わることのある他の男子生徒まで全員が、ただ机に座って俯き大人しくしていたのだ。いつもこいつらのハッチャケ具合を目にしている女子たちが遠目から気味悪そうに眺めている事からも、その異様さはお分かり頂けるだろう。

俺も男子の中では例外的に女子と同じ行動を選択し、できるだけそいつらから距離を取りながら己の席へのルートを迂回していった。自分の縄張りに辿りついて、とてもじゃないが安心できない空気に肩身を縮ませていると、背後に気配を感じて背筋を凍らせる。恐る恐る振り返ってみれば、そこには――

「……………うおっ！」

思わず仰け反ってしまうほどの奇怪な、強いて言うならランプのジョーカーみたいな口の両端を吊り上げた笑顔を湛えた近藤斉藤の二人が立っていたのだった。急遽、頭の中に住む誰かが警鐘を乱打し始め、その警告に従った俺はその場から逃げ出そうとするのだが、当然目の前の二人がそれを許してくれるはずもない。敢え無く俺は二人に捕縛され、教室後方の隅っこへと連行されるのだった。BGMにはドナドナでも流しておいてくれ。

その隅っこに座らされ、友人二人……友人と称するものかどうかと思っけてきているが、ともかく近藤斉藤に囲まれて蟻の這い出る隙もない状態。何故いきなりヤンキーみたいな連中に絡まれているのか全く以って見当もつかない俺は、パッとみ喜色満面の二人が放つ無言のプレッシャーに身体を震わすことしかできない。

俺の移動を制限したところで今度は他の黙りこんでいた生徒も立ち上がり、こちらへと向かってくる。そうして完成されたのは男子約二十人によるバリケード。強行突破など不可能、ミッショインポッシブルだ。

「……………なんだよ」

モグラ戦争で劣勢に立たされている東土竜のような声で迫力なく相手を糾弾するのが精一杯。そんな俺を笑顔のまま見下し、しかし近藤の口から紡がれたのは予想と違い、まるでどこかの敬虔な宣教師が信仰を持たぬ者に教えを説いているような穏やかな声音だった。「分からないかい？ 君がどうしてこのような状況になっているのか」

まあ言葉の内容はただの犯行予告にしか聞こえなかったけども。続いて斉藤が口を開く。

「君は水分神社に住んでいるよね」

口調は優しい。でも裏がどす黒い。

「……ああ」

「いつもは誰と一緒に家から登校しているんだい？」

「……日向……、葛城日向です」

敬語になってしまったのは俺のチキンハートの判断だ。ここでは相手を刺激しない方がいいという懸命な判断だったと俺自身も思う。「そうだ、葛城日向のはずだ。で、今日は一体誰と一緒に登校したんだい？」

それを訊ねられた時点でコイツラが何の目的で俺を囲っているのか理解してしまった。

その沈黙こそが自分たちの行動の正当性を保つ証拠であると確信を持った近藤斉藤の二人は揃って俺の制服の襟首を掴み上げながら絶叫を放つ。それが、その答えだ。

「昨日の登場からうちのクラスの間で人気赤丸急上昇中の稲葉縁と昨日の今日で同伴出勤かよ——！」

きっと廊下にいた人間にまで届いたであろう痛切な叫声に俺は耳を塞ぐ。ブンブン揺さぶられるが、俺は二人を押し留める気にはどうしてもなれなかった。なぜなら——

「ぶふおおおおおおおおおおおおお！」

と、人の泣き叫ぶ声とは思えないくらいの醜声を上げながら、イグアス大瀑布並みの勢いで滂沱と涙を流していたからだ。襟を掴む

拳には如何程の力も籠っておらずいくらでも振り払えそうだったが、俺は揺すられるままにしておいた。

だって、見ているこっちが辛くなるほどの泣きっぷりだったから。気付くと周囲を取り囲んでいた他の男子も床に崩れ落ちてグジグジ言っていた。その向こうに見える女子たちの視線は冷たいものだったが誰に向けられたものかは気にしない。

近藤の口からは懺悔とも取れる叫びが漏れる。

「本当は葛城日向との同伴だって羨ましかったんだよコンチクショ―！ 御上が俺たちに青い春を恵んでくだらないのは、それを僻んでひねくれて、こやつを笑いものにした罰ですか！ 人の幸福を妬んだ卑しい我々への罰なのですか――！」

そこまで自分を卑下しなくても。ま、アホだけどさ。

不幸なことに、こういう時に限って朝のホームルーム開始のチャイムが鳴りやがる。

「やあ皆、おは――」

前側の扉を開けて入ってきたのは担任の芹沢氏。案の定というか、教室の隅に集まって涙ボロボロ鼻水ズルズルなちよつとヤバイ感じになっている男子生徒たちを目にした彼は途端に、ちよつと古めの朝の挨拶を最後に意識を手放してしまった。それは有害映像を見ないようにと無意識の内に発揮した脳の防御手段だったか。

独りでに動いた手は、もう一度扉を閉めたのだった。

数秒後に復活したらしい芹沢氏は変わらぬ笑顔で何事も無かったように教室へと入ってきた。担任としての職務を放棄することはできなかったようだ。ここで問題を起したら今後の教師生活に支障を来たすと判断した彼の勇氣ある判断に心の中で拍手を送る。

その数秒の間に自分の席へと戻った男子たちは未だに鼻をグジグジ鳴らしていたが、芹沢氏が意識的にそちらを見ないようにしていたのは面白かったな。

泣き疲れたためか、その後は比較的大人しかった男子連中に囲ま

れながら今日の授業も五体満足のまま乗り切り、放課の世界へとたどり着くことができた。すっかり朝のことは無かったことにしている担任の芹沢氏は気持ち悪い男子の中心にいた俺を呼び出すこともなく、帰りのホームルームも一通り完遂させた。クラス委員が「きりーつ、れーい、さよならー」と号令を掛ければ後は掃除のある生徒は掃除を、そうでない生徒は無罪放免で娑婆へと解き放たれる。

天然娘がもう一波乱を運んできたのはそんな時。つまり、まだ教室に全員が揃っている状態の中、彼女は笑顔で教室の扉を開くと数多の視線を連れてくることも厭わずにスタスタ俺の席へと歩いて来、そしてエレクトロン焼夷弾を放った。

「ねえ康司君。今日、私の家でお茶しない？」

身も心も焼かれた全ての男子生徒が無言のまま俯き、ゆっくりと立ち上がる様はそりゃあもう不気味だったな。それだけで下手なホラー映画よりもよっぽど心拍数が上がった。

そこで俺の取った行動は迅速だった。彼女――稲葉のお株を奪って、蛇が獲物を捕食する時のような敏捷さでもって「ひゃっ」とか言っている彼女の腕を掴むと教室から逃げ出し、高速で階段を駆け下りている途中に今週一杯教室掃除の当番だったことを思い出したが戻ることはしなかった。明日登校してからが怖いが、しゃーない。今から戻ったって俺の身に起こる悲劇には大して違いもないだろうし、腹を括ろう。

昇降口で靴を履き替えていたところで稲葉が「痛いよっ」と声を上げたので慌てて俺は掴んでいた腕を放す。

「ど、どうしたの？」

大して教室からここまで距離もなかったはずなのにぜえぜえ切れる息を整えながら思うのは、今の言葉をマジの天然で吐いたのかどうかってことだ。まあ自覚されても困るような気はするから教唆するような愚行は自重しよう。

追ってくる気配はないので安心しつつ靴を履き替え、それから青空の下へと踏み出す。頭の上から微かにブーイングが降ってきたよ

うな気もしたが、ここで振り返ったら般若面を顔面に貼り付けた悪漢どもに呪い殺される。そんな危険を感じた俺は背中に冷たい汗をかきながら足早に校門を抜けた。小走りに付いてくる稲葉は首を傾げているがこのままでもいいか。稲葉には学校が悪意渦巻く危険極まりない場所なんて認識を持って欲しくはないし。つか、危険極まりないのは俺にとっただけか。朝と同じく日本神話について飽きもせず訊ねてきてくれる稲葉に気を良くしながら、俺たちは並んで歩いていた。

特に何の予定もないので稲葉の家でお茶をすることには大賛成。ただ、そうなった場合稲葉の両親とも顔を合わせることになるのではと緊張していたところ「両方ともいないから……」と苦笑気味に言ってきた。そこに何か翳のような色を見た気がしたが、それ以上稲葉も続けようとはしなかったので俺も触れることはなかった。

学校を出てから十五分ほど歩いて、水分神社の鳥居前にたどり着く。

「こののさらに先なのか」

「うん、そう」

　　十五分後。

「まだ着かないのかよ!」

「もうちょっとだよ」

いっしか道路は勾配を持ち始め、今ではちょっとした山道と言ってもいいくらいな坂道を登っていた。道幅も広く、しっかりアスファルトで舗装されているので本当の山道を歩くほどの疲れはないが、やはり登り慣れていない坂道が続くと気持ちの方が挫けてくる。

男の矜持なんてものをかなぐり捨て俺の方から休憩を持ちかけようとしたところ、稲葉が声を張り上げた。

「ふう、着いたよー」

「お、おお。やっとかーっておい!」

……ああそうだよ。俺だっと思ってはいた。ずいぶん遠いなーとか、けっこう登るなーとか、これだけ離れたところにあるんだから

かなり広い家なんだろうなーとか、確かに思っではいたんだ。

「なんじゃこりゃあ——！」

でも目の前の光景は、俺の想像力を遥かに逸脱していた。ちなみ
に出血したわけではないので心配ご無用。

古いネタを使ったところで俺は悟った。きっとここは『時の大迷
宮』とか、そんな感じのダンジョンなんだ。そうに違いない——と、
思わず現実逃避としゃれ込んでしまうくらいには、常識的に考えら
れない物体がそこで座を占めていた。

「……古い、……復刻、……文藝復古、……ルネサンス？」

そうだ、きつとどこぞの科学者の開発したタイムマシンによって
ルネサンス期から輸送中、出現時間と座標を間違えて設定してしま
ったんだ。そう思った方が夢がある。

俺の混乱を表現したところで事実をありのまま伝えらるとなると、
中世の西洋貴族でも住んでいそうな洋館がでんつと威圧的に鎮座し
ていた。まさか日本でベルサイユ宮苑みたいなビスタを目にする日
がこようとは。

細かな彫刻を施された正面門の両脇に植栽された樹高二十メー
トル以上ありそうなヒマラヤスギは綺麗な円錐形。その向こうに見え
る芝の敷かれた広大な庭も手入れが行き届いており、寝転がったら
さぞ気持ちよさそうだ。

そうだ、肝心の建物の描写を忘れていた。建物自体はレンガの赤
茶色が目立つクラシックな雰囲気。そのせいでルネサンス的な印象
を持ったのだと思う。多分。あと敷地面積？ 何だか想像するのも
面倒くさそうだからパス。きつと一万平米くらいはあるんじゃない？
適当だけど、そんな的外れでもない気がするんだから相当な大き
さだと理解してくれ。

大邸宅に目を向けたままポカンと大口を開けて呆けている俺に何
を思ったのか、稲葉は得心のいったように指を立てると懇切丁寧に
説明してくれた。

「あのレンガは外側だけなんだ。日本じゃ地震とかが多いから総レ

ンガ造りの家は強度の問題上無理なんだって」

どうでもいいわ、そんな事。

「そんなことよりほらっ！ 早く中入ろっ」

「お、おい！ 引っ張んなって！」

なんて言っても止まるはずのない稲葉は白皙の両腕を俺の右腕に忍冬のように絡み付けると問答無用でズンズン玄関へ向かう。通り過ぎた玄関の両開き扉は綺麗な艶を放つ黒褐色の木製で、なんか映画とかで時々見るノックするための輪っかみたいなのが取り付けられていた。もちろんそんなハイスサエティな物品の名前など知るはずもない俺は、ノックするための物なんだから、と便宜上ノッカーとでも呼ぶことにする。

その扉をくぐると、そこにはホールのような空間が広がっていた。聞くところによるとジャン・ローズとかって名前の赤みの強い大理石が床材として使われていて、その艶ときたら一般ピーポーが土足のまま踏みつけることに罪悪感を憶えるほどだ。ホールの正面奥にあるのはY時型の階段で、そんな物はふんだんな金を掛けて製作した洋画のセットでしか見たことないが、ともかくそのこと回廊構造になっている二階が接続している。

今、そのホールを横切っている一人の女性を発見。

「恭子さん、ただいま！」

「あ、お嬢様。お帰りなさいませ」

……メイドがいるよ、メイドが。コイツがお嬢様なのはもう知ってるから、あえては触れない。……でも、本当にいるんだな、お嬢様って。

恭子さんというらしいメイドさんははっきり言って年齢不詳。さすがに四十代はないと思うが、十代と言われても三十代と言われても『ふーん』と納得してしまいそうな女性だった。クールビューティーって言葉が似合いそうな美人で、左目の目元にある小さな泣き黒子がポイント高し。

着ている服は良くテレビでネタになるようなフリフリヒラヒラが

大量についたものではなく、ベージュのワンピースに黒のエプロンといったシンプルなもの。個人的にはこっちの方が好きだ。それ以前に実際にこの世に実在した『メイドさん』という職業に興味を惹かれ御上りさんよろしくしげしげと物珍しげに眺めていたところ、メイドさん——恭子さんと目が合ってしまった。

「あら？ そちらの方は、もしかして……」

「うん、そう！」

どうやら俺のことを知っていたようで、稲葉に元気よく肯定されると恭子さんは恭しく腰を折った。

「ようこそいらっしやいました。大神康司様」

様付けで呼ばれたの初めてだ——とか一瞬考えたのだが、少しして俺は年上の人に頭を下げられているという未曾有の事態に気付いた。選択肢を選べないどころか選ぶべき選択肢を一つも思いつけないうでアタフタしていると恭子さんは頭を上げてくれ、俺の脳ミソはオーバーヒート寸前で急速冷却されていく。冷えてきた頭に入ってきた情報は、やっぱりカチューシャみたいなのは着けてるんだなー、というさして重要でもなく、しかしある意味重要でもある情報だった。重要だろ？ カチューシャ。

稲葉は俺の腕を開放するとくるくる回りながら階段の方へと足を向ける。

「それじゃあ恭子さん。私、着替えてくるから康司君を客間に案内してあげて。あ、あとお茶の準備もお願い」

「かしこまりました」

慇懃にお辞儀をする恭子さんにありがとっ、と笑顔で伝えると稲葉は正面のY字型階段をタタタツと駆け上っていき、かくしてホールには今さっき顔を合わせたばかりで年齢不詳の恭子さんと微かな身動ぎの音まで反響してしまいそうな研ぎ澄まされた空気に全身を緊張させる俺の二人が残った。ホール自体が広く、しかも足元にあるの的一步を踏み出すごとにカッン、カッン、と音を立てる赤み鮮やかな石材。ラグジュアリーな空間に慣れていない俺が肩身の狭い

思いをするのは質量保存の法則くらいには当然の原理だった。

何だか広所恐怖症にでもなりそうな俺の繊細な心理状況を慮ってくれたのか、恭子さんが早々に俺を案内し始めてくれた。

ホールから続く一階廊下へと入り、そこに伸びていたのは百メートル走の世界記録保持者でも十秒以上かかりそうな赤い絨毯の敷かれたストレート。その左右の壁にある扉は数えるのも面倒なほど。漫画などの場合、部屋の数を数えるのが一般的だと思っていたのだが俺は開始十秒も経たないうちに白旗を揚げた。途中途中に飾られている絵画の下にあったプレートに歴史の教科書で見たような画家の名前がちよくちよくあった気がしたが、きつと見間違いだらう。そうに違いない。

完全に価値観をぶっ壊されながら案内されたのは大きな目の扉が目を引き部屋の前。扉の上のプレートに『ゲストルーム』とあるのだからそうなのだろう。

玄関よりも明るい色の扉に指紋など決して付けないよう細心の注意ですり抜けると室内装に目を移して、もう指紋なんてどうでもいいかとニヒルな溜息を吐いた。

六畳ある俺の部屋を十個くらいは並べられそうな広い室内には扉などと比べて桁違いに高そうな家具が揃っていた。ただ、その高級感を正しく伝えられない高校生の貧弱な表現力を許してもらいたい。床に引いてあるのはシックな色使いで幾何学模様の描かれた絨毯。踏むのが申し訳なくなるほど毛の高い絨毯はきつとペルシャとかの工芸品だ。

本革っぽい匂いのするソファが部屋の中心に向かい合って二つあり、それに挟まれているのが、これまたアンティークみたいに熟成された温かみのある木製の低いテーブルだった。壁に飾られている向日葵畑の絵にはもう目を向けないことにした。

簡単に言ってしまうと、この部屋の家具を売りさばくだけでうちのリフォーム十家具全てをワンランクアップさせられそうだということ。荒んできた心を癒すためにも部屋の隅の方に追いやられてい

る棕櫚のグリーンインテリアを視界に納めた。

恭子さんに勧められるままソファに腰掛けるとフリーフォールを体験したかのような落下感覚に襲われ咄嗟に腰を上げてしまったのは俺が色々プアだからか。

貧乏丸出しの俺に特に何も反応を示すことなく恭子さんは一度部屋から退散するとティーセットをカートに乗せて戻ってきて、てきぱきと準備を始めた。その間、無言。

沈黙に耐えかね、玉砕覚悟で何かを話しかけようかと俺が思案し始めたところで、恭子さんの方から話しかけてきた。

「お嬢様からお話は伺っています。あそこの水分神社にお住まいだそうです」

作業の手を止め、俺に向き直ると唐突に頭を垂れる。

そして、あの話題を繰り返した。

「お嬢様を救っていただき、ありがとうございます」

まあ知らないはずはないだろうと思ってたから、いつかは来ると意識していたが、ここまで直球でくるとは。それに、目上の人から頭を下げられるのは心臓に悪い。俺にエリート職は向いていないと諦観しながら、慌てて恭子さんに返事をする。

「い、いえ。あれはたまたまですから」

「偶然であれ必然であれ、お嬢様の命を救っていただいたことには変わりありません」

ようやく顔を上げてくれた恭子さんは俺と目を合わせると、次には辛そうに表情を歪めまたすぐに俯いてしまった。

「縁お嬢様の妹である光お嬢様が、……………自害なされたのは、今日より丁度一週間前でございます」

そんなに最近のことだったのか。

「それからの縁お嬢様は塞ぎこんでしまい、我々使用人とも会話をせず、満足な食事摂らず、お部屋に閉じ籠ってしまうようになりました。そして、いきなり学校に行くと仰られたのが一昨日のことです。…………おそらく、この家では我々に止められてしまうと考え、

それで学校に向かったのだと思います」

なるほど。

「縁お嬢様も光お嬢様も、どちらも優しい方にございます。縁お嬢様の行動も、その優しさ故のものだと我々も理解しております」

それは俺も思い知っている。あの事件の時に。

「学校側から連絡が入り、我々がお迎えに上がったとき、お嬢様は泣いておられました。しかし、その表情にあったのは辛さだけではありませんでした」

恭子さんはもう一度そこで顔を上げ、俺と目を合わせた。

「泣き笑いの表情で、お嬢様が仰ったのです。『私を、それに妹を救ってくれた人がいる』と」

あの時に語った言葉で十分だったかと少し不安もあったが、稲葉の心を多少は癒していたことを実感して俺は安堵の息をつく。

「それから少しずつ、お嬢様から笑顔を見せていただけるようになりました。……そのような経緯があつて、今に至ります」

喜ばしい変化のはずだが、未だ恭子さんの表情は晴れない。

「ですが我々使用人からしますと、ご無理をなされているように見えて仕方ありません。ご自分のなさったことが、どれだけ多くの人に影響を与えてしまうのか。それを知った縁お嬢様は我々にまで心配掛けまいと、もう自分は大丈夫だと、必死に訴えようとしているように思えてならないのです。……お優しいお嬢様のことですからしかし、それはとても危うい事だと使用人一同危惧しております」

俺が思い出しているのは一昨日と昨日の稲葉のテンションの違い。それを見て大丈夫だなんて安心していた俺を過去に戻ってぶん殴ってやりたい。

恭子さんはそこで、ふっと表情を緩めた。

「でも、そのお嬢様が大神様のお話をなさる時は、とても自然で、心から嬉しそうにしていらっやいました。……そこで、です」

恭子さんの顔には決意のようなものが見える。きっと心から守りたいものがある人は、こんな表情を作ることができるのだろう。

「一使用人が差し出がましいとは重々承知しつつもお願い申しあげます」

その力強い目からは、ここからが本題であるというのがひしひしと伝わってくる。

俺も、覚悟をしておいた方がいいだろう。

「どうか、お嬢様の傍にいて差し上げてください」
ある程度は予想していたけどな。傍にいる、か。

そこで恭子さんは俺に一步近づくと俺の両手を捧げ持つように己の両手で包み、潤んでいる瞳を至近距離から見せ付けるように俺の目を覗き込み、続ける。

「お嬢様が大神様のお話をなさる時、それこそが以前までの明るく元気で、そして優しいお嬢様の本来の姿だったように思いました。きつと今のお嬢様にとって、大神様こそが罅割れてしまいそうな心のピース一つ一つを繋ぎとめている楔なのです」

確かに一昨日と昨日とそして今日の三日間で稲葉の色々な表情を見た。無理をしていたのかも知れない。明るく振舞おうと必死に心を奮い立たせていたのかも知れない。でもそれが稲葉本来の感情の発露になってくれたなら、それは俺にとっても嬉しいことだ。

それを見ることができるのなら、きつとどんな努力も報われる。そしてそこに、俺に出来ることがあるのなら、断る理由など一ピコグラムも思いつけなかった。

お願いします、ともう一度深く頭を下げた恭子さんにできるだけ優しく届くように。

「もちろんです。俺に出来ることなら」

その言葉にバツと顔を上げると、俺の笑みを見て恭子さんの方も笑顔を輝かせた。そろそろ涙が目尻から零れ落ちそうだって状態にまで涙ぐみ、ありがとうございます！　と言おうとしたらしいところ——

「お待たせ——！」

稲葉お嬢様が両開きの扉を豪快に開け広げながら部屋内部へと突

貫してきた。

当然ながら俺の目はそちらへと向き、そして致命的な遅れに気がついたのは、その登場から一秒以上が経過してからだった。

……俺の今の状態はどうなっている？ たしか恭子さんに両手を握られ、潤んだ目で見つめられていた気がするのだが。傍から見たら、それはどのような情景に映るのだろうか？

しかし稲葉お嬢様の表情は笑顔のまま崩れない。これは静流さんスタイルか——！ と戦々恐々としつつ何かしらの安心材料を得ようと、とにかく何か手に握ろうとしたところで、先ほどまで働いていたはずの両手の触覚が働いていないことに気がついた。

そちらに目を戻してみると、目の前にいたはずの人物がいない。もう一度稲葉の方に目を移してみれば、和やかに談笑する恭子さんの姿があった。いつの間に移動したのか知覚できなかった上に、その目元には涙の跡など微塵もない。

——これがメイドさんクオリティ……！

また一つ、価値観が打ち砕かれた瞬間だった。もしくは女の怖さを知った瞬間？

和やかに会話しながら、香り高い紅茶をすすりつつ、茶請けのスコーンを摘みつつ。残したまま冷えてしまった紅茶をすぐさま暖かいものに取り替えてくれるという、本場のブリティッシュスタイルみたいなサービスにいちいち感嘆していると、初めて経験したティータイムというものはあつという間に過ぎ去った。

大きな窓の外を眺めてみれば太陽が本日の就労時間を全うしようとしており、最後の仕上げとばかりに振りまく朱色の光で緑の芝生すら染め上げている。

「あ、もうこんな時間なんだね。楽しくて気付かなかった」
そりゃ何より。

「これから歩いて帰ったら遅くなっちゃうから送っていくね」
俺が断りを入れようと口を開く暇すら与えずに、稲葉はテーブル

の隅に置かれていたベルのようなものをチリンチリン、と鳴らす。すると数瞬の後、客間の扉をノックする音がした。

「入って、爺や」

爺やだってよ、爺や。失礼しますと入ってきたのは整えられた白髪と筋肉隆々の肉体が何ともアンバランスな燕尾服を着た老紳士だった。どうでもいいけど、モノクルとか掛けてる人を現実世界で初めて見た。

「康司君を送っていくから、車の準備をお願い」

あ、車なのね。俺はてっきり稲葉が歩きで送ってくれるのだと思い、帰りのことを考えて断ろうとしたのだが、車なら何の遠慮もないな。

「ふう、今日は楽しかったなあ。康司君も楽しんでくれた？」

「おう。……何かのアトラクションのようだった」

俺の的確な比喻に首を傾げる稲葉だが、すぐに苦笑を浮かべた。

「正直言うとな、ちよつと寂しかったんだ。……一人で暮らすには、この家はちよつと広すぎて」

それに疑問を感じた俺。そう言えば、ここに来る際も両親の話をあまり語ろうとはしなかったが……。

「両親は、ここには住んでいないのか？」

結局、訊ねることにした。すると稲葉は少し俯いてしまう。やっぱ失敗だったかと不躰を反省していると、訥々と小さい声ながらも稲葉は話してくれた。前髪の陰になって表情は確認できなかったが「……お母さんは、私が小学生の時に死んじゃった。お父さんは仕事で世界を転々としてて、今じゃどこにいても分らない」

これは部外者が口に出すべきことじゃないのかも知れない。それでも俺はどうもこの父親に不信感を覚えた。稲葉の唯一残された肉親なのだから、それを稲葉の前で言うつもりはないが、俺は稲葉から見えないように顔を顰める。稲葉の背後に控えている恭子さんも目を瞑ってくれているので、見えてはいまい。

「恭子さんとか、爺やとかもいるじゃん」

「……うん、そうだね。皆良くしてくれてる。でも、あまり私と近くなるうとはしないんだよ。きつと、お父さんに言われてるんじゃないのかな？」

恭子さんの表情を盗み見るが目を閉じたまで変化はない。

どう声を掛けるべきか思索したところで、俺に言えることは一つしかないと思い直す。

その時、再び扉がノックされ爺やが車の準備が出来たことを伝えてきた。それを受けて恭子さんが先導する形で客間を後にする。目の前を歩いているのは恭子さんで、俺の隣にいるのが稲葉である。今がチャンスだ。

俺は『傍にいる』という四文字を脳裏に描きながら言うべきことを言う。恭子さんの背中に向かって。もちろん隣の稲葉にも聞こえるように。

「恭子さん。今日の紅茶もスコーンも、すごい美味かったです。俺にとってはどうも常習性がありそうですんで、またすぐに飲みたくなるかもしれません」

あえて稲葉を方は見ずに、恭子さんの背中を見つめたまま。俺の稚拙な頭を振り絞った婉曲表現に恭子さんは振り返ると、顔を綻ばせながら口を開いた。

きつと、返ってくる言葉も一つだろう。

「ええ是非。またいつでもお越しください。我々も、心よりお待ち申し上げております」

用意された車というのは、高級住宅街の車庫とかに収まっているような黒塗りつやつやのヤツで、ボンネットの前の方に良く分からない動物のオブジェのような物が立っていた。

もちろん乗り心地は俺の庶民性を如実に見せ付ける結果となったが、その庶民としてはリムジンとかいう長いのが来なくて本当に良かったと胸を撫で下ろすばかりである。

車に乗り込んだあと、隣に座った稲葉の表情が抑えきれないくらいに緩んでいたが、それを指摘するような無粋な真似はしなかった。

第四話

——どうしてこんなことになってしまったのか。

ここは水分神社の居間。そこに集まっているのは俺と、俺の正面に座っている日向。

そして——

「あらあら」

と困り顔で頬に手を当てている静流さんと、

「お願いします！」

と床に三つ指体勢で静流さんに何かしらの懇願をしている稲葉の四人である。

もちろん理由は分かっている。俺の目の前で素知らぬ顔のまま煎餅をバリバリ咀嚼している都市問題が原因だ。

俺はそんな都市問題から目を逸らすと、外の宵闇に視線を向ける。ここで今一度回想を試みることにしよう。一部、というか大分、伝聞が入っているが悪しからず。

：

……

………

稲葉がお嬢様であるという爆裂アイデンティティが発覚してから一週間が過ぎた今日。いつものように視線で急かされるまま朝食を食べ終えて社務所を出た俺と日向は、並んで階段を降りる。その降りた先、鳥居の下で日向ゾーン崩壊因子であるところの稲葉が待っている光景も見慣れてきた今日この頃であるが、この日に限ってその因子は望まれた結果を導くことができなかった。

思えば、ここから伏線は張られていたのだろう。

階段を降り切ったところで俺と稲葉がにこやかに話している。いつもならここで、日向は何かしら言い残しながらも先に出発するは

ずだったのだ。もちろん、そんな決め事などがあった訳ではないのだが、暗黙の了解でそうなっていたと俺も稲葉も経た時間の流れの中で思い込んでしまっていたため戸惑いを禁じえなかった。

「あ、あれ……？　　かっ葛城さん、先に行かないの？」

「なんで？　　あたしだけ先に行かないといけない理由でもあるの？」

「い、いえ……、ないけど……」

こう返されては稲葉も二の句が継げない。

「だったら早く行きましょ」

次に日向が標的に選んだのはもちろん俺で、その視線によるプレッシャーには『早く行け』のメッセージが込められていることを敏感に感じ取ったマイチキンハートは反抗することをしなかった。

早速通学路を歩き始めると、俺の右隣に日向が寄ってきた。いつも俺の右隣を歩いていた稲葉は負けじと俺と日向の間に身体を捻じ込み強引に入り込んでくる。そんなこんなで稲葉を中心に据えて左隣に俺、右隣に日向の奇妙な隊列が完成した。

何故か必死な感じでしきりに俺に話しかけてくる稲葉には申し訳ないとは思いつつも、俺は朝から様子のおかしい日向の素振りを横目に観察していた。するとどうやら日向は科学者にも似た観察眼で稲葉の姿を見ているようだった。如何な理由かは俺にも分からん。

学校への通学時間一杯その陣形が崩れることはなく、下駄箱の前でクラスの違う二人と別れるまで傍目から見たら俺のハーレムの状況は存続された。が、内実ギスギスしていた空気は朝っぱらから俺のただでさえ貧困な精神力を著しく消耗させたのだった。

三人での登校の様子をクラスの男子に目撃されていたため、教室に到着すると俺が賓客となって熱烈な歓迎セレモニーが催されたが、そんなものは全く以って本題ではない。

噂によると、今日の日向の奇行っぷりは凄まじかったらしい。

ここからは、E組の男子から回ってきた話である。

E組は一時間目の授業が数学だったそう。情報の発信元である男子が先生の板書を一生懸命ノートに書き写している最中、目の前を飛来している小物体に気付いた。さりげなくその発射地点と着弾地点を特定した彼は戦慄する。

それが、葛城日向↓稲葉縁だったのだ。

三人での登校の噂は今朝のE組瓦版でもトップニュースを飾っており、それを見たクラスメイトの総意として『修羅場だ……!』という認識になったらしい。その矢先に起きた事件だったので、男子生徒は『遂にこの牧場みたいな平和なクラスでもイジメ発生か!』と途中からブルブル震えていた。ちなみに日向の立ち位置は牧羊犬らしい。

しかし、よくよく見てみるとその小物体は髪の毛に引っ掛かりやすい消しゴムのカスなどではなく小さく丸めたノートの切れ端で、しかも正確には稲葉の机の上に向けて投擲されていたので、それほど陰湿でもないのかと男子生徒は胸を撫で下ろした。加えて、そこには何か文字が書かれていたようで、何かのメッセージかと思ったらしい稲葉が一枚一枚開いてはノートの隅にそれを書き連ねていった。

授業開始から三十分が経過した頃、ようやく日向の一人小物体投擲競技は唐突に終了を迎え、その試技回数は延べ三十回以上に及んだという。稲葉の机の隅に重ねられたノートの切れ端は、皺が寄っていたこともあって高さ五センチくらいにはなっていた。

それからの稲葉は授業そっちのけでメッセージの解説作業に移る。そのまましばらく時間が経過し、丁度授業終了のチャイムが鳴った頃。

稲葉がグシャッと切れ端の束を握りつぶした。その力の入れ具合といったら彼女の普段の様子からは想像できないもので、白磁の肌に青緑の血管が浮き出ていたそう。

クラス委員が号令を掛け、礼を済ますと同時に稲葉は俯いたまま日向の元へと向かい、その腕を掴むと鬼気迫る勢いでどこぞへと連

行していった。

二人の友人各位は、その際に何をしていたのか、とても訊けなかったそうだ。

――目が怖くて。

二限目は化学。担当の教師が危機感というネジのぶっ飛んだ人だったのか内容も王水を作るとかいふ実験だったため、ここで何かちよっかいを出したら洒落にならない惨劇を引き起こすと懸命にもマトモな判断をした日向は授業中ずっと大人しくしていた。

イジメ疑惑も自分たちの思い過ぎだったのかと誰もがほっと一息ついただろうが、次なる魔獣は三時間目の体育の授業場所であるグラウンドにて伏臥しながら鋭い牙に涎を滴らせていたのだ。

男子女子共にグラウンドでのソフトボールをすることとなった体育の授業。当然男女混合で行うはずもなく、近隣の他の高校生からも広いと羨まれるグラウンドをフルに使って男女別れての試合が行われた。

情報発信元の彼以外にも一時間目の一件で怖いもの見たさに走る蛮勇な男子はいたらしく、その彼らと共に女子の試合を覗いてみると、なんとそこでも悲劇は発生していた。

チームメイトからピッチャーを任された日向は最初、普通に『まあこんあもんでしょ』くらいの力で投げていたのだが、偶然にも相手チームになった稲葉がバッターボックスに入った瞬間、セツポジションが変わったらしい。その堂に入った素晴らしいフォームから繰り出されたのは――

「ぎゃっ！」

と稲葉がらしくない声で仰け反ってしまうほどの顔面近くへと伸びていく剛速球だった。

奇しくも相手チームにいた、ソフトボール部でも次期エースと目されている少女が、青ざめながら「百十キロくらい出たかも……」と呟きつつその場にへたり込んでしまったのはカワイそうだったが

『やはりイジメは発生しているんだ……!』と確信した男子たちもまた、イジメる側の圧倒的な迫力に当てられて身体を小刻みに震わせていた。

授業終了後。稲葉は再び俯き加減で日向の腕を掴むとどこぞへと連れ去っていったが、勿論のこと誰もそこで交わされた会話の内容を知らない。

運動の後というのは三大欲求の中でも睡眠欲がむくむくとその勢力を活性化させる時間帯だ。四限目ということで食欲との激しいデッドヒートを演じたみたいだが、その授業が古文という催眠効率の良い内容であったため、ほとんどの生徒が睡眠欲を優先させた。

体育の授業で獅子奮迅の如き活躍を見せた日向も、もちろん睡魔の誘惑に負けて眠りこけていたので、稲葉にとっては今日初めての安息の時間となったに違いない。

この後に、本日最大の難関が待ち受けているとも知らずに。

昼休み。いつも通り友人たちと机をくっ付けてランチタイムに突入しようとしていたところに声が掛けられた。

「稲葉さん、一緒にお昼食べましょ」

「は？ え、ちょっと……!」

了解を得ないままに強引に椅子を割り込ませ、自分の弁当箱を広げてしまった日向。こうなってはしょうがないと稲葉グループも自分たちの弁当を展開し始めたが、やはりその表情は引き攣っているように見えた。

一緒にお昼と言っても特に日向が会話に参加することはなく、時々自分の弁当の中身を口に運びながら、ただじっと稲葉の様子を観察していたらしい。その時の空気といったら居たたまれないことこの上なかったろう。稲葉を思っているのか、それともただタイミングを逸しただけなのかは分からないが、それでもその場を離れることをしなかった稲葉の友人たちに敬意を表したい。

もうすぐ昼休みも終わるという時刻になって、稲葉の友人たちは

ようやく解放されると表情の緊張を解いた。しかし、そこで口を開いたのが葛城日向。

「ねえ、稲葉さん。そのお弁当って誰が作ったの？」

緊張が緩んだところに突然訊ねられ、稲葉は特に裏を考えることもなく正直に答える。

「え、こっこれ？ 家の人が持たせてくれたものだけ……」

稲葉の口から飛び出た『家の人』というフレーズに眉を顰めた日向はしかし「そう」と短く答えるとそれっきり興味を失ったように自分の弁当箱を片付ける作業に戻ってしまった。なぜそんな質問をしたのか皆目見当もつかない稲葉が消化不良になったのは言うまでもない。

そんな意味深な会話のあった昼休みの後、それを伏線としてどんな奇行に走るのかと注目していた情報発信元の彼だが、予想に反して日向が行動を起こすことはなかった。それを受けて五時間目の授業である歴史の授業中も全く身が入らずにただ悶々としながら過ごしていた稲葉だが、その五時間目終了後に新たな展開が待っていた。稲葉が日向の席の横を通り過ぎた刹那、はつきりと聞こえる声で呟かれたのだ。

「……これじゃ無理ね」

周りで聞いていた人にはサッパリな内容だが、それに人一倍反応したのは渦中の稲葉。離れかけたところから映像を巻き戻すように日向の席までバックで戻ってくる。

「ど、どうゆう意味よ！」

「分かってるくせに」

今日一日の自分の素行、そして脳裏に浮かんた『貞淑』の二文字に、くっ、と稲葉は歯噛みする。それを見てニヤツとした日向は次いで慈愛に満ちた聖女のような優しい笑顔になり、こう語りかけた。「今日、授業が終わりましたら私の家にいらっしゃいませんか？」

面白いものが見られますわよ」

気色悪いだけの口調の変化に身を引きつつも、どう言ったところで、それが何であるか興味津々である稲葉は『しょうがないから聞いてあげるわ』的に斜に構えながら尋ねる。

「ふ、ふん。何よ？」

そして、日向はこう答えた。

「アイツの好みど真ん中の人」

六時間目の間中ずっとトイレでも我慢しているようにソワソワしていた稲葉だが、居ても立ってもいられない心境でありながら無断早退するような不良生徒になる事もできず、明らかに高校レベルでないエントロピーとかいう理論について熱く語る物理教師の必要性を高校一年における熱力学第二法則の重要度と同レベルだと判断してから、ただ早く授業が終わらないかと時計ばかり見ていた。

なんてことを伝聞最後のエピソードとして、また意識は俺の元に戻ってくる。

これらの真偽の程は定かではないが、内容を聞く限り、果てしなく真に近い話であると俺は確信している。何せ、日向だからな。

この噂を伝えに来てくれた男子生徒は般若の笑顔を浮かべつつ碎かんばかりの強力で一度俺の肩を握ると去っていった。きっとこんなものは、これから俺に降りかかる災難のほんの氷山の一角に過ぎないのだろうな。くわばらくわばら。

放課後。俺が下駄箱で靴を履き替えていた時、後ろから物凄い足音が聞こえてきたと思ったら、それは止まる気配などないまま俺へと直進してきた。さすがに避けようかと考えていると目の前でようやく急ブレーキを掛け、しかし止まりきれずに前につんのめりながら俺の腕に縋り付いてきたのは、あの話を聞いた後ではアイツしか考えられない。

「こ、康司君……！」

その顔が上気しているのはただ走ってきただけなのだと思いたいところだが、生憎と俺の脳ミソはそんなに楽観的じゃない。その後

ろから日向が付いて来ている事実からして、どうやら決定的なようだ。

「今日、康司君の家に行っている!?」

ほら来た。チラッと稲葉の向こうにいる日向を睨むが、ヤツは口笛など吹きながらそっぽを向いている。話になりそうにないので目の前にいる稲葉へと目を戻すと、その赤く潤んだ瞳を、懇願するような表情を見てしまい、俺は何も言えなくなった。

「いいよね!」

因幡の素兎を放っておくことのできない俺は根っからの大国主氣質なのだ和理解しつつ稲葉の頭を撫で、それから苦笑すると言葉を返す。

「おう、別にいいぞ」

と、答えた瞬間首に衝撃を感じた。何が起こったのかと視線を下ろしてみれば何者かの細い腕が俺の喉仏を潰している。そんな凶悪ラリアットをかましてきたレスラーはリングネーム『緋糸愛乱弩』で、そのままチョークスリーパーの体勢へと移行すると、さすがに死の恐怖を感じた俺は全身全霊をもってソイツを引き剥がした。

「さっさと行くわよ」

解放するや否や俺の右隣に付く日向を仇敵でも見るような目つきで睨みながら、稲葉は朝の如く強引に割り込むと視線を俺に固定した。

俺と稲葉の会話の途中途中に茶々を入れてくる日向のせいで結局は二人の口喧嘩に終始した家路も終わりを迎え、水分神社の鳥居をくぐると階段を上る。

何も咎められる謂れは無いはずなのに二股をした男の気持ちを理解してしまった俺の心。そんな傷付いた心を癒してくれるものが何かないかと考えを巡らせながら階段を上りきると、そこで――

――水の妖精さんに出くわしました。

俺たちの前にうっかり姿を見せてしまった悪戯好きの妖精さんは

赤と白の燐光を纏って楽しそうに周囲に水を撒き散らしていました。
……まあ、単に静流さんが巫女装束着て打ち水をしていただけなのだが、稲葉の心理的に受けた衝撃を加味して少しばかり脚色した。稲葉のショックに付き合う形で俺たち全員が呆けていた時間は数秒。その間に、静流さんの方が俺たちの帰宅に気付き、こちらへと寄って来た。いつもと変わらぬ澄み切った笑顔を湛えながら。

「あら、お帰りなさい。康司さんに日向ちゃん。二人で揃って帰宅なんて珍しいですね」

ある程度近づいてきたところで俺たちの後ろにもう一人控えているのが目に入り、静流さんは舗道の端っこで力強く咲いた一輪の蒲公英を見つけたように笑むと首を傾げた。

「あら、そちらの方は？」

「はうっ……！」

一歩近づくと仰け反った稲葉に、さすがに奇妙そうな顔をする静流さん。しょうがないな、目の前で見知らぬ少女がエビゾリしてりゃあそりゃ不気味ってもんだ。

あと稲葉。階段でエビゾリすると危ないぞ。エクソシストじゃないんだから。

「あ、あの……？」

不気味でもなお近づこうと努力する静流さんの心意気には感服するのみだが、

「はうっ！」

だから、仰け反るのは止めろって。

このままでは話が進まないなので俺がエクソシスト少女の簡単なプロフィールを話すことにする。

「こいつは友人の稲葉です」

「どうしても遊びに来たいって言うから連れてきたの」

そこで静流さんは得心がいったように頷いた。

「まあ、そうなんですか。見ての通り何も無い所ですがゆっくりしていただくさいね」

神社があるではないですか。俺たちの目の前で変わらぬ偉容を見せ付けている神社が。それとも、神様にさえ謙譲を迫ったのか。なるほど、俺は静流さんこそがヒエラルキーの頂点に君臨する人なのだと畏敬の念と共に納得した。神様だってこんな、寂れた池に一輪だけ咲き誇っている芙蓉みたいな女性の言葉を蔑ろにできるはずはない。

「はっ……、はひっ！」

緊張のあまり返事を咬んでしまった稲葉はその恥ずかしさからか顔を茹で上げられたロブスターのように真っ赤にして再び硬直。怪訝な顔をする静流さんに「コイツ、ちよつとあがり症なんで……」と愛想笑いを返しながら俺と日向で協力して稲葉を社務所の居間へと連行した。

心休まる藺草の香りが鼻腔に入り込んできた途端、放心状態となつてぺたんと畳に座り込む稲葉。俺と日向も似たような疲労感に苛まれて同じように腰を下ろした。

「……あ、あれが………例、の……」

茫然自失状態のまま、稲葉が何事かぶつぶつと呟く。

「そう」

それに日向は頷くと口端をニヤリとつり上げて、それはもう嫌らしい笑みを浮かべた。

「ど真ん中の人」

「はう……っ！」

と再び仰け反り、今度こそは背中から力なく倒れていく。下が畳ということもあって、倒れた際に立った、ぱすん……という乾いた音はどこか悲壮感を感じさせる音色だった。

しかし今度ばかりは仰け反ったまま終わりではなかった。

「ま、負けない……！」

悲壮な決意を胸に秘め、いやむしろ表情にまで出して、起き上がり小法師ばりに倒れてもすぐに起き上がると勢いのまま立ち上がり、玄関へ向かって居間を飛び出していった。

ドタドタという慌しい足音が、玄関の引き戸を開くガラガラという音を最後に周囲の生活音へと紛れていつてから数瞬。いきなり訪れた耳が寂しくなるほどの静寂に身を委ねていたところで、およそ花の女子高生とは思えない挙動、膝立ちのまま卓袱台側まで寄っていつて煎餅を掴もうとしている日向に気が付いた。スカートに皺が寄って見えそうになっているのも構う様子はない。これは単に氣付いていないのか、それとも俺を欠片も意識していないのか。後者だった場合、さすがに凹むかも知れんから答えは訊かない。

俺は出来る限り目を鋭くし、搾り出せる限りの眼力で品性の欠片もなく音を立てて煎餅を噛み砕いている日向を睨む。

「お前が焚き付けたらしいな」

「みふえいふえかぬあうい、あわうえふあつふあかわ」

全く以って通用している気配はなかった。疲れたように眉尻を下げたまま煎餅の咀嚼も止めることはない。

せめて飲み込んでから喋れ。

「ん……っと。だから、私が軌道修正してあげたの。そのうち私に泣いて感謝するに違いないわ」

白い喉を動かして嚥下する姿は歳相応の少女っぽくて悪くはないのだが、口を開いた途端にこの傲岸不遜。台無しだ。

「まあ、この際それはいいい。俺が懸念してるのは静流さんに迷惑が掛かるんじゃないかってことだよ」

静流さんは俺や日向より三つ上で、つまり今年から同級生たちは大学生活や浪人生活などを送っているわけだが、それに加わることなく高校卒業以来神社を手伝っている健気な人なのである。本庁の人間もその健気さに心打たれたのか、特例的にまだ二十歳にもなっていない静流さんに浄階の位階を授けた。分かりづらいかも知れないが、これは本当にすごい事なのだ。

しかし、そんな敬意を露ほども感じていない日向は苛立ちというか落胆というか、とにかくそんな感じに顔を陰しくすると、これ見よがしに嘆息した。

「そこまでシスコンだとさすがにキモい」
うっせー。

俺の反抗するような視線も枝垂柳みたいに軽ーく受け流し、日向はもう一つ嘆息すると重そうな瞼を閉じた。

「あのスーパーパーお姉ちゃんの事だから、大丈夫だと思うけど？」

筋違いな劣等感でも感じているらしい日向の言葉に俺はムツとすると、立ち上がる。

「あのスーパーパーお姉ちゃんだからこそ、大丈夫じゃなくても大丈夫だって言いそうなんだろうが」

外の様子を窺うために、そのまま居間から出て行った。

居間の扉を後ろ手に閉めているとふと聞こえてきた、むくれたような「何よ……」という声には男心に少しかだけキュンとしたりはしたが、それを言っただけでやる気はさらさらない。

玄関から一歩外に出てみると、何故か境内の空気は緊迫していた。その妖怪緊張さんの発生場所は左手、手水舎の柱の影だった。

「じー……………」

柱から顔を半分だけ出して、じー、とか口に出しながら何者かへ視線を向けているのは稲葉その人で、そこまであからさまだと隠れる気が全く無いのは丸分かり。逆にむしろ自分の存在を意識してもらおうとしているように思えて仕方ない。

もちろん、そんな伊弉諾尊を黄泉から追いかけてきた伊弉冉尊みたいな不気味な存在を看過できるほど静流さんもオトボケさんではなく、もちろん笑みの形のまま顔を引き攣らせていた。持っているものは既に桶と柄杓ではなく、一本の竹箒。どうやら掃除を始めたところのようだ。

その竹箒の柄をきゅっと握り締めながら、伊弉冉尊の方へ顔を向ける。

「あ、あの……何か？」

問答無用で排除ではなく、気丈にも対話を試みる静流さんの慈愛の心には感服するのみです。

対する稲葉は、そんな慈愛の心を小学生ピッチャーの球を本気で打ちにきたプロ野球選手のように簡単に弾き返した。

「私のことはお構いなく。どうぞ作業をお続けになって下さい」

「は、はあ……」

いくらなんでもそれは無理があると思うぞ。

稲葉の言葉が丁寧になっているのは、せめてもの対抗心か。

最初はやはり気になって仕方がない様子で固い動きだった静流さ
んだが、しかしだんだんと表情にも笑顔が戻り始め、遂には鶯の鳴
き声などよりよっぽど耳に心地いい鼻歌まで歌い始めてしまった。
こうなったのなら特に問題は見出せず、俺はしばらく静観すること
に決めた。

今、静流さんが遂行しているのは境内の掃き清め。境内を綺麗に
保つのも水分神社の巫女さんである静流さんの役目なのだ。

ここ水分神社は出入り口の階段方面以外三方を杉の林に囲まれて
おり、つまり山の土砂面が広がっている。風の強い日などは花粉と
一緒に砂埃や土埃も大量に舞い込んでくるのだ。それを履き集めて
境内を清め、しかもその土を山へと返す。大山祇神の御戯れにも笑
顔で付き合う静流さんの人間性は聖徳太子の比ではない。

さっさかさっさか掃いていき、三十分もしない内に境内ほぼ全域
を終わらせてしまったその手際の良さに「はう……！」とショック
を受けて目を虚ろにしている稲葉は申し訳ないが面白かった。

竹箒を片付けた静流さんが次に向かったのは拝殿。三角の屋根が
三つ横に並んでいる、いわゆる水分造りの本殿のすぐ前に建ってい
る拝殿の掃除だ。叩きでかなり年期の入った掛け軸などの文化遺産
が被っている埃を落とし、それから柱や梁に付着した埃も落として
いく。傷つけないよう細心の注意を払いながらも素早い手際はさす
がで、稲葉はやはり鳩がゴム鉄砲を食らったように面食らっている。
次いで、拝殿の掃き清め。落とした埃を毛先ふさふさな箒で集め
ていき、塵取りで回収すると社務所のゴミ箱に持っていく。その間
約十分。高校生のダラダラ清掃活動とは比べ物にならないハイペー

スだった。しかも文句の付けようもないくらいにキレイ。

稲葉に目を向けてみれば、もう仰け反る体力も残っていないのかただ死んだ魚みたいな目でボーっと静流さんの背中を追うことしかできないでいた。やがてその場に崩れ落ち、制服が汚れるのも気にせず膝を抱えて地面に『の』の字を書いている。いじけ方はやけに古風なんだな。

だが、これで終わりでもない。

用具を片付けた静流さんは一旦俺たちの前から姿を消し、数分後にややしっとりした姿で艶やかに登場した。きつと掃除の後なので襦をしてきたのだろう。これからする事を考えたら、それは当然の事だな。

拝殿に戻ってきた静流さんは正面――本殿の方を向いて中心近くに正座すると、榊の枝に紙垂を付けて作った玉串を持ち、祝詞を唱え始めた。

「――祓い給へ 清め給へ 幸はへ給へ」

突然聞こえてきた、先ほどのおっとりしたものとは違う静流さんの声に稲葉も顔を上げその背中を見る。きつとそこにある種の畏怖を感じた事だろう。俺も初めて聞いたときは驚いた。

「――祓い給へ 清め給へ 幸はへ給へ」

これは祝詞の中でも最も簡易なもので、大祓詞や祓詞はおじさんお婆さんが奏上することになっているので、静流さんの担当はこれになっている。しかし、俺はこの短い言葉に確かな力があるように感じる。齢十八、今年で十九歳の少女が浄階の位階を賜ったのも、相応の理由があったってことだ。

「――祓い給へ 清め給へ 幸はへ給へ」

三回唱え終わると玉串を神棚へ奉納し、それからスッキリした笑顔で静流さんは立ち上がった。俺もそれを見届けると社務所へ取って返し、出ていった時と同じ体勢のまま随分減った煎餅の山を更に崩している稲葉を横目に見ながら座る。その少し後に、うな垂れた稲葉が覚束ない足取りでとぼとぼと戻ってきた。俺の隣に腰を下ろ

すと、ぎりぎり聞こえるくらいの声量で声を絞り出す。

「……………あーゆー人が好みなの……………」

非常に答えにくい質問。日向までが俺に鋭い視線を向けてきていた。

でも俺は正直に答える。本心だからな。

「嫌いな訳はないよな」

「あは……………あ……………：……………そうだよねー」

「……………お、おい？」

意識はあるようだがこっくりこっくり舟を漕いでいる状態の稲葉は、なんだか危うい感じだった。心配だが、どう声をかけていいのか分からない俺。そんな時に居間にやってきたのは、無意識の内に稲葉をこんな失意のどん底に叩き落した罪作りな女神様だ。

「ああ、そろそろお夕飯の支度をしないといけませんね。稲葉さんも、よろしければご一緒にどうですか？」

話しかけられるまで、この場に静流さんがいたことに気付かなかった稲葉は、突然の事に復活するとなけなしの笑顔を浮かべた。その潔さは賞賛に値するな。

「あ、……………はい、是非。ご相伴に預かります」

「分かりました」

潔白な笑顔で頷くと休む間もなくお勝手へと消えていく静流さん。その憎める要素の全く見当たらない清廉な女神様の笑顔は今の稲葉には少しばかり堪えたようで、静流さんが見えなくなった瞬間にニヒルな笑みを浮かべると、またゆるゆーらし始めてしまった。

それからやって来たおじさんは稲葉が夕食に同席する事を笑顔で承諾してくれ「ゆっくりしていきなさい」と粋な言葉を掛けるとテレビを付けてスポーツニュースを見始めた。鼯員の野球チームが今日のデイゲームで勝利を収めたのかチェックするのだろう。おばさんは静流さんを手伝うべくお勝手へと向かった。

俺の鼯員のチームは今日はナイトゲームなので、午後六時半過ぎの今はまだ試合開始直後だ。途中経過が出ないかなーと待っていて

もやはり一、二回までしか進行していない試合を伝えるほど時間も無限ではないようだ。俺はそのままテレビをボーッと見つ、日向は夕食がちゃんと入るのか見ている方が不安になるほど今も煎餅を咀嚼しつつ、稲葉が自宅へ夕食をご馳走になる旨を携帯で伝えた頃、お勝手からおばさんと静流さんが夕食を運んできた。

ご飯や大根の味噌汁を始めとして彩り豊かな筑前煮、風味豊かなほうれん草の胡麻和え。五人分しか買っていなかった鯖の味噌干しは、日向がこれ幸いと稲葉と半分こする事になった。稲葉よ、そんな申し訳なさそうな顔する事はない。コイツは生粋の肉食獣なのだ。「――たなつもの 百の本草も あまてらす 日の大神の めぐみえてこそ」

「――「いただきます」――」

料理が出揃うと、いきなりおじさんが祝詞を奏上し始め、それが終わった途端家人全員で食前の挨拶をする。突然の祝詞に驚き、その後の俺たちの揃いっぶりも唾然と見ていた稲葉だが、次の瞬間には自分は参加していなかった事にオロオロしだした。

こんな古い習慣を今も続けているところは少ないだろうから稲葉のその反応も当然で、もちろんそれを咎める人間などこの場にはおらず、おじさんが「別に大丈夫ですよ」と苦笑すると、いつもより賑やかな晚餐が開始された。

最近ちよつと多すぎる気もするゴールデンタイムのクイズ番組の問題に一喜一憂できる家庭というのも珍しいだろう。特に途中からは、あからさまに稲葉を意識して正答をひけらかす日向と、その勝負を受けて立った稲葉の一騎打ちとなり、その白熱加減はそのまま食卓の笑声に昇華した。

途中、和やかに二人の様子を眺めていたおばさんが急に立ち上がって稲葉の元へ向かい「かわいいかわいい」と連呼しながら頭を撫で撫で愛玩し始め、撫でられた方の稲葉の赤面っぷりがさらに場を和ませると葛城家の宴も酣を迎えることとなった。おじさんはそれら全てを暖かく穏当な笑顔で見守り、目を細めている。

最終的には混沌の様相を呈してきたようにも思う盛宴も終わりを向かえ、今度は稲葉も参加すると意気込んでいる食後の祝詞をおじさんが奏上した。

「――朝よいに 物くうごとに 豊受の 神のめぐみを 思え世の人」

「――「「「ごちそうさまでした」」「」」」

全員揃わせることができ、稲葉も存外に嬉しそうだった。

そして夕食後。おじさんはまだ仕事が残っていると執務室に戻ってしまった。米粒一つ残さない家族の食べっぷりに顔を綻ばせたおじさんは食器を持ってお勝手へと向かう。いつも通り手伝いを申し出た静流さんだが「あなたもたまにはゆっくりしなさい」とやんわり断られてしまったため、居間には四人のティーンが残された。

ずずーっと四人揃ってお茶を啜る。いいな、こうゆうの。

笑顔のままの四人は誰も口を開かず、しかし決して居心地は悪くない。稲葉もそんな静寂に身を委ねていた一人だったが、何か大事な事を思い出したようにバツと顔を上げた。

それから見つめたのは――

「静流さん」

「はい？」

呼びかけに笑顔のまま首を傾げるハイスpekク女神様だが、呼びかけた本人である稲葉の次の行動を見て目を丸くする事になる。

ガバツ！ と。床に三つ指をついたのだ。そして言い放った言葉は――

「弟子にしてください！」

………

………

………

ふう、回想終了。長い道のりだった。

そんなこんながあって稲葉は床に三つ指、静流さんが困ったよう

に頬に手を当てる状況が発生したわけだが、それは今も継続中である。

「弟子、ですか？」

「はい！」

「私の、ですか？」

「はい！」

曲解のしようも無い簡潔な返答しか来ず、静流さんはもう一度「あらあら」と困り顔で漏らした。稲葉はそれを見て返答が拒否に傾いているのではと思ったらしく、声を大にして申し立てる。

「もちろん私に神社の重要なお仕事が勤まるとは思っておりません！」

「……でしたら、何について教えてほしいのでしょうか？」

具体的な部分を訊かれ、一転していい方向に向かいつつあると判断した様子の稲葉は一気に捲し立てた。

「お掃除とかお料理とかその他諸々の作法とか！ 静流さんの技術を是非伝授して頂きたいんです！ お邪魔になるような事は一切致しません！ お願いします！」

再びガバツと頭を下げる稲葉を目線を下げて見つめつつ、しかし静流さんの口調は穏やかなものに戻りつつあった。

「それは、私のお手伝いをしてくれる、と解釈してもいいんでしょうか？」

「構いません！」

「あまりお給料は出せませんが……」

「構いません！ むしろ頂くわけには参りません！」

ここが正念場だと三つ指に額を擦り付けるようにした稲葉。どうも御老公に平伏す無頼漢のように見えたのは秘密だ。

でも、その嘆願という形で表現された必死の努力の甲斐あってか、静流さんの表情は遂に笑顔に戻った。きっと稲葉の必死な表情を彼女の熱意だと理解してくれたのだろう。

「わかりました」

稲葉は顔を上げるとパツと顔を輝かせる。まるで静流さんの笑顔が連鎖したかのように花で例えるなら夏の日差しに真っ向から立ち向かう向日葵のような眩しい表情だった。

俺も一緒にニコニコしていると、正面から円月輪（醤油味）が俺の眉間を切り裂かんと飛んできたが、それをかわすことなくキャッチし、そのまま口に運んだ。食べ物粗末にしたら女神様から天罰が下ることを俺は知っている。こんな瑣末なことで女神様の手を煩わせることもないだろう。

その後。車で迎えに来てもらうという稲葉は到着の連絡が入るまですずと静流さんと話し込んでいて、時々俺をその話題の中に引き摺り込んでいた。残された日向はというとブスツとしながら、やはり煎餅をバリバリ咀嚼していて、心なしかさっきより大きく感じたその音はコイツの精一杯の強がりだったのかもな。

きっと今の若い人たちは巫女装束っていったらただのコスプレの一分野だと思ってるんだろうな。それを今日思い知った。

稲葉が静流さんに弟子入り志願してから二十四時間も経過していない翌日の放課後。水分神社の居間にて静流さんのお下りの巫女装束に身を包んだ稲葉は微笑んでいた。

「どう？」

その場でくると回って見せる。そして、こう言ったのだ。

「似合うかな？」

「似合う似合わないを議論する服装じゃないでしょうが」

「……………♪」

日向の言葉はどうやら稲葉の選択的透過性を持った鼓膜によってシャットアウトされるようで、視線を俺に固定したままルンルン気分は曇らない。しかしながら、今回ばかりは日向と全くの同意見である俺は答えに窮した。

思った通りのことを正直に述べるのは俺のチキンハートが否を提示してきて、しかも稲葉の期待に満ちた目で見つめられては、こう

返すしかなかった。

「ま、まあ……いいんじゃないか？」

「えへへ、やった」

「……………」

今回ばかりは日向に罪悪感を感じざるを得ない。真横から向けられる刺々しい視線も受け入れよう。稲葉は巫女装束の神秘性など何一つ理解していない。今度、丸一日かけてじっくり教えてやる事しよう。

数分間、嬉しそうな稲葉、俺に胡乱な目を向ける日向、そして気まずい俺。三者三様の表情で過ごすと、やがて静流さんがやってきて稲葉と共に外へと向かっていった。二人とも黒髪ロングで、元々雰囲気似ていることもあってじゃれ合っている姿は日向などよりよっぽど仲睦まじい姉妹のように見える。いやはや、目の保養だ。

二人の足音が完全に社務所内から消えた。変わらずブスツとしている日向は卓袱台の前に座り自分でお茶を淹れつつずずーと飲んでいる。お前が淹れたらどんなに上等なお茶だってひねくれて番茶になっちまうに違いない。だからそんなに渋い顔をして啜ることになるんだ。番茶も出花とは言うが、コイツにもそんな時期が来ることを願ってやろうか。

それにしても、だ。俺は前々から気になっていた事をここで訊いてみることにした。

「お前は静流さんの手伝いしないの？」

「何でよ？」

疑問に疑問で返すのは感心せんな。この際はっきり言ってやろう。

「このまま放つとくと、後々ますます入りづらくなるぞ？」

「何がよ？」

意地っ張りめ。痺れを切らした俺は立ち上がると日向の腕を掴む。そのまま引っ張り上げて玄関まで連れて行き、そこで背中を押してやった。

恨めしそうに睨んでくるが、そんなの屁でもない。

「お節介」「結構だ」

存外素直に出て行った日向は一瞬だけこちらを振り向いて笑顔を見せた気がして、それに満足した俺は居間に戻ると先ほど日向が急須に注いでいたお茶の残りを自分の湯飲みで飲み、一息ついた。

ズズー。

「ふうー……」

……………静かだ。

……………。

……………俺も何か手伝おう。

焦っているつもりはなかったのだが、何故だか急に寂しくなった心が運動神経を活性化させて俺の歩くスピードを速めたように思う。玄関が出る頃にはほとんど小走りになっていた。俺が出てきた瞬間に日向が噴出していたのは癪に障ったが、ここで何かを言い返したらさらなるトラウマを負う可能性があったため反論することはしなかった。

静流さんより手水舎の掃除を仰せつかった俺は、黒色に近い石肌のぬるみをたわしで擦る作業に没頭する。

普通の水道水よりも冷たく感じるその水に触れている間に、この火照った顔が元の色に戻る事を信じて。

第五話

俺は結構金曜日にやる気を出すタイプである。別に誰かと決戦の予定がある訳ではないのだが、何せその日をやり過ぎれば待っているのは二連休。授業一時間毎に俺の頭の中にある時限爆弾みたいなタイマーは確実にその数字を小さくしていくし、どこか浮き足立っているクラスメイトの様子も俺の金曜日気分を盛り上げるターメリック、コリアンダー、カルダモン……つまりスパイスになる。

本日は六月二十九日の金曜日。しかも明日に大きなイベントを控えている金曜日だ。この日の授業にかける意気込みも半端ではない。午前中に待ち受けていた最大の関門であった英語も突破し、現在は一週間を戦い抜こうとしている戦士たちも小休止して兵糧を漁る時間帯、昼休みだ。

俺はいつも通り近藤斉藤と机をくっ付けると、静流さんのお手製弁当を有りがたく頂いていた。二人は登校時にコンビニに寄って確保した弁当。いつもはお握り二、三個とかで俺の弁当を虎視眈々と狙っているのに、今日はコイツラも一週間の最後という事で奮発したようだ。

「そういえばさー」

しょうが焼き弁当のメインディッシュを初っ端にほとんど消費しながら口を開いたのは近藤だ。

「明日、お前んとこの神社でお祭りあるよな？」

正しくはお祭りではないけどな。

「まあ、あるっちゃあ、ある」

そこで近藤斉藤は揃って俺に顔を近づけると、生暖かい吐息混じりに訊いてきた。

「行ってもいいよな？」

……誠に残念ながら、断る理由が無い。神社としての意義にも反する。

「……………来たきゃ、来りゃいいじゃん」

「それだよ、その間」

二人は椅子に座り直すと嘆息し、割り箸で俺を指してきた。綺麗に割れてないところを見ると安物の割り箸か。まあコンビニなんだから当たり前か。

「いつも口ではいいって言いつつも『来んじゃねー』オーラ出しまくりだよー。俺たち行ったら賽銭も奮発するのになあ」

「全く全く。あんなに素晴らしいものを見せていただけるのなら賽銭に百円様を投げる事も惜しくはない」

奮発して百円かよ。祈願成就を神様をお願いして、そうして得た心の平静の対価こそが賽銭だ。心象風景の荒れ果てているお前らなら諭吉さんを奉ったって安いくらいだろう。以前にコイツラを水分神社にうつかり遊びに來させてしまった時に、ウチに降臨された女神様を拝見して味を占めてしまったらしい。今では折に触れて神社に行っていくかとせがんでくるようになった。勿論全て断ったがな。ただ、そんなに高い額を提示したら今より更に額が安くなりそうなので慎む。どうしたって神社の門戸は開かれているのだ。行事は基本一般参加OKだし、それに託けて結局は来るだろう。ならば少しでも神社のためになってもらうのが賢明そうだ。

「賽銭百円以上、御神籤一回、御守り一個が条件だ」

「ふふん、了解了解」

「よっしゃ拝むぜー！」

何をだろうな。頼むから神様であってくれよ。

もしかしたら神様に失礼になるような二人の参詣を認めてしまった私めをどうかお許しください。

明日に控えた行事は、俺がこちらに来てから初めて参加する大きな催しだ。それ故に俺のやる気も半端ではない。そのため早いところ帰って準備を手伝おうと、掃除があるらしいE組の二人を待つことなく俺は家路についた。

普段より早く水分神社に到着し、玄関を開けたところで俺は珍しいものと遭遇した。

「あ、お帰りなさい康司さん」

その人は静流さん……なのだが、服装が見慣れないものだったのだ。

上下ピンクホワイトのジャージにたった今履こうとしていた靴は動きやすそうなスニーカー。巫女装束の方が見慣れているのもどうかと思うが、やはりこれは新鮮だった。

「そのカッコ、どうしたんですか？」

「これから茅を刈りに行くんです。ちょっと足りなくなっちゃいます」

明日のあれに使う茅か。確かに静流さんの足元には竹籠と鎌が置いてあった。

「でも、あれはもう完成していたのでは？」

「少し危うそうなところを発見したんです。なので補強用になるほど。」

「でしたら俺も手伝いますよ」

「そうですか？」

助かります、という嬉しい言葉を背中に聞きながら俺は加速装置を使った……みたいな意気込みで自分の部屋に飛び込むと、同じく動きやすいジャージ上下に着替えて玄関へと取って返す。すると俺の分の鎌を用意して待っていてくれた静流さんに全身全霊をもって感謝の意を表しつつ、並んで玄関を出て行った。

向かう先は水分神社の階段を降りて数分歩いたところにある茅の群生地。最近あまり見なくなったが、幸いにもこの場所にはまだ茅の生える原野が残っていた。

一昔前までは池だったらしいこの場所は栄養が豊富らしく、早いうちに茅が入ってきてくれたお陰で今では一大群落となっている。水分神社では毎年この時期になると、ここから茅を拝借しているそう。元々が水分神社に寄進された神領なので、使っても何ら問題

ないらしい。

百メートル四方はありそうな広大な土地。そこから毎年使う分だけを一区画として刈り取って、次の年はまた別の区画から刈り取る。それを繰り返す事で俺たちに半永久的な茅を供給してくれているので、つまりは区画毎に現在の茅の高さがまちまちなのだ。

既に刈り取った今年の分の茅。その次に長い区画から少しだけ確保する事にした。

俺と静流さんは並んでしゃがみ込み、茅の生長点ごと刈らないよう気をつけながら集めていく。それを一人十株くらい刈り取ったところで、静流さんからOKサインが出た。

「このくらいで、もう大丈夫ですよ」

「了解です」

凝り固まった肩を回していると、隣では静流さんが両手指を組んで大きくノビをしていた。んん、なんて可愛らしい声を漏らす横顔は満足感に満ちていて、見ているこちらまで幸せになれそうだ。俺の場合、静流さんの傍にいる時はいつも幸せになってますがね。

いつしか太陽も傾いており、今では俺たちの真正面から挑みつけるようにオレンジ色の光線を放っているが、爽やかな表情の静流さんは『本日もお勤めご苦労様です』と語りかけるように淑女の笑顔を向けていた。太陽だって益々赤くなるってもんだ。

「感謝、しないといけませんね」

唐突にそう切り出したのは静流さんで、視線は太陽をお見送りする方向のまま。

本当に突然の事だったので、俺は反応を示すのに多少時間が掛かった。

「……、……何にです?」

「何もかもに、ですよ」

額に滲んでいた汗をジャージの袖で拭いながら、

「私たちに恵みを分け与えてくれるこの大地に。私たちを今日も生かしてくれるこの世界に。そして――」

それから、俺だけにそのとびっきりの笑顔を向けてくれた。

「いつも私を助けてくれる、康司さんに」

これ以上の殺し文句ってあるのだろうか。

「それに私は、自分の生い立ちにだって感謝しているんです」

はにかみながら胸元で指を組む。なんだか気恥ずかしい事を告白するように。でも太極の笑顔は消えることはない。

「両親は私が大学に行かなかったことを気に病んでいるみたいですけど、それは私自身が決めた事です。私の進みたい道はそんな所ではなく、私の生家にありました」

そう言って水分神社のある方角に目を向ける。ここからでは背の高い杉林の影になって見えないが、確かにその表情は感謝に満ち満ちていた。

「こんな素敵な気持ちを教えてくれた両親に、そして『神道』というものに、私は本当に感謝しています」

俺は今まで、この人は強い人なのだと、漠然とそう思っていた。きつと大変な努力をして今の自分になったのだと。だが、どうもそんな難しい話でもないようだった。

きつとこの人は誰よりも生きていることを楽しんで、満足している。

静流さんの笑顔の裏にあったのは強さだけじゃなかったのだ。勿論強さもあるだろうが他にも誇りや喜びなどなど、それらの明るい感情が合わさることとで面に出てきたのがあの瑞々しく優しい笑顔だったのだ。

もしかしたら、それらの言葉は世界の暗い部分を知った稲葉からすると受け入れられるものではないのかもしれない。でも、だからこそ俺はこれからも二人と一緒にいて欲しいと思う。静流さんの世界はポジティブに傾き、稲葉の世界はネガティブに傾いている。相容れないように思えるこの二つの価値観をお互いに認め合えた時、きつとそこには素敵な優しさが生まれるような気がする。

「……そうですね」

俺は感慨深げに呟いて、静流さんと目を合わせると微笑み返した。やっぱり静流さんは凄い。その認識を新たにして、俺は今の会話の余韻に浸るように反芻していく。そして結果——顔を赤らめる事になった。

……何だか、俺今めっちゃ恥ずかしいこと考えなかったか？ 素敵、なんて柄にもない言葉を思い浮かべた気がするぞ。そして極め付けが、

「それに、もし私が水分神社に生まれなかったら康司さんとの『縁』も繋がらなかったんですもんね。やっぱり、感謝感謝です」

もう正面から静流さんの顔を見られなかった。

「あれ、どうしたんです？ 顔が赤いみたいですけど……」

素でこういう事を聞く人なのだ、静流さんは。元はといえば貴女の気恥ずかしいセリフが原因だというのに。

「ゆ、夕日のせいですっ！」

我ながらバツチリな言い訳をして、足元の竹籠を持つと先に歩き出した。小走りに隣に並んでくる静流さんは不思議そうに首を傾げていたが、もちろん本当のことなど言えようはずもない。

ただ、二人並んで夕焼けの中、影を重ねつつ歩く時間は、そう悪いものではなかった。

遂にやって来た明くる日。六月の晦日である。俺は遠足前日の小学生のように眠れなかったのだが、この神社での初めての大きな行事だ。顔を洗って気合を入れなおした。

本日水分神社で開かれるのは『夏越の祓』である。これは特にこの神社特有の行事などではなく、遍く全ての神社でこの日に執り行われ一般参詣者の穢れを祓う大祓の神事だ。

そして、その一番の目玉といえば——

「「でっけええええええええええ！」」

と近藤齊藤の友人二人が驚嘆しているでっかい物だ。

「なあなあ、何だこれ！」

「これは『茅の輪』だ。茅で作った輪っか。これをくぐって穢れを祓うんだ」

はしゃぐ友人二人に、正装の俺は苦笑した。

「なあなあ、もうくぐっていいのか？」

「そうだなあ。正しいくぐり方とかあるんだけど、簡単なのでいいよな。お前らだし」

「ん？ 今馬鹿にされた？」

「気のせいだ」

肩をすくめると俺は『茅の輪』を示した。

「普通に一方方向にくぐるだけでいいんだ」

「へえー、簡単だな！」

「もっと難しい作法とかあるんだと思ってた！」

やはりこっちで正解だったか。流石は学校でも伝説のアホ二人。

おっかなびっくり足を上げ下げしている可笑しな男二人に聞こえないようもう一度苦笑を漏らしながら、俺は境内の中を見渡した。

予想通りだが、やはり若い人の姿は年配の方に比べて少ない。俺と関わっているのも他の人より多少神社について知識のある二人も今日の行事が『夏越の祓』だって知らなかったし、それだけ若い人の意識から神社が離れてきたってことなのか。関わっている人間としては寂しい限りだ。午後からおばさんが『夏越の神楽』を舞う予定になっているが、そこで人が増えるとは神社離れを痛感した今では考えにくい。

寂寞の思いに湿りがちになった心を振り払うように騒がしい友人二人に目を戻してみると、くぐり終わってから何かを探すようにあたりをきよろきよろしていた。そして、もう既に人だかりができている一区画で視線を固定する。そこで俺は溜息を吐いた。

そうだ、そもそもコイツラだって『夏越の祓』自体が目当てじゃないんだった。

きつと驚いた事だろう。コイツラの目当ての人の他に二人も、知っている人物が巫女服着て接客しているんだからな。完全に停止し

てしまった二人の元へと俺は向かうと、その肩を叩いてやった。瞬間、電流を流された蛙のようにビシッと背筋を伸ばす。

「二人とも、お参りは済んだのか？」

「あ、ああ。ちゃんと百円入れたぞ」

「なら後は御神籤と御守りだな」

喉を鳴らした二人の背中に手を添える。せいぜい神社の経済を潤してもらおうか。

「そういえば、最近の神社ってどこも財政が厳しいらしいぞお。たくさん買ってくれたら売り子も喜ぶだろうなあ」

そう言って押し出す先は、人だからのできている方向。静流さんと日向に加えて稲葉までが売り子をしている授与所の方だった。

悔しいが、近藤斉藤と同じ考えの人間が多いこと多いこと。完全に神社本来の意味を忘れているな。ここはコスプレ会場じゃないんだっつうの。

俺は『茅の輪』の側に控えてくぐる人をサポートしながら、もし授与所でフラッシュが焚かれたらその瞬間、懷に隠してある針でカメラを打ち抜き鉄くずに変える決意を固めておく。まあ幸い、その辺りは弁えてくれたのかフラッシュが焚かれることは無かった。

ちらちらと授与所の様子を窺っていると、気付けば神楽殿でおばさんが『夏越の神楽』を舞い始める時間になっていた。

優雅に舞いながら、しゃんしゃんと神楽鈴を鳴らす。

そちらを見てみれば熱心に見物する参拝客もいることにはいるのだが、やはり圧倒的に多いのは何事かとそちらを一瞬だけ見てすぐに興味を失ったように顔を逸らす人の姿だった。そして、そのほとんどが若い人である。

こんな伝統芸能には興味なんて無いんだな。

認めたくないものだが認めざるを得ない。きっとこれが現代人の普通の感覚なのだ。嘆かわしい事に。

ふと上空を横切った祥雲の影に取り込まれたので見上げてみると、青空の中に縁起の良さそうな鰻頭型の雲がフワフワ浮いている。そ

の周りは確かに澄み切った蒼穹のはずなのに、俺には玄雲に覆われた灰色の空にしか見えなかった。

耄碌が始まったのかね。

「……………何だかなー」

「どうかなさいましたか？」

「ぬおう！」

アンニュイな感じで考えていたボヤキが口から出ていた事に話しかけられてから初めて気付いた俺。そして、話しかけてきた人物は――

「きよ、恭子さん！　いらしてたんですか！」

「はい、お嬢様のご様子を窺いに」

「……さ、左様でございますか」

あれから何度か足を運んだ稲葉邸にて聞きなれた丁寧語だが、やはり聞いているとこちらまで丁寧になってしまふ。まあ丁寧になる分なら問題ないか。

恭子さんは早速稲葉のいる授与所に目を向けるかと思いきや意外、左手方向で行われている神楽に見入っていた。

「あれは……神楽というものですか？」

「え？　え、ええ。そうですよ」

「ですが、神楽というのは神を鎮めるために舞われた演芸だと聞き及んでいるのですが、それを何故参拝客の穢れを祓う『夏越の祓』で舞う必要が？」

興味を持ってきているらしい。しかも質問が結構ハイレベルだった。答え甲斐もあるってもんだ。

「それはですね。この行事自体が元々邪神を和めるために行われた神事だったからなんです。むしろ『茅の輪』くぐりの方が後から付け足されたものですね。だから『夏越の祓』で『夏越の神楽』を舞うのは至極当然のことなんですよ。ちなみにこの『夏越』という名称も『和める』から付けられたとされています」

ふむふむ頷きながら「そうなのですか」と真剣に聞いてくれてい

た恭子さんは今の俺にとってこの上ない精神安定剤となった。例えば一時だけだったとしても実際に神社に興味を持ってくれている人を見ると心が癒される。

俺が心の中で謝意を述べていると、恭子さんは次こそ人垣のできている授与所に目を向けた。その人の多さに目を丸くしている。

「盛況のようですね」

それは単純な感想か、それとも裏事情を察した上での皮肉か。恭子さんの人柄を考え、俺は前者であると信じる事にする。

「三分の一はお宅のお嬢様のお陰ですよ」

「そうなのですか？」

爪先立ちになって授与所内を覗こうとする恭子さん。目的のお嬢様を発見する事ができたのか、ふっと表情を緩めた。

「ふふ、楽しそうです。ここでの生活はお嬢様にとっても充実なさっているようですね」

「だといいんですけど」

俺は初めて稲葉邸にお邪魔した時に恭子さんと交わした会話を思い出していた。同じことを思い浮かべていたらしい恭子さんと目を合わせるとお互いに微笑を交換した。

確かに稲葉は水分神社に来るようになってから少しずつだが変わってきたように思う。俺はそれに二つの理由があると考えていて、一つ目は静流さんに師事しての家事修行。静流さんの仕事に付きっ切りの稲葉の手際は傍目に分かるほど良くなっていた。稲葉自身もそれを感じているらしく、最近ではより一層身を入れて修行に励んでいる。そして二つ目が日向の存在だ。顔を合わせては口喧嘩ばかりしている二人だが、それがいい感じに稲葉の感情の吐き出し口になっているようだ。最近では学校でもお互いの友人グループ含めて仲良くしているようで、巷では同盟を組んだという噂がまことしやかに囁かれていた。何の同盟なのかは知らん。

これはきつといい変化だろう。俺も授与所の方を見て齷齪と働いているだろう稲葉の姿を想像して頬を緩めた。その時。

「ところで」と真顔に戻った恭子さんが俺に向き直った。

「気掛りがお有りのようにお見受けしましたが」

「はい？」

と返したところでさっきのアンニュイな呟きを聞かれていたことを思い出した。

しかし、思い出したところでどう言ったものか。

「あー、お気になさらず」

「そういう訳には参りません。私は使用人の身分を越えて大神様にお願いをした身。その大神様が困っていらっしゃるのを見過ごすことなどできません」

だそうだ。しかし、こんな大きな問題の解決策などそう簡単に見つかるわけではないんだから、誰かに聞いてもらったところでタダの愚痴になる気がする。

「聞いてもらって、すぐに解決する話でもありませんし……」

恭子さんはしつこかった。「それでも、是非」

こうなったら俺の特殊スキル『婉曲表現』を使用しよう。

「そうですねー……。日本人の誰もが洋服を普段着として着用するようになった昨今ですが、そんな状況にあってもう一度和服に目を向けてもらうにはどうすればいいんでしょうか？ ……ってな話です」

どうだ、これが俺の『婉曲表現』の真骨頂。もはや疑問の原型を止めているのかも定かではない。……それじゃだめじゃんってツツコミは止める。

ところがどっこい。そんな俺の意味不明な言葉にも顎に手を当てて真剣に考え始めてしまう恭子さん。そこまで真面目に考えてもらっちゃうと俺の心にも罪悪感が……。

間もなく恭子さんは思考の淵から戻ってきた。

「……当たり前の回答になってしまいますが、やはり和服の良さを喧伝していくしかないんじゃないでしょうか」

まあ俺の質問も質問だったから、そんな当たり前が妥当な答えで

しょう。

「ですが」

ん？　ここで否定の接続詞を入れてきた。

「日本人が『和服はいいものだ』っていう確かな価値観を持っているなら、あえてそれを積極的な行動に移させる必要はないように思えます。その価値観があるなら、日本から和服が無くなることはないんですから」

……目からウロコが落ちたね。確かにそうだ。街中で和服を着ている人なんて全くと言っていいほど見かけないというのに、なぜそれは今も無くなっていない？

そこから派生して考えたのは、どうして若い人は神社から離れていつているのに、神社という名前や場所を知っているのか、ということ。それはきっと、神社が俺たち日本人の生活と寄り添っているからだ。お祭りや縁日の際には由緒など知らなくとも出店の並ぶ参道を楽しそうに見回しながら歩き、正月には家族揃って神社に参りに出かける。これはきっと何年経っても日本から消えることのない文化だろう。

あの授与所の前に並んでいる人たちもそうだ。彼らは神社に勤める女性の正装が巫女装束だと知っているからこそ、今日も神社にやってきたのだ。でも、それを知っていたのは何故だ？　それが知ろうとしなくても知ってしまうほど近くに存在しているからだろう。

——なんだか大丈夫そうだ。素直にそう思えた。

ほんのちよつと視点を変えたただけなのに、こんなにポジティブな考え方ができるようになるなんてな。まだまだ捨てたもんじゃないじゃん、神社も。

「なるほど……」

いつしか思索に耽っていた俺の面はアホ面だったと思うが、その表情をどう判断したのか、恭子さんには珍しく不安そうに俺を訊ねてきた。

「あの……、こんなもので、参考になりましたでしょうか？」

初めて聞く自信のなさそうな声。それを吹っ飛ばすように俺は出来る限り快心の笑みを浮かべた。

「ええ、かなり」

これは心からの本音。恭子さんのお陰で気付いていなかった神社の価値を見つける事ができたんだから。

俺の笑みに釣られるように恭子さんは草原を撫でる暁風みたいな涼しげな笑顔に戻っていく。安心した様子で頷くと、それからお参りをして茅の輪をくぐって早々に帰ってしまわれた。お賽銭に硬貨ではなく紙幣——しかも諭吉さんが見えたのは気のせいだろうか。

しばらく後に帰ってきた友人二人は完全に大口を開けて呆けており、その手に握られていた戦利品は俺の出した条件の五倍であった。五枚の御神籤（二人共に大吉と大凶両方を当てるという快挙を達成）と五個の御守り（なぜ安産の御守りを買った）を手にして楽しそうに語る二人の土産話を話半分で聞いていると『夏越の祓』も終了の時間となった。

夕日の光を浴びながら浮き立った足取りで帰っていく二人を見送りつつ、急に静かになった境内を見渡す。授与所や神楽殿の前に目を向けてみれば、大勢いた人たちの幻が見えそうになるくらい俺の目と耳には昼間の喧騒が残っていた。石畳には、多くの人が歩いた事を示すように土埃がこびり付いている。

何だかんだで一杯の人が来てくれたんじゃない。恭子さんの話を聞いていなかったら、今頃こんなふうに見えるなかったかもしれない。

参拝者が全員帰った事を確認して俺はおじさんと一緒に『茅の輪』を片付け始めた。ふっと授与所の様子を見てみると、中で日向と稲葉が机に突っ伏している。静流さんがいないと辺りを見回してみれば、既に竹箒を持って境内の掃除に取り掛かっていた。今回はさすがに倒れている二人に同情するな。あれだけの人を捌ききった上で笑顔も絶やさず掃除に精を出している静流さんの方が凄すぎる。ホント、心配になるくらいの高スペック。

今日のうちにするべき事はあらかた終わり、おじさんは今日の経

理を、お婆さんと静流さんはお勝手で夕食の準備をしている。俺はというと授与所から覚束ない足取りで戻ってきた二人と共に居間でダレていた。ただ、全身を包むこの疲労感も今日の盛況の反動だと思えば気持ちいいものだ。

卓袱台に頬杖をついていた日向は不意に復活を果たし、おもむろに煎餅を掴む。口を開いたのはそれを齧るためだと思ったのだが、そうではなくて言葉を投げるためだったようだ。……俺に向けて。

「ねえ康司ー」

「んー……？」

「あの女の人、誰？」

びくっと震えたのは残り二人の肩。

「綺麗な人だったねえ。お姉ちゃんと同じかちよっと上くらいのに」
続いて稲葉がゆらーりといった感じで身を起こす。その様はさながらゾンビ物のホラー映画かロボット物のパニック映画を想起させ、今なおうつろな目で左右にゆらゆらしているのです、どちらかと言うと前者のイメージが強くなった。

「その話、私も聞きたいなー」

まあ、日向が言っているのは十中八九あの人のことだろう。というか、そうでなかった場合俺に思い当たる節は無い。疚しい事など無いのだから正直に言っただけ問題ないはずだ。

「あれは恭子さんだぞ」

「え？ 恭子さん来てたの？」

「おう、稲葉の晴れ姿を見に来たんだそうだ」

「ちょっと」

俺と稲葉共通の知り合いだと理解したらしい日向は俺への刺々しい視線は収めたが、追及の手を緩めはしなかった。

「誰よその、恭子さん、っていうのは」

「私の家のメイドさん」

「は？」

日向は今しがた啜えた煎餅を取り落とした。それから眉間に皺を

寄せそこを指先で解していたが、やがて意を決したように稲葉に向き直る。

「なんだか今、メイドさんとか非現実的なワードが聞こえた感じがしたんだけど……?」

否定の言葉を待ち望んでいた日向に返ってきたのは「なに意味分らないこと言ってるの? この人」的な稲葉の怪訝な顔だった。それに呆然とする日向だが、大丈夫。お前の価値観は現代日本人として正しいものだ。

「日向って、稲葉の家行ったことあるのか?」

「え? な、ないけど……」

「だったら明日にでも行ってこいよ。お前の常識が完膚なきまでに破壊されるから」

「……あんまり行きたくないんだけど」

無視して稲葉に許可を取る。

「いいよな?」

「うん。いいけど………康司君も一緒に来て欲しいなー、なんて」

「おう。了解」

「ちょっと」

日向は自分を蔑ろにして会話を展開されるのが嫌いらしい。俺に向けて手に持っていた茶色い円月輪を放ってきた。完全に俺の専売特許となっている円月輪キャッチは既に達人の域に達しており、人差し指と中指で挟むという高等技術でもって対応。もちろん食べ物粗末にするべからず。豊受大神に感謝しつつただく事にする。咀嚼して嚥下。

「そんじゃ、明日は稲葉の家だな」

日向は真っ赤になっており、そんなに怒るほど嫌なのかと訊ねてみたところ首を横に振ってきたので、問題なかったらしい。

稲葉までが顔を赤くして頬を膨らませていたのは俺の理解の及ぶところではなかった。

第六話

俺は日曜日より土曜日の方が好きだ。なぜなら日曜日というものは翌日に、温い布団を気合で引き剥がし、約六時間の学習に励まなければいけない月曜日が控えているからだ。俺はその憂鬱を日曜日の早い段階から感じてしまう人間なので、心から休めるのは金曜日の夜から土曜日までとなる。よって土曜日の方が好きだ。

しかし今回の日曜は、そんな憂鬱を感じる暇もなく過ぎ去っていくんだろうな。何せ、面白可笑しいリアクションがたくさん見れるだろうし。

まだ時刻は正午を迎えておらず、今現在の俺たちは稲葉宅の正面門前で立ち止まっている。なぜかって？ フリーズしている人間がいるからだ。

そして、早速だが一つ目のリアクション。

「……………誰よ、アンタ」

どうやら限定的な記憶喪失を煩ったようだ。いや、とある個人のアイデンティティの不一致による一時的な記憶野の障害、とでも言った方が正しいのか。誰かの添削が欲しいところだが生憎と俺の友人にサイコメトラーはいない。

怪訝な顔をする稲葉だが、俺はどちらかと言うと日向側の人間だ。日向に同情するのは致し方ないことだろう。なんてったって実際に同情を味わったんだからな、俺は。そう考えると日向のリアクションを素直に笑う事もできなかった。

脱水症状でも起こしたかのようにふらふら歩く日向のスピードに合わせて前進し、ようやくと辿りついた玄関の重厚な扉を開いた途端、目に飛び込んできたメイドさんがズラツと並んでお辞儀をしている映像。突然の事にビビったのか、なんと日向は俺の背中に隠れるとシャツの裾を掴んできた。きつと己の価値観が粉微塵に破壊されて、その結果俺に縋るという未曾有の行動に出ってしまったのだろ

う。気持ちとは分からないでもないから、そのままにしておいてやる。別に他意はない。

本日は稲葉自身が紅茶を用意するらしい。その間に恭子さんの案内で客間へと向かう。さすがに憶えてきたルートを確認しながら歩いていると、未だに裾を摘んだままの日向が俺の耳元で小さく囁いてきた。

「（ね、ねえ。私こないいつも通りの服なんだけど、大丈夫かな？）」

「（お前は俺の服装がドレスコードに引っ掛からないような上等なものに見えるのか？）」

俺はここに来るようになって初めてドレスコードなんてワードを知ったよ。

客間に入ると座った事もないような座り心地のソファに勧められ、完全に借りてきた猫状態の日向。

「それで」

こんな事を訊ねられたら当然うろたえる。

「お二人はどのような関係なのですか？」

キュピーンと目を光らせたのは恭子さんだ。いきなりの質問にアワワしている日向はどうしようもなさそうなので俺が答えることにした。

「兄妹みたいなもんです」

そこから俺と恭子さんとの睨めっこが開始。……五秒……十秒……十五秒になったところで俺が無意識に土下座しようとしたところで、恭子さんは許してくれた。特に咎められるようなことは無かったはずなのに、なぜかそんなふうに感じたのは被害妄想か。

「お待たせー！」

ガラガラとカートを押しながら突入してきたのは稲葉お嬢様。やはり稲葉が押すと音が立ってしまうんだな。メイドさんスキル恐るべし。

それでも漂ってくる香りは本物だった。静流さんに師事して以来、

家でも少し家事を手伝っているらしい。いくら断っても引いてくれなかったと恭子さんから苦笑交じりに聞いた。この香りもその成果だろう。

日向もこういったものには目がないのか今では堪能するように香りを楽しんでいた。

クッキーも私が焼いたんだ！ とはしゃいでいる稲葉だが、見た目は良くても味は……なんて萌えスキルを発揮する事もなく普通に美味かった。

主に学校の話題でしばらく談笑していると気付けば時計の長針と短針がピタリと重なり合うセクシーな時間となっており、そのまま昼食をご馳走になることになった。そこからは稲葉の案内で食堂へと向かう。

「……………」

この沈黙は日向のもので、遠い目をしてどこか遠くに思いを馳せているようだった。郷愁の念に駆られるのは良く分かる。こんなものを見せられたら誰だってそうなるだろう。

ブリタニア王アーサーが座っていた円卓を横に引き伸ばしたらこんな形になりそうな、正に『食卓』といったテーブルが眼前に横たわっていた。思うのだが、こんなにデカく作ったって手間が増えるだけだろう。明らかに人を雇える事を前提に設計されてるよな。

席が離れていたら会話だってしづらい。なので俺は、ここで食事をする際は卓の隅の方で稲葉と一緒に食べる事にしていた。それを憶えてくれていたらしいメイドさんが既にそのように椅子を配置してくれていて、今日は俺の隣に日向の椅子もあった。

席に就くや否や運ばれてきた料理の数々はどれも長ったらしくて憶えられそうにない名前。しかし外で食べたらどれだけ値が張るのか分からないものばかりだったので、貧乏根性丸出しの俺は全てを残さず平らげる。初めてここで食事をした時の俺の食べっぷりをシェフが喜んでしまったらしく、以来俺には大盛りで料理を出してくれるようになった。もちろん俺は残せない。更にシェフは喜んで量

を増やす。完全なファットスパイラル。

食事の終わった頃には俺の体重は普段より二キロくらい重かったに違いない。逆に緊張してあんまり食べられなかったと後悔している日向と共に稲葉に案内されて向かったのは、俺も初めて入る稲葉の自室だった。ここに来る頃にはメイドさんも全員引き上げ、中に通されたのは俺と日向だけ。

部屋の広さは客間と同じくらいはあり、これが一人部屋って言うんだから世間は広い。壁際に並べられているのは勉強机やパソコン用のテーブル、クローゼットに本棚などで、どれもがやはりグレイドが一つ違いそうなのだが、その中でも一番目を引くのがベッドだった。日向も早速それを見つけると目を眇めてとことこ近づいていく。

それからベッドの上に取り付けられた薄っぺらいピンクのヴェールみたいなのをペシペシ叩き始めた。

「……………何よ、これは」

きっと天蓋ってやつだろう。俺も初めて見たけどな。

据わった目でペシペシしている日向を気味悪そうに見つめつつ稲葉は、採光のためか大きく取られた窓のそばに置いてあるガラスのテーブルセットの椅子に座った。

「康司君も座って」

日向は一心不乱にペシペシしているので放っとくことにし、俺は稲葉の言葉に甘えた。

目の前のテーブルには百合のレリーフが彫られており、繊細な職人技によるものだと思える俺にも分かる。それがテーブルクロスも無しに普通に置いてあるのだから太っ腹なんだかどうなんだか。

椅子に座ると俺は改めて部屋を見渡す。

「それにしても、……………広いな」

「でしょ?」

苦笑の形で吐き出された言葉は自嘲を多分に含んでいたように感じた。

「よく友達は広い部屋がいいって言うけど、私はそう思えない。夜とかね、寝る時に電気を消すと部屋の空気が全部私に押し掛かってくるように感じるの。天蓋って物があるのもその感覚を和らげるためなんじゃないかって思うときがあるよ。本末転倒だよね」
なるほど、新しい解釈だ。

「私は、あの水分神社の居間が好き」

日向が聞いたら卒倒しそうだが、幸いにも未だに天蓋にスパンキングしているのだから聞こえていなかったようだ。

「皆で一緒に丸い卓袱台を囲んで、皆で一緒にご飯食べて、皆で一緒にテレビを見て、皆で一緒に笑いあって。……皆がすごく近くって」

……俺はこれを聞いて後悔した。

もしかしたら稲葉は、水分神社の居間での光景を思い出して、このデカイ部屋の中一人つきりで泣いたのかもしれない。耳を劈くような静寂の中で、シーツにぎゅっと包まって枕を濡らしたのかもしれない。

母親が早くに亡くなって。最近妹も亡くして。夜の暗い部屋で一人ぼっちであることを実感し、俺を含めた水分神社の人たちや学校の友人。そんな人たちに会えることをひたすらに想像して、稲葉を押し潰さんと迫ってくる孤独感から逃れていたのかもしれない。

稲葉は妹が亡くなった日から、いや、もしかしたら母親が亡くなった日からずっと、その孤独に耐えてきたのだろう。それなのに、ここで働く家人たちは父親の言いつけなのか稲葉に必要以上の接触を持つとうとしない。孤独に打ち震える少女を前にしても、誰も側に居ようとしらない。

これを訊ねるのは、おこがましいだろうか。

「父親の事、どう思ってる？」

瞬間、稲葉の肩が震え、それが全身に伝播するとそのまま俯いてしまった。それでも、俺は待つ。この問いの回答を。

さすがにもう限界だった。稲葉の前で口にはしなかったが、抱い

ていた不信感とはつくの昔に不快感に進化している。

だって、どう考えたっておかしいだろ。なぜコイツが苦しんでいる時に、一番側にいるべき人間がいない。情報が行ってないのか？ いや、この屋敷で働いている人全員が知らないなんてことはあるはずがない。爺やとかは知ってそうだが、あの見るからに老巧で温和そうな人物が重要な連絡を怠るとは思えない。俺に人を見る目がないだけか？

俺は待つ。稲葉が次に言葉を搾り出すまでにかかった時間は数秒だったか、もしくは数分だったか。緊張の中でただ稲葉を見つめていた俺にはどちらとも思えた。

「……わからない」

その答えは、答えとは言えないもの。

「わからないよ……！」

次に吐き出したときには悲痛な叫びに変化しており、天蓋を叩いていた日向もその慟哭に気がついて驚いたように目を見開く。それからこちらへと歩み寄ってきて俺を睨め付けたが、いつになく真面目な顔で『黙ってる』の合図を送ったら案外素直に黙ってくれた。それから二人で稲葉を見つめる。

「本当は私だって気付いてた！ 私たち家族があの人にとって、ただの付属物でしかないんだって！ お母さんが死んだ時も、光が死んだ時も、私が死のうとした時も！ あの人は帰ってこようともしなかった！ 爺やは連絡の届かないところに居たって言ってたけど、伝えても帰って来る気がなかったってこと、私だってとつくに気付いてた！」

両の拳を太ももの上で握り締め、そこに落ちているのは空知らぬ雨。どうやら泣沢女神に気に入られてしまったらしい。

いきなり始まった稲葉の絶叫に日向は目を丸くする。きっと今頃、高校で自殺を図ったのが誰なのか気付いたんだろう。

「そんな人を……、私たち家族を捨てた人を、父親だって思えるか分からない……！ 今さら、お父さんって呼べるかなんて分からない

い！」

そこからはもう言葉は繋がらなかった。俯いたままの稲葉の顔から涙と泣き声が落ちていくだけ。

この叫びを聞いた人はどんな事を思うのか。きっと汚らわしいモノでも見るように顔を顰めるんだろうな。その時に考えているのはこんな事だろう。

『自分を生んでくれた親に対してなんてことを言うんだ。親がいなければアンタが生まれてくる事も無かったんだぞ。親は死ぬまで親なんだ。それが分かったら仲良くしな』

……俺には無理だ。そんな正論を吐ける自信は毛頭ない。どれだけ常識人たちが無意識の内に見ないフリをしていたって、この世には五逆を犯さざるをえなくなるほど追い詰められた人っているのがあると思う。世界には六十億もの人がいるんだからな、億分の一の確立だったとしても六十人はいる計算になる。そして、そんなふうに追い詰めたのは何処の誰だ。ただ表側だけを伝えてくるニュースなどを見たオバサンなどは「最近の若い子は怖いわねー」でその話を終わらせるのだろう。どうしてそんな行動に出たのか、そこまで追い詰められたのはどうしてなのか、そこには完璧に知らん振りを決め込んで。

心が幼かったのだと、子供に全責任を押し付けて。

確かにその通りの場合もあるだろう。全ての親が悪いわけでもない。でも俺の目の前には親に傷つけられた人間がいる。常識人として稲葉の涙を見ないふりをするか、非常識人だと罵られても稲葉の涙を拭ってやるか、そんな選択をもし迫られた場合、俺は迷わず後者を選択する自信がある。

もちろん今のご時勢で五逆を犯すことを肯定するつもりは断じてない。殺してしまっただけはそりゃいけないとも思う。でも、この世界はそんな綺麗でもないってことだ。無機的に書き連ねられた新聞や雑誌の文字は平気で人を傷つける。ニュースで伝える形式的な言葉は簡単に人を傷つける。それらの文字や言葉の裏にある事実には目

も向けないで。

稲葉の置かれた状況だって、そんな文書の裏に隠された真実の一つ。そして、それを隠匿した人物は恐らく――。

「……………そっか」

これと言ったのは日向だ。何か具体的な言葉を返すわけでもなく、穏やかに一言そう言うのと、稲葉の側で膝立ちになりそのまま片手で肩を抱き、もう片方の手で背中を擦ってやっている。きっとこういうところが、日向が女子から慕われる所以なんだろうな。

稲葉が袖を濡らしている間、俺などには見せたことも無い優しい表情の日向はずっと背中を擦っていた。やがて沢泣女神も去っていき稲葉は「ありがと」と日向に囁くと俯いたまま窓に向かい、それを開け放った。最近じゃ熱量を放出しすぎて地上の民から疎ましい視線を向けられているのだろう紅橙色の太陽は、そんな疎外感が辛いかスピードを上げて地球の裏側へと逃げおおせようとしていた。昼間よりは幾分涼しい風が部屋の中に舞い込んできく。その風に黒髪を遊ばせながら稲葉が目を擦るのは、次に振り向いた時に前と変わらぬ笑顔を見せるためだろうな。

その場で、稲葉はくるっと反転した。

「えへへ、なんかゴメンね。陰気な話聞かせちゃって」

「別にいいさ。陰気さで言ったら神社に住んでる俺たちも負けてないし。な、日向」

「一緒にしないでよ」

空気を変えようと日向に話を振れば、俺の意図を汲み取った日向もそんなように返してくれる。お陰で、稲葉は小さくだが笑ってくれた。まあ、俺たちへの気遣いだったかも知れんがな。

日向と目を合わせると、向こうも俺と同じことを考えている事を察する。単純な思考回路に二人で苦笑すると日向は逆光の中で微笑む彼女に笑顔を向けた。

「ねえ縁。今日の夜、ウチでご飯食べましょ？」

「ああ、そうだな。何だったら泊まっていてもいいんだぞ、縁？」

縁は案の定、木通と郁子どっちを食べるか聞かれた子供のように縁は俺たちの顔を見比べていた。

「ん？ どした」

「え、ど、どうして……名前……」

「何よ、私たちの名前に何か文句あんの？」

「ち、違う！ どうして急に下の名前で……」

縁の目元は赤く染まっており、俺は久しぶりにその頭を撫でたくなった。立ち上がると縁の元へ向かい、ビクツと肩を竦ませるのも構わずに長い黒髪を梳くように撫でる。

「急に縁って呼びたくなっただよ。なあ、日向？」

「ええ、ホント唐突な衝動だったわ」

そんな言葉をどう思ったのか、縁は突然大声を上げて笑い出した。俺たちも釣られて笑みを零す。しみったれた空気はもう必要ないのだ。

一頻り笑うと、俺たち三人は本日の夕食を共にするべく部屋を後にした。ドアを開けるとその脇で待機していた恭子さんに縁は告げる。

「今日のお夕飯、日向のところで頂いてくるから」

「どうやら縁から日向の呼び名も下の名前になったようだ。」

「かしこまりました」

と頭を下げる恭子さんから縁と日向は並んで離れていく。それを見計らって一步遅れて部屋から出たのは、頭を下げたままの恭子さんに呼びかけるため。

「恭子さん」

「はい」

顔を上げた恭子さんは真摯な瞳で俺の目を見返してくる。まるで、何を言われるのか分かっているみたいに。

だったら、遠慮することはないか。

「もう一度、貴女の中の優先順位を考えてみてください」

俺は踵を返す。歩き出しながら言い残す言葉は、できるだけカッ

コをつけて。

「初めて会ったときに、貴女が俺に話してくれたお嬢様を想う気持ちを、俺は信じていますよ」

そのまま前の二人の背中を追って歩き出す。

あの日にやるやると言って結局開かれなかった保護者会は、父親の指示で爺やが根回しした結果である事を、この時背後から聞こえてきた声で知った。

突然やって来た縁が夕食に同席する事を笑顔で承諾してくれたおばさんと静流さん。すぐに追加の材料を鍋に投入してくれる二人の背中にちよつとうるつと来てしまったのは俺の中でも何か思うところがあったのかね。

居間で待っていると、やがてやって来たおじさんが縁を見て目を丸くし、それから顔を綻ばせた。ぐつと華やいだ簡素な畳部屋を嬉しそうに眺めている。

運ばれてきた料理を並べつつ小皿を分けるなど手伝いを始める縁だったが、相変わらず日向の方は動く気配が無かった。神社の方の手伝いは今でも続いているが、それ以外は全くやる気がないらしい。

しかして始まった六人での夕餉。同級生三人が揃っている事から話題は学校に関するものが多く、しかし他の三人もニコニコしながら聞いてくれていた。しばらくして我慢できなくなったのかおばさんが縁の頭をこねくり回し始めて、りんご病の如く顔を赤くする縁には申し訳なかったが、残りの四人はそれに笑いながら食事を進めた。

料理もあらかた無くなり食後の満足感に浸っていたところで、静流さんが突然「あっ」と言って居間を出て行ってしまった。その行動のそれらしい理由を俺たちが思いつくより先に戻ってきた静流さんは手に一枚の紙片を持っており、横七センチ縦五センチくらいだろうか、その程度の小さな紙つきれだった。

「今日、神社に地鎮祭をお願いしたいって方がいらしたんですけど、

その方に頂いた名刺の名前に後から気付きました」

名刺を差し出すのは縁の方。

「この方ってお知り合いですか？」

結果から言うと、その名刺には居間の穏やかな空気を一瞬で吹き飛ばす、ジェット排気以上の暴力的な風力が秘められていた。

受け取った縁はその体勢のまま硬直し、どんどんと表情をなくしていく。嫌な予感のした俺と日向が横から覗き込んでみれば、そこにはこんな文字が踊っていた。

——『株式会社稲葉建設 代表取締役社長 稲葉秀一郎』と。

ググってみたところ稲葉建設というのは最近一部上場を果たした興隆著しい建築会社だそうだ。企業理念を見ると『前例に囚われず常に新しい建築意匠を探求し、そこに人間が生きていく上での恒久的な幸福を生み出す事を目的とする』とあるので多少ベンチャーっぽいのもかもしれない。ただ、時が経てば朽ちていく、広い意味では消耗品であるところの建築物に『恒久的な幸福』とか見出そうとしてる辺りなかなかハッピーな脳ミソをお持ちのようだ。以前より海外からの発注も多くあるらしく、そんなハッピーな建物が世界中に蔓延しているのかと思うと世も末だな。

その後について語っておく。

停止してしまった稲葉を嘲笑うかのように玄関のチャイムが鳴らされたのはすぐ後だった。俺が仄暗い電灯に照らされた玄関の扉を開けてみると、そこに立っていたのはシンプルメイド服から黒のエプロンを外しただけのベージュワンピース姿の恭子さんで、俺の顔を見るなり開口一番「申し訳ありません！」と頭を下げてきた。

「と、当主様が……お嬢様と晚餐を共にしたい、と」

さすがに頭に血が上ったね。何を考えてるんだ、その親父は。お前の娘が一人居なくなっただろうが。それなのに残った娘と暢気に夕食だと。ここまで他人のことを考えられないのも珍しいな。ほんと、ふざけるのも大概にしろ。

——なんて、今ここで喚いても仕方ない。

「……優先順位は、変わりませんでしたか」

もう一度、申し訳ありません！ と謝意を述べてくる恭子さんの頭頂部を見て、俺も八つ当たりだったとすぐさま反省。この人にだつて守るべき生活があるのだ。それなのに無理を言つて苦しめていたのは他の誰でもない俺である。

だから、同じように謝罪する。

「すいません。俺も言い過ぎました」

「そ、そんな！ 頭をお上げください！」

泣きそうになりながら俺の肩を掴んで持ち上げようする恭子さん。この表情が恭子さんの葛藤の証じゃないか。きっと最後まで抵抗してくれたに違いない。顔をよく見てみれば左頬が少し赤くなっているが、その理由を訊く事はしなかった。

でも、ここで縁を行かせていいのだろうか。しかし、行かせなかった場合、恭子さんの立場が危うくなる。どうしたものか。

考えに考え抜いた結果、初めて恭子さんと会った時の『お嬢様の側にいてくれ』という言葉を思い出した。だとしたら俺のとるべき行動は一つしかない。あとは俺の中にあるチキンハートをどうにか黙らせるだけだ。

「恭子さん、俺も——」

「いいよ、康司君」

しかし俺のなけなしの勇氣は背後からの、優しい口調ながら有無を言わせぬ言葉にあっさり敗北した。状況を察した縁は呆然とする俺を抜き去り、靴を履くと玄關から出て行ってしまい、恭子さんも慌てて後を追いかけていく。すれ違ったのは一瞬で、その表情を見る事は叶わなかった。

俺が想像するのは縁が見るだろう映像。水分神社の階段を一段一段降りながら段々近づいてくる真っ黒な車。それは赤いテールランプを不気味に点滅させながら少女を呑み込まんと待ち構えているのだ。この時、縁はどんな顔をしているだろうか。泣いているだろう

か、怒っているだろうか、それとも無表情だろうか。それを考えると、心臓が絞られるような強烈な痛みを得た。そして居ても立ってもいられなくなる。

まだ縁が階段の影に消えてからそんなに時間は経っていない。俺が走り出すと、続いて日向も靴を履かずに玄関から飛び出してきた。二人で階段に走っていき下を覗いてみれば、縁は中程を降りているところだった。

今ならまだ届くはずだ。

「おい縁！ 何かあったら、いや何も無くてもウチに来い！ 出来る限り早く来い！」

「そうよ！ あれだけ私たちに話したんだから、一人で解決するか格好つけるの無しだからね！」

俺たちの叫びに縁は足を止める。そこで振り返らなかったのは彼女の強さが優しさか、もしくは強がりだったか。

数秒そこで立ち止まり、やがて再び歩き出した。その足取りに迷いは無く、ゆっくりと自分を待ち受ける暗い深淵へ降りていき、そして漆黒の闇へと吸い込まれた。

暗い表情で戻ってくると居間では急に出て行ってしまった縁に家人が慌てていたので、俺が一声掛けて座ってもらう。それから稲葉縁という少女のことを、その彼女の過去を含めて家族に伝えた。勝手に話す事に逡巡もあったが、この人たちなら本気で縁を想ってくれる。そう確信して、真剣に話し始めた俺を見て慌てるのを止めたおじさんは、腕を組んで目を閉じ静かに聴いてくれていた。おばさんは、これぞ親身！ ってな具合に縁のことを心配してくれて、やはりというか静流さんは「私のせいで……」と泣きそうになっていた。なので静流さんのせいではないことを懇切丁寧に説明した。

俺は知っている。こういう別れ方をした場合、ドラマや映画ではそれが今生の別れになったりするのだ。あくまでフィクションだと信じ切れない俺は神様に願ったりもしたが、今頃になって三輪神社と水分神社の神様がどうも喧嘩を始めてしまったらしい。その発端

は多分『酒と水ではどちらが良薬となるか』とかだろうね。

かくしてフィクションはノンフィクションへと進化を遂げ、翌日

——縁は学校に来なかった。

第七話

半ば予想していたが鳥居の側に縁は居らず、二人で一縷の望みに縋って学校へと向かった。しかしながら昼休み、俺のクラスへとやって来た日向に縁が学校に来ていないことを教えられ、一縷の望みはいとも簡単に断ち切られた。

通い妻か？ 通い妻か？ とクラスメイトに茶化されても俺にはリアクションをしてやる気力もなく、不思議そうにしていた友人各位。それ以降は俺を放っておいてくれるという優しさを持っていた近藤斉藤の評価を少しだけ上げつつ、授業の終わりを待っていた。

今日の授業では先生に当てられませんように、と頭のほんの一部容量を使って祈っていたのだが、どうせ叶うはずないと高を括っていた時に限ってその願いは聞き届けられる。どうやら俺の声を聞いてくれている神様は相当なお茶目さんらしい。

放課後。どうにも一人で帰るのも気が引け、掃除があるらしい日向を教室の外で待っていた。俺を見つけた日向のクラスメイトが「彼氏がお迎えよ」とか言っているのが聞こえてきたが、終わった後の日向は特に何も文句を言うことなく「……帰ろ」とだけ言って俺の隣に並んできた。

帰宅の途には一切の会話もなく、どこか二人で歩いていることに違和感も感じたりしている。そこで初めて俺は、俺と日向の間に縁が居る風景が既に掛け替えない日常になっていた事を思い知った。

きっと今日一日は俺よりも日向の方が辛かっただろう。二人は同じクラスだからな。縁が居なくても変わらず過ぎていく日常。変わらず過ごしているクラスメイト。それらを目にしていた日向は何を思っただろうか。

そろそろ夏本番のはずなのに大して暑くも感じない空気の中を歩き、いつもより色褪せて見える風景を眺め、こんなに暗い色だったかと気付く鳥居をくぐり、やたら長く思える階段を上り、どこか空

気が沈んでいるように感じる境内を歩き、暖かさが伝わってこない社務所に入って、嘆息しながら居間の扉を開――

——けてもう一度閉じた。

日向が同じ行動をしていた。一応、確認してみよう。

「……うん、何かいた」

「うん、煎餅食ってた」

「知ってる人だった」

疑を掛けられた木花開耶姫の如き憤怒で顔を真っ赤にしていく。どうして憤怒だと分かるかって？俺も同じ気持ちだからさ。見てみ

という訳で、その力にベクトルを加えてやりドアを開け放つと、

[illegible]

白黒させているソイツに俺と日向で文句という名の剛速球を投げつける。その球速は体感速度百マイルを下らないだろう。

「そうよ！
具体的には今日全く聞いてなかった授業のノートで！」

「知ってるわあ！」

は気が抜けたようにその場にへなへたと座り込んでしまった。気が抜けたんだろう。今日一日、俺以上に気を張っていたんだろうし。

しかし気張る必要も、もうない。

現在最大の懸念だった縁が、目の前にいた。卓袱台に頬杖をつき煎餅を食いながら。

……日向に似てきている気がするの、そのまま気のせいであつてくれ。

「何だつてのよ、もう……」

「すぐに来いって言ってくれたの二人じゃない」

もちろん、俺たちだって安堵しているのだ。これ以上ないくらいに。ただそれがあまりに突然訪れたもので順応するのに時間が掛かつてしまった。さっきのシャウトはそれの反動だと思ってくれ。

「だからー、家出してきちゃった。テヘッ☆」

「テヘッ☆ じゃないわよ全く」

今気が付いたが、確かに自分の額をこつんと小突いている縁の横には大きめのポストンバッグが置いてある。残った破片の煎餅を一気に口に放り込んで咀嚼、嚥下すると縁はコホンと咳払いを一度した。

「不肖わたくし稲葉縁。昨日付けで反抗期に入りました」

「「……」」

「主に反抗するのは、この世界に」

「「……………」」

「本日は私、生まれて初めての無断欠席でーす！」

「「……………」」

まだ続くらしいから、最後まで喋らせよう。

「つまり、私はもう不良なのです。心が荒んだ現代の若者なのです」
反抗期に入っただけで自分で宣言してる不良ってのは可愛いもんだな。そんなヤツの心が荒んでるってんなら世の中ほとんどの人は心にサハラを抱えているだろうに。

「なので私は自分を一から見つめなおすことにしました」

……読めてきたぞ。先読みでツツコンでおこう。『寺行け寺』。

「という訳で、こちらで修行させていただくことにしました！」

よし当たった。景品くれ景品。……いや、もう貰っているか。お茶目な神様から。

「私が来た時にはおじさんもおばさんも静流さんも驚いてたけど、訳を話したらここに居ていいって笑顔で快諾してくれたの！」

そりゃ驚くだろうさ。昨日あんなシリアスな空気を出してここを飛び出して行ったヤツが、なんだか変なテンションになってすぐに戻ってきたんだから。

しかし縁はそこで、でも……、と表情を曇らせる。

「私が家から出ようとした時、爺やに見つかっちゃって。その時恭子さんが私を逃がすために時間稼ぎしてくれたんだけど……」

……恭子さんか。もしかしくなくても俺がその選択を迫ったんだよな。感謝をしつつ、やはり少し申し訳ない。これではもう、あの家で仕事は出来ないだろう。……まあ、あの人の技術なら働き口には事欠かない気もするが。

「それで、その恭子さんは？」この場にいないというのは心配だ。

「分からない。逃げる時にチラッと見たら棍棒みたいなもの持って追いかけて来た爺やと喧嘩してたんだけど、その後は……。……ちゃんと逃げられてるといいんだけど……」

一番心配してるのはコイツだったな。こんなに誰かを心配できるヤツが不良だったら世の中不良だらけになってるつつうの。

それにしても、あの爺やが棍棒ですか。完全に俺は人を見る目が無かったらしい。

居間の扉が開いて静流さんが入ってきたのは、俺が今後詐欺などに引っ掛からないよう自分専用マニュアルを編集していたそんな時だった。

「お帰りなさい、二人とも」

魂のシャウトが届いていたのか、盆に急須と四人分の湯飲みを載せた静流さんはいつも以上にニコニコで、縁の顔が見られたのが嬉しくてしょうがないらしい。

俺と日向も一旦落ち着こうと静流さんの淹れてくれた熱いお茶を

飲む。夏だろうがなんだろうが、季節関係なくこの熱いお茶は俺の好きな飲み物ランキング不動の一位に君臨し続ける。しかもハーブティーなど足元にも及ばない精神鎮静作用も持っているのだ。

ズズー……っあー。いいな、こういうの。

今、この居間には一緒に茶を啜っている俺と静流さんと日向と縁が居る。今朝には夢物語のように思えたこの状況が、こうして目の前にある。それは何より嬉しい事だった。

問題は何も解決していないんだけどな。

「明日」

静流さんの真面目に改めた表情からもそれはヒシヒシと伝わってきた。

「あの人依頼の地鎮祭を執り行います」

ただっ広い草原で草をむーしゃむーしゃ食んでるだけの草食動物よりも温厚な静流さんがあの人呼ばわり。これは相当嫌われましたな。

「依頼があったのって昨日ですよ。こんなに早くですか？」

「今朝方にまたあの人が来まして、出来るだけ早くお願いしたい、だそうなので。縁さんがここに到着したのがそのすぐ後だったんですけど、対面しなくて本当に良かったです」

確かにそれは間一髪って感じですね。もしそこで見つかったいたら家へと強制送還。その上監禁でもされそうだし。

……それにしても、地鎮祭か。そこには会社の幹部とかも集まるんだろうな。

「静流さん」

正面で静流さんが首を傾げる。

「俺も連れて行ってもらえませんか？」

これには静流さん以外の二人も驚いたらしい。

「えー！ も、もちろん私も康司さんが来てくれたら心強いですけど……、でも明日は平日ですよ？ 学校はどうするんですか？」

ただ今、世間のほとんどの学校は学期末。学生たちが待ちに待っ

たシーズンが厳しい税関の向こうで手招きしているのが見える季節だ。まあ、そのシーズンを迎えるためには税関を突破しないといけないんだけどな。でもって、その税関とは――

「もうそろそろ期末試験なので授業はどれも自習でしょう」

「皆勤賞もダメになっちゃいますよ？」

「卒業式は卒業証書を貰うだけでさっさと終わらせたいと俺は常々思っていました」

しばらく静流さんが見つめ合う。その睨めっこでは照れという自爆技を披露して俺が負けるはずだったが、その直前に静流さんはふっと目を細めた。それから苦笑をくれる。

「……もう、頑固なんですから。分かりました。一緒に行きましょう」

「ありがとうございます」

と、そこで縁が寄ってきて俺の袖を掴んだ。下がった目尻は俺を心配してくれているのだろうか。

「ねえねえ康司君。……大丈夫なの？」

「ん？ 地鎮祭の式次第なら大丈夫だぞ。三輪神社でも手伝ってたからな。まあ俺の場合ちゃんとした位階を本庁から賜ってないからもし見つかったらヤバイけどさ。でも大丈夫だ。そういう儀式に必要なのは心だ心」

「そうじゃなくて」

身を乗りだして顔を近づけてきやがった。まったく、コイツにはもう少し男がカッコつける時の心理を勉強してもらいたい。

「分かってるよ。別に何をするワケでもないから、今回は。ただ単に社長の顔とハッピーカンパニーの幹部の顔を拝みたいだけだ。……あ、でもそうすると日向と縁二人だけになっちゃうな」

「大丈夫よ。ウチは逃げられる手段いっぱいあるし」

「……ちよっと待てよ。今の言葉からすると、「……お前らも学校、休むのか？ 明日」

「何言ってるの？ 当たり前じゃない」当たり前らしい。

「出入り口が限られてる学校こそ、いざ囲まれたら逃げ道が無いじゃないのよ」

お、ちゃんと考えての発言だったのか。こりゃ失敬。

「それに、あんただけ学校サボるのは何か納得いかないし」

……どうやらこれが本音だな。もちろん欠席理由なんて学校側に伝えられるものじゃない。これで俺たち三人は明日の無断欠席が決定してしまった。次に学校行った時が怖い。

その時だ——ピンポン、と玄関のチャイムが鳴らされたのは。

ビクウッ！ と座ったまま飛び上がるのは四人全員。完全に油断していた。よく考えれば分かることなのに。縁が水分神社に足繁く通っていたのは稲葉邸で働いている人たちのほとんどが知っているだろう。それでもって縁みたいないな女子が家を飛び出したところで行ける範囲は限られている。

よって探索を始めたとして真っ先に怪しまれるのは、ここだ。

玄関の方に視線を固定したまま動かない女子三人を居間に残し、俺はマイ針箱を持って立ち上がった。

玄関に着いてみれば、磨りガラスの向こうに人の姿がある。黒服ではないので激烈お爺さんの爺やではないようだが、用心するに越した事はない。俺は引き戸を開け放つと同時に後方へ飛び退きつつ針を投げる動作に入る。

結果としては、その針は投げられなかった。何せ、そこに立っていたのは——

「きよ、恭子さん！」 だったのだから。

「……………」

「……………」

……気まずい。非常に気まずい。目が合ってはいるが、俺は針を投げる予備動作を完了した状態。俺は慌てて手の針を仕舞った。

「……………」 お騒がせしたようだ」

「い、いえ……こちらこそ……、……すいません——って、ちょっと！」

改めて恭子さんの姿を見ると、一言で表現するなら満身創痍だった。磨りガラス越しに見て、やけに色んなところから肌の露出があるな―奇抜なファッションだな―とか思っていたのだが、それはファッションなどではなくただシンプルメイド服がビリビリに破れていたただだったのだ。そしてその露出部分の肌は赤かったり青かったりと、打撲傷と擦過傷がいくつも目に付く。服の下はきつと大変なことになっているだろう。というか、その傷では歩くのも辛そうだ。

「と、とりあえず中へ」

「……お邪魔致します」

ベージュのワンピースと同系色のキャリーバッグには自室から必要なものを即行でぶち込んできたらしい。俺はそれをせめてもの罪滅ぼしに持つと、恐らくこの人に今一番会いたいであろう人物の元へと案内した。

「ね、ねえ康司君、一体誰――」

居間に戻ると縁が目をまん丸に見開いた。続けて、その大きな瞳に涙を溜め始める。こいつはよっぽど泣沢女神に気に入られてしまったらしい。

「恭子さあん!」

飛び跳ねる兎のように立ち上がって恭子さんに抱きついていく縁。その瞬間、恭子さんは痛そうに顔を歪めたが、でもそれ以上に縁の無事が嬉しいのかすぐに優しく慈しむように背中へと手を回した。

「ご無事で何よりです、お嬢様」

「それは私のセリフだよお!」

いやはや良かった。心配していた恭子さんも見つかって、これで懸念はあと一つ。稲葉秀一郎なるおっさんだけだ。ま、ラスボスに相応しい人選だな。

感動のシーンに俺がもらい泣きしそうになっていると、静流さんがおたおたしている事に気が付いた。どうしたのかと訝しがっていると、その視線はどうやら恭子さんに縫い留められているようだ。

そういえば静流さんは恭子さんのことを知らなかったな。

「この人は恭子さんって言って、おそらく縁に近しい人間で唯一の味方です」

俺は恭子さんのキャリーバッグを縁のバッグの隣に置きながら静流さんに大まかな恭子さんの人となりの説明した。そ、そうなんですか……、と一先ず納得してくれたらしい静流さんはしかし次の瞬間、

「た、大変！ お怪我をなさっているじゃありませんか！」

と今さら気付いて、恭子さんの元に向かっていった。

「はい？ これくらいなら私は大丈夫ですので」

「いいからお早く！」

全く話を聞いていなかった。強引に感動の再開を終幕させると縁を引き剥がし、それからシンプルメイド服を脱がしにかかる。

「ほ、本当に大丈夫ですので！」

「早く手当てしませんと！」

完全に会話が噛み合ってなかったが、大人っぽい美女二人による丁寧な言葉の応酬というのはどうにも気の抜ける光景だった。この世に生を受けたその瞬間から静流さんフリークである俺だが、そういえば静流さんと恭子さんってどこか似た雰囲気を持っていると気付いたのはたった今だった。ほら、さん付けで呼びたくなる雰囲気とかとか。

そう、俺の中のハイスペック美女二人がこの場で肩を並べているという事実単純に感動していたのだ。なので気付けなかった。

男が取るべき行動をすっかり失念していた事に。

情状酌量の余地はあると考えていた俺の脳内弁護団だが、そんなものに耳を傾けてくれる優しい裁判官などこの場にはいなかった。そもそもが裁判など開く気のないエクスキューションナーが二人いるだけで、その二人によって俺は断罪されることになる。

「何ガン見してんのよ！」

「そんなに恭子さんのが見たいわけ！」

振り下ろされた凶刃は茶色い円盤状の固形物で、それを左右に控えていた死刑執行人からパイ投げよろしく俺の両目に叩きつけられる。食べてる時はそんなに気にならないけどかなり固いんだな、煎餅って。

この世の不条理を嘆きつつ鼻腔を刺激してくる香ばしい醤油の香りに涙が出そうになっていた俺だが、しかし女神様は俺に救いの手を差し伸べてくれたのだった。

「康司さんも来てください！」

という声が鼓膜を振るわせるや否や、俺は空の人になっていた。言い換えると、静流さんの膂力でもって高速で引っ張られた俺がその勢いで一瞬浮いただけだ。

その勢いのまま連れていかれたのは、アルバイトの時にいつも妊婦さんを治療している座敷だった。そこには既に布団が敷いてあり、俺の隣では下着姿となった恭子さんがそれを見て、これから何が行われるのかと凛凛としている。

そう、恭子さんは下着姿だった。

今度こそ男のエチケットを守った俺は首の可動限界に挑むように回転させる。その際に一瞬見えてしまった（あくまで見えてしまった）、恥らうように目を瞑った恭子さんが胸元を両手で隠すという映像は、俺の脳内会議満場一致で永久保存フォルダに保存することに決定した。

いいもの見てしまったところで、俺も仕事をしようか。俺が呼ばれた意味。この場所に連れてこられた理由はさすがに理解できている。

「お願いします、康司さん」と恭子さんを布団に寝かせた静流さんが手渡してくれたのは俺の針箱だ。つまり、そういうことさ。

初めてこれを受けた人の反応は同一なので、その辺は割愛。治療箇所には際どい部分もあったりしたが、男の矜持に賭けて俺は見なかったとここに誓言を立てる。

達成感に浸りつつ居間に戻してみると日向と縁が、さも『ずっと

ここにいました』的な空気を放ちながら談笑していたので一発ずつ頭をはたいてやる。少しだけ煎餅の報復の気持ちも込めた。それでバレていたと悟った縁は開き直って、さっきの治療についてあれこれと聞いてきたがそれを上手い具合に受け流しつつ俺は復活した恭子さんに目を向ける。

「それにしても、恭子さんが無事でよかった」

「ご心配をお掛けしました」

「恭子さんが来てくれなかったら明日は私と日向二人だけだったもんね。それはちょっと心細かったんだ」

「……………少しはオブラートに包みなさいよ」

日向が不穏な気配を放っているが、でも縁の言葉は全くその通りだった。稲葉家の人たちは爺やをはじめ本当に強襲をしかけてきても不思議じゃない。

話の核心が見えず上品に首を傾げている恭子さんに明日の事を説明する。

「なるほど、そういうことですか」

「はい。そこで恭子さんが二人に同行してくれたら心強いなど。有事の際には勝手口から出て杉林に逃げ込めれば問題ないとは思いますが、やはり二人だけだと心配でして」

小学生くらいの頃、俺が水分神社に遊びに来た際には日向と静流さんと三人で裏の杉林でかくれんぼをしたものだ。さすがに地形を隅々まで把握している二人を見つけるのは至難の業で、見つけれなくて俺が泣きべそを掻き始めると静流さんはワザと見つかられていたので、日向の場合はそんな優しさなど無いもせぬ。体育座りをしていた俺の前に堂々と登場すると大爆笑してまた去っていったのは、今ではいいトラウマだ。

「承知しました」

そう言った時の恭子さんの表情は武者の顔だった。例えるなら武蔵坊弁慶みたいな？

「我が命に代えても、お二人を無事にお逃がししましょう」

「い、いえ。出来れば三人一緒にお願いします……」

「……………はあ。善処します」

この人は少し使命感が強すぎる。貴女もいなければ意味がないっていうのに。でもきつと大丈夫だろう。源義経公が三人での帰還を所望するだろうからな。この人が武蔵坊弁慶なら義経からの命は忠実に守ってくれるはずだ。

その日の夕食。初めて加わる恭子さんは何もせずに相伴に預かることを断固拒否し、おぼさんの了承を得て冷蔵庫の中からパッツと必要なものを選び出すとそれで一品料理を作った。それを食べた俺たち六人の頬が落下運動を始めそうになって大変だったのは余談として付記しておく。それにしても、おじさんおぼさん。

——食費、大丈夫なのですか？

静流さんに行くと言ってしまった俺だが、布団に入ってから明日が来なければいいのにかメランコリーな事をちよつとばかり考えたりもした。しかしながら若造の祈り一つで太陽が毎日欠かさず続けているルーチンワークを妨げることなど到底叶わず、今朝も変わらず東雲の光を俺の両目へと能天気照射してくれていた。

昨晚と同じく七人での朝食を終えると地鎮祭組は禊を済ませて正装に着替え、それから祭式に必要な物をおじさんの車に搬入する。それも完了すると、俺たちは居残り組と別れて指定された場所に向かった。

都市というのは駅などの交通の要所から放射状に発展していくものだと思うが、水分神社は最寄駅を中心として再開発の進められている地域のほぼ円周近くに位置している。今回、地鎮祭を行う場所は水分神社からもそんなに離れていない空地であった。どうやら再開発の波はここまで押し寄せてきているらしい。しかも、それを施工するのは例のハッピーカンパニー。構造計算だけは偽装しないでくれよ。

斎場を確定させるため、まず敷地の中央に斎竹を四本立てて正方

形の空間を区切る。そこに紙垂を垂らした注連縄を渡して斎場を設けると次は神籬。斎場の真ん中に雛壇みたいな台を置いてその最上段真ん中に紙垂を結った榊の枝を立てる。そして雛壇の空いているところには米やら魚やら野菜やら果物やら塩やら水やらの神饌を儀式中に置くのだ。壇の正面の地面に一箇所盛砂をしたところで地鎮祭の準備は完了。

ここからはおじさんの主導で儀式が開始される。おばさんと静流さんと俺は脇の方に控えていることになった。スーツ姿で並ぶ参列者の中に社長がいるのだろうと見てみれば、明らかに一人だけ妙に鼻に付くおっさんが居た。隣の静流さんに目線で確認を取ってみれば頷いてきたのでどうやら当たりのようだ。

高そうなスーツに身を包み、掛けた眼鏡はどうにも好きになれない金色のフレーム。どうせアレだって安物なんかじゃなくて純金だったりするんだろうな。目を瞑ってはいるがその表情はどこか蔑むような雰囲気纏っており、それも鼻に付いた原因かもしれない。

やがて、地鎮祭が始まった。

まず初めに行うのが斎場と参列者を祓い清める修祓だ。幣帛を揺らしながら祓詞を詠唱するおじさんはもちろん真剣そのものだが、他の参列者が目を閉じ聞き入っているのに比べて社長は目を細めておじさんの動きを眺めていた。それは確かに笑みなのだが、笑みの中でも嘲笑という種類のものだと言え判断できるほどおじさんを見下したものだ。開始五分も経たずに俺の頭に血が上る。そもそもアンタが依頼してきたんだろうが。

それが終わったら降神。神籬に産土神を降ろす儀式だな。神様が降りてきた時におじさんが口にした「オオー」という声に嘖き出しそうになっていたのを俺は見逃さなかった。

先に言った米やら酒やらの神饌をここでお供えし、次に祝詞を奏上する。

「――此の斎庭を厳の磐境と祝ひ定め祓ひ清めて……」

結構長く続く地鎮祭祝詞をおじさんが奏上している間、退屈そう

にしていた社長だが、欠伸はどうか噛み殺したらしい。そんなことをしたら俺は草鞋を蹴り飛ばしていたかも知らん。

そこからおじさんは歩き出し敷地の四方で米を投げる切麻散米を行う。その背中を滑稽な生物でも見るように見下していた社長。そんなに億劫なら何故地鎮祭の依頼なぞした。

ずっと観察していた俺からするとダルそうに見え、しかし表面上は取り繕ってにこやかにしている社長は鍬入れも問題なく終わらせたのだが、次に待っていた鎮物埋納で本性を垣間見せた。おじさんに渡された鎮物を地面に埋める際、誰からも見られていないと油断したのか『なぜ私がこんな事をせねばならん』とでも言うように苛立たしげに顔を歪めたのだ。俺は反射的に懷に仕舞ってあった針を投げようとしてしまったが、隣の静流さんが腕を軽く掴んでくれたお陰で何とか思い止まることができた。

参列者全員で玉串を奉奠して、後は直会。神饌として備えた御神酒を全員で一口ずつ飲めば地鎮祭も終わりだ。だいたい開始から終了まで四十分程度だが、何度ぶちギレそうになったか覚えていない。来てもらった神様が荒魂にならなかったかどうか本気で心配だ。

とりあえず儀式は終わったので俺たちが片付けていると、社長が嫌らしい笑みを浮かべながら近づいてきた。

「本日は非常に素晴らしく厳かな儀式をありがとうございます。これで我々一同、安心して着工できます」心にもないことを。

「それと、うちの娘がそちらの神社でお世話になっているそうで」こっちが本題か。そりゃバレるよな、水分神社にしていること。稲葉家の自家用車である黒塗り高級車に目を向けてみれば側に爺やが控えており、アレが社長に教えたんだろう。完全に社長の傀儡だな。まあ傀儡になるのが仕事なのかも知れないけどさ。

「いえいえ、御息女にはお手伝いしていただいてまして、我々も大変助かっております」

「そうですか。ですがやはりいつまでもお邪魔させておくのも心苦しい。今日中には迎えに参りますので」

「社長ともなればご多忙の身でしょう。ご無理はなさらずとも結構ですよ？　我々は御息女が居りましても一向に構いませんので」

おじさんの真意に気付いているのかどうなのか、そういう訳にもいきません、と社長はそこで会話を切るとおじさんから目を逸らし車へと向かい始める。

その背中に、おじさんはもう一度言葉を投げかけた。

「ウチにも御息女と同級の娘がおりますが、あの年頃の娘は難しいですからな。私も随分と嫌われたものです」

上手い皮肉だ。あの娘二人がおじさんを嫌ってる素振りなんて見たこともない。

「……………何が、仰りたいのです？」

「そうはなりたくないものですな、という事ですよ」

立ち止まって振り返った社長はおじさんの返答に、ふん、と鼻から声を出すと、そのまま車へと向かっていった。

一度会社に戻るのだろうという認識が甘かった。社長ってのは、忙しいどころか随分と自由の利くご職業らしい。

おじさんの車で水分神社に帰ってきたとき、階段前に止められた黒塗りの高級車を見て俺たちは肝を潰した。駐車場に車を停める悠長な時間などなさそうだと判断した俺はそこで車を降りると一気に階段を駆け上る。くそ、括袴ってのは動きづらいな。いちいち足を踏み出すたびに両脚の膨らんだ部分がぶつかってもどかしいったらありやしない。消耗の激しい大腿筋を叱咤してやっとこさ境内に辿りついた瞬間「嫌、離して！　いやあ！」という間違いなく縁の痛切な叫喚が耳に届き、そちらを見れば社長が縁を引っ張りながら社務所から出てくるところだった。

「ちつくしよ……………」

俺はすぐさまそちらに駆け寄ろう——としたところで肩を掴まれた。社長の仲間か、と思ったたらその手の持ち主はおじさんで、首を横に振って俺に『待て』の合図。それから掴んでいた俺の肩を後方

に引き戻すようにしながら、おじさんの方が一步を前に出た。

社長に近づいていき、やがて向こうも寄ってくる人影に気が付いた。

「これはこれは秀一郎様。お早いご到着ですね」

にこやかに語りかけるおじさん。対する社長も笑顔で応戦。

「ええ、連れ帰るなら早い方がいいかと思ひましてね」

おじさんはそこで、今なお離れようともがいている縁をチラッと視界に収める。

「御息女は嫌がっているご様子ですが？」

「照れ隠しでしょう」

「なるほど、勉強になります」

「それは良かった」

二人ともにこやかなままで会話しているが、その迫力は俺みたいな子供が入っていきけるほど緩くはなかった。悔しいが、これが年功というもののなか。

そういえば日向と恭子さんはどうしたんだ？ そちらは社長の狙いではないから大丈夫だとは思うが、一緒に来ているはずの爺やが目に見える所に見つけられないのはやはりマズイ。どうしたものかと思案した結果、日向の方は恭子さんがいるから多少は心配の程度も落ちるということで申し訳ないがそちらを信じることにしてこの場に集中する。

そして目の前で繰り広げられている口争いは、これまでの裏に真意を隠していた言葉の応酬ではなく、完全な表舞台での舌戦となった。

「貴方のようになってしまつては、親として終わりだという事が良く分かりました」

「……何ですと？」

「言葉通りの意味ですよ。親としての責任を放棄し、子供と向き合うことをしない貴方は父親失格ということですよ」

おじさんの言葉に社長は一瞬牙を剥いたが、すぐに余裕の笑みに

戻る。

「お言葉ですが、ちゃんと扶養義務を果たしておりますよ。私はね」
「ここで扶養義務なんて言葉を出してきた時点で貴方の認識はその程度という事です。法律で心が分かりますか？ 法律を勉強したら御息女の気持ち分かるようになりますか？ 貴方の言葉はそれくらい見当違いなのですよ」

社長は一転、押し黙った。そこにおじさんは言葉を重ねる。

「どうしてもそこまで御息女が貴方と行きたがらないか、考えた事がありますか？」

声には一切の迷いが無い。それだけ芯の通った人ってことだ。

「真なるところは彼女のみぞ知る……ですが、私が想像するに貴方が父親として、引いては人間として、尊敬できなくなったからだと思ふのです」

社長が言い返す気配はない。いや、返す言葉が見つからないのか。凶星を指されて。

「貴方はちゃんと御息女のことを知ろうとなさっていますか？ 趣味、特技、好きな食べ物、好きな場所、好きな番組。それから——好きな人がいること」

ハッと顔を上げた縁はおじさんを見て、次いで俺を見て、頬に紅葉を散らした。分かりやすいな、おい。まだ秋には早いぞ。同じアントシアニンなら蕎麦木は年中赤いが。

「知らないでしょう？ 貴方は。そんな事も」

おじさんには珍しい攻撃的な言葉。それを受けた社長は苦し紛れに口を開いた。

「……散々好き勝手言ってくれているが、全ては我々稲葉家の問題だ。貴方には関係ないことでしょ」

「いいえ、あります」

敵前逃亡を図った社長だったが、それも簡単におじさんに一蹴されてしまった。俺だったらこれを言われたら引き下がってしまうかもしれない。さて、おじさんは何を根拠に関係あると豪語したのか。

「そちらの御息女は将来、貴方だけでなく私の娘になるかもしれないのですからね」

縁に目を向けてみれば、完全に秋の竜田川を越えているし。見て俺まで赤くなりそうだろうが。俺はまだそんなつもりはねえ！

その時背後の階段から二人分の足音が聞こえてきたが、この状況を見てどう思うのだろうか。涼しい笑顔で立っているおじさんを心に、顔を赤くした人間が三人。間違いなく緊迫したシーンではないわな。

ピタリと動きを止める。それからのは行動は意外だった。

静かに笑い出したのだ。そしてそれは間もなく境内を穢すような醜声の哄笑に変わる。

この上ない不気味さに、さすがのおじさんも一歩を退く。

118

きた。こんなに頬を濡らして。よっぽど怖かったんだな。俺だってコイツの頭を泣き止むまで撫でてやりたいが一先ずは俺のすぐ後ろにいるお婆さんと静流さんに預ける。それから、社長がどんな行動に出てもいいように懷から針を取り出して構えた。

聞くに堪えないこの笑いが、初めて気付いた己の醜さに向けたものだったら良かったんだが、このおっさんに限ってそれは無いと断言できるのが悲しいね。

「……ははあ、つくつく……、なるほど、これかあ」

その通り、ようやく止んだ奸凶のような哄笑の後に続けた言葉は、それはもう最低のものだった。

「これが宗教お得意の『洗脳』かあ」

それはこの世界に数多い宗教信者全てを愚弄する言葉だった。思い出すのは先の地鎮祭の時。まるで自分とは違う野卑な生物でも見ているかのようなだった視線。まるで愚かな滑稽劇でも観劇しているかのようなだった表情。その全てが今の最悪の言葉に繋がっていたのだ。

「かはは、さすがだ。これが洗脳、洗脳だあ。かつて人々に死後の安寧なんてあるはずのないものを約束して、意のままに動きしかも死をも恐れぬ最高の兵隊を作り上げた宗教。神への捧げ物だと信者を誑かして寄付をさせ、己が至福を肥やしていただけの神官ども。くかか、娘を調教して我が社に取り入ろうとでも考えているのか？

これだから卑俗のオカルトには付いて行けん。……反吐が出る」

それはアンタが宗教の上っ面しか知らないだけだろうが。宗教にだって色々ある。確かに過去にはそういった側面もあっただろう。でも信じている人はそれを生きるための希望にし、生きるときの規範にし、生きることの喜悦としている。その意思を、その誇りを、その信頼を、アンタが卑しめていい権利なんてこれっぽっちも無い。そんなもの、誰にもありはしないんだ。

でも、目の前で荒れ狂うおっさんは、そんな事にも思い至れない。人としての尊厳を失った者はどうなるのか——そんな哲学的な疑

問にも今なら答えられる気がする。何せ、その成れの果てが目の前にあるんだからさ。

社長は境内を、まるでゴミ屋敷の中にいるかのように顔を顰めながら見回し、

「国民のほとんどが無宗教である日本こそが、世界で最もまともな国だと思っていたんだがなあ。そういえば神道なんてマイナーな宗教がこの国には蔓延っていたよなあ。……………もういい！ 戻るぞ！」

再び大声を張り上げたのは何故かと考えていると、社務所の中から黒くてデカイ影が飛び出してきた。その黒服をビリビリに破いた影——爺やは社長の元へ走って追いつく。

社長は心を患っているとは思えないほどの破滅した笑顔のまま反転すると、階段の方へと歩いていく。

「そんな餓鬼、くれてやる。所詮、他社とのパイプ作りにしか役に立たん小娘だ」

最早視線は縁を追うこともない。道化師のような笑みで階段を目指し、降り始める。

「それにしても盲点だった。この国を良くしていくためにはまず、こんなものからどうにかしないといけないよなあ」

そんな邪悪な言葉を静謐な境内の空気に混ぜ込みながら、社長は去っていった。

社長がいなくなり、立ち込めていた暗雲も大方彼方へと消えていって気が緩んだ瞬間、他の懸念を思い出した。他の四人より先に走り出す。

さつき爺やは社務所から出てきた。ということは当然ながら社務所の中で何かをしていたということで、そこに日向と恭子さんの二人がいる可能性も高い。

我が家に土足のまま上がることは最低限の礼儀として許すことなどできず、しかし玄関にてコンマ一秒で靴を脱ぐと中に踏み込んだ。

「おい、日向！ 恭子さん！ どこだ！」

社務所全体に響き渡るように叫びを上げると「こ、こっち……」と返ってくる声があった。どうやら座敷の方から聞こえてきたようだ。そちらに急行すると、

「はあ………はあ………、っはあ………」

昨日の登場時同様に服をビリビリにした恭子さんと、隅っこの方で身を小さくしている日向の姿を発見した。恭子さんの方はやはり登場時と同じように満身創痍だったが、日向には外傷はなさそうだった。所どころ畳が節くれ立っていたり障子が破れていたりするの
は、ここで戦闘があった証拠だろう。

「大丈夫か、二人とも」

「っ、ええ。何とか。――そ、それより！」

恭子さんは目に涙を溜めて俺の両肩を掴んできた。

「お嬢様は！？ お嬢様はどうなさいました！？」

この人もよっぽど心配してたんだな。いい主従だ。

「大丈夫です。縁なら今外でおばさんと静流さんと一緒にいるはずですから」

聞き終わるや否や俺の肩を突き放し「お、お嬢様――！」と泣きながら主の元へと向かってしまった恭子さんなのでした。さもありなん。引き止めるのは無粋だろう。

そして俺は、もう一人の俺が心配するべき人物に向き直る。暴れん坊爺やが去って多少恐怖は収まっただろうが、やはり今も体の震えは止まっていない。そりゃそうだな、こいつだってちよつと意固地なだけの普通の女子高校生だ。目前で殴る蹴るの戦闘を繰り広げられたら普通に怖いだろう。男子高校生の俺だって怖い。

震えつつ俺を見上げる瞳には涙霞が掛かっていて映る姿はぼやけているだろうが、それでも俺と判別できたようで、とうとう涙腺が決壊してしまった。そんな日向の傍で膝立ちになり視線の高さを合わせたら、掛けるべき言葉は一つだ。

「もう大丈夫だからな」

「……うんっ………う、うわあああん！」

顔をくしゃっとさせて俺の首に抱きついてきた。もう少しこういう部分を普段から出していけばウチの学校でもフアンクラブとか出来るんだろーうけどなーなんて無骨なことは言わない。俺はタイミングの分かる人間のつもりだし、そもそもこいつは意地っ張りだからな。そんなことを実際に聞いたら益々意固地になるだろ。

当分やみそうにない日向の心の雨を肩で浴びていたところ、背後にドタドタといった足音が近づいてきた。振り返ってみるとおじさんで、息を切らしているのは最近運動をしていなかった身体を無理矢理に走らせてきたからだろう。それだけ急いでいたのだ。愛する娘の無事を確認するために。

日向もおじさんの姿を目にし、涙の量を増やす。それから立ち上がるとその胸に迷わず突っ込んでいった。クリーニングに出したら相当高そうな狩衣に涙が滲みこむのも厭わずに日向を受け止め、優しくその髪の毛を撫でているおじさんの姿を見て、俺は正直にこの人のような父親になりたいと思う。それに、最高の反面教師も見れたからな。

心から辿りたい道と絶対に辿りたくない道。この二つがはつきり見えているってのは、男としてかなりの強みだと思うがどうだろう？

外からも四人が戻ってきて、現在居間には今朝と同じくおじさんお婆さん静流さん日向恭子さん縁、そして俺の七人が全員揃っていた。七人全員で囲む丸い卓袱台は少し小さいが、その小ささが今がとても嬉しい。

七人全員でお茶を啜り、ほっと一息。ようやく戻ってきたこの優しい空気の中で、一番初めに口を開いたのは先ほど応急手当を済ませた恭子さんだった。ちなみに今は静流さんの私服に身を包んでおり、見慣れない水色のシャツブラウスに白のロングスカート。俺としてはこれを着た静流さんも拝見したい。なんて、恭子さんに失礼か。

「申し訳ありません！」

音も立てずに湯飲みを置くと、一步を退き土下座する。それから卓袱台の上に何か黒い物体を一つ乗せた。長辺二センチ程度の本当に小さな物で、どうやら小型の機械のようだった。遠目から見たら、筆筭とか冷蔵庫の裏によく隠れていそうなあの黒光りするG——油ギッシュなコックローチに見間違えそうだ。

他六人の頭の上に？マークが浮いているところへ恭子さんが投下したのは、中性子爆弾さながらの威力を持った爆弾発言だった。

「これは盗聴器です」

全員がズザッ！と同時に身を引いたのも無理はないと思う。だって盗聴器だぞ。そんなもの普通に生活してたら一生触れる機会のない機械だろ。果てしなくサスペンスの匂いがするし——はっ！
そういえば今日は火曜日だったか……！

なんて、どうでもいいことを考えていたのは恐らく俺だけで、全員の脳裏に浮かんでいた言葉は一致していただろう。曰く——『そこまでするか！』。

「先ほど調べてみたところ、私の鞆に仕掛けられておりました。そのため昨日私がこちらにお邪魔してからのお話は向こうに筒抜け。逃げる手段があると知られてしまったため、私たちに逃げる暇を与えないよう警告も無しに爺が突入してきたようです」

もう一度ガバツと恭子さんが土下座する。今度は静流さんが先手を打って額の下りてくる位置に掌を構えており、頭を下げたところで押し返していた。

そうして顔を上げさせられた恭子さんの目に映ったのは六人分の苦笑。

「まあまあ、皆無事だったんですから」

おばさんがまったりと言った言葉こそが俺たちの総意だ。七人が全員この居間に『いつもどおり』揃っている、その事実が何よりも俺たちにとっての僥倖。恭子さんが参加したのは昨日が初めてだなんてツツコミは厳禁だ。既に心は一つなり。

しかし、恭子さんは自分の不甲斐なさが許せない様子。

「ですが、私の注意が散漫だったせいで日向様にまで怖い思いをさせてしまいました」

一番の後悔はそのようだ。しかし、ここにいるのは葛城家。日向を含め、恭子さんに恨みを持っている人間などいはいはない。

「ですがデスラーありません。あなたが気に病むことなんて何も無いんです」

これを言ったのはおじさんです。好きですね。

「ふーむ、……でしたら、夕食は恭子さんに作ってだけませんか？ 今日みたいなのは老体にはきつくって」

自分の肩をとんと叩いてみせるお婆さん。これがこの人の配慮の仕方だ。

恭子さんは愛溢れる言葉を受けて途端に瞳を潤ませ、はい！ と返事をするとお勝手へ歩き出そうとする。と、そこに付いていく人がいた。静流さんである。

「お手伝いしますよ」

「え、ですが……」

「昨日のお料理がとても美味しかったので。私にもその秘訣を教えてくださいませんか？」

……しみじみ思う。本当にここはいい場所だ。

いつも俺たちを大らかに見守ってくれているおじさん。お婆さんの持っている優しさや慈しみの心は確かに娘二人にも受け継がれていて、静流さんはもちろんのこと最近では日向からもちよくちよくそれを感じるようになった。

そして、新参の家族である縁は今の遣り取りを見て感極まったのか目頭を指で押さえている。この少女はそこで泣ける人なのだ。

もう一人の新しい家族である恭子さんは、日向に怖い思いをさせてしまった事をあんなに気に病んで、その謝罪とそれでも自分を許してくれた感謝から何かを返したいと夕食の準備をしてくれている。この居間には優しさと感謝が溢れている。

俺は今まで『類は友を呼ぶ』という諺をネガティブな意味でしか使ってこなかった。でも、これをポジティブな意味で使えた時、そのコミュニティは間違いなく暖かな場所になるだろう。この場所のように。

日曜日。縁が自室で言っていた言葉にも、今なら心底同意できるな。

——ああ、俺も好きだ。この居間が。

だからこそ、守りたい。

社長が置き土産に残していた奸悪な言葉を思い出し、俺はその意志を新たにした。

第八話

カレンダーを見てみれば、今日の日付は青色で記されている。つまりところ俺にとつてのハッピーホリデー土曜日であるのだが、残念ながら今の俺はそれを心から謳歌できる心理状態ではなかった。

俺だけではない。水分神社に現在住んでいる七人全員が、あの日以来心から休めた日など一日たりともなかった。あんなに明るかった食事時の空気はどこかぎこちなくなっているし、あまり笑い声も響かない。時々縁と恭子さんが申し訳なさそうにしているが二人がそんな顔をする必要なんて全く無いのは誰もが承知している。悪いのは全てあの男だ。

今日の昼飯も、やはりそんなギスギスした中で摂られている。恭子さんが作ってくれたはずなのに暗い心情のせいで味を堪能できないのが正しく口惜しい。

このまま状況が変わらなければ俺たちはただ憔悴していくだけ。でもあの社長の事だ。絶対にまたここに来る。俺たちの大切な場所を、俺たちの目の前で否定するために。

そして今日。幸か不幸か、状況が動いた。

ピンポンと呼び鈴が鳴らされて全員同時に箸を置いたのは、皆どこか予感めいたものがあつたのかもしれない。

おじさんを先頭にして歩き出し、扉の磨りガラスの向こうに大柄の黒い影が見えたところで恭子さんがおじさんを抜かして前に出た。俺たちに下がっているよう合図をして一気に引き戸を開け放つ。

やはりそこに立っていたのは真新しい燕尾服に身を包んだ爺や。しかし恭子さんの姿を見ても攻撃を仕掛けてくることは無く、そのまま一步を後退するとそのまま反転して歩き出した。意味なんて明々白々。外に出ろ、ということだろう。

従うと、境内の真ん中に一人の男が立っていた。もちろん見せ付けるように高そうなスーツを着て拝殿を睥睨しているあのおっさん

は例の社長、稲葉秀一郎だ。爺やはそのまま歩を進めると社長の背後にて立ち止まった。そこが指定ポジションらしい。

俺と恭子さんがおじさんを挟んで並び拝殿を背にして社長に向かい合うよう移動する。その後ろにおばさん静流さん日向、そして縁が隠れる構図だ。

こちらの準備が整ったと見たのか、袖の下を贈る奸吏のような嫌らしい笑みを浮かべていた社長が口を開いた。

「ご機嫌麗しゅう、皆さん」麗しくねーよ。

「いつまたいらっしゃるのか分かりかねましたので、おもてなしの準備も整っておりますがご了承の程を」

「構いませんよ。私もこんな胸糞悪い場所で飲み食いできるほど肝が据わってはおりませんので」

今日は初めから全開だな。長居すらしたくないのか社長はさっさと話を進めるように両手を広げた。

「本日は一つお願いがありまして伺った次第です」

「どういったことでしょう？」

「こちらの神社の土地を譲っていただけないでしょうか？」

そんな感じのことも予想していたとはいえ本当に口に出すとは。罰当たりだな。

当然、おじさんの返答も否だ。

「申し訳ありませんが、そのようなお話にはお答えのしようがありません。ここは神の坐します神聖な神領であって、誰のものでもないのですから」

「はて」

社長はさも驚いたように目を見開くと懷からA4くらいの一枚の紙を取り出した。

「こちらの土地は貴方の名義になっているではありませんか。誰のものでもないと言っておきながらしつかり所有しているなんて、神主様も人が悪い」

「……私はこの水分神社の宮司として、また神の使わしめとして、

神のお降りになる土地を守護しているだけです。登記に書かれた名義などさしたる意味を持ちません」

はつきり言って俺にはさっぱり分からない。登記ってなんだ？
明らかに法律関係っぽいのだが、それがどんなモノなのか見当もつかない。こんなにも話が分からないというのは不安になるものなんだな。今度日向に謝るとしよう。

そんなことより、このまま法律関係に話を持っていかれたらいくらおじさんでもキツイ気がする。相手は腐っても社長だ。法に関してだったら間違いなく向こうに分がある。

しかし、なぜか社長は自分からそれを取り下げた。

「では話を変えましょう」

視線を上げ大仰な仕草で境内を見回すと、

「神社というのは何のために存在しているのです？」

こう言ってきたのだ。自らこちらのテリトリーに踏み込んできてくれたのはありがたい限りで、こちらにとって都合が良すぎるのが逆に不気味だが、法律関係の話よりも回答の選択肢を多く用意できるのも確かだ。その誘いには乗るべきと踏んだのか、おじさんも圧され気味だった気を取り直して正面から社長を見据えた。

「人々と神を繋ぐ場所として、参拝者が神に乞い願う場所を明確にするためです」

「では、人々が神に請願するのは何故ですか？」

前回対峙した時とは完全に構図が逆になって矢継ぎ早に質問をされるおじさん。胡乱な目で社長を不審に思っているようだが、おじさんは明確な答えを返した。

「神に祈願し、それにより心の安寧を得るためでしょう」

「もう少し簡単をお願いします」

「……………安心するため、でしょう」

その答えを聞いた途端——ニヤアと。罨に掛かった鼠でも見たかのように、社長は口端をつり上げたのだ。その言葉を待っていた——と言わんばかりに。

気味の悪い態度のまま、社長は懷から新たな紙の束を取り出す。

「それではこちらを御覧いただきましょう」

自信たっぷりにおじさんに渡した紙束の表紙を横から覗き見てみれば、表紙に『新都心開発企画書』と固いタイトルが踊っている。なぜこれを渡されたのか分からず眉を顰めていたおじさんだが、それを一枚二枚と捲っていく三枚目のところで信じられないものでも見たように目を見開くと、そのまま震えだしてしまった。おじさんのそんな姿なんてこれまでに一度も見ただけでなく、未だかつてない恐怖に襲われた俺は慌てておじさんの視線を追う。

——地面が揺れたように感じた。

開発予定地の項だ。そこに水分神社を飲み込む範囲が示され——
「……っ」

——新病院建設予定、とあった。

また俺は同時に、どうして人が神社を訪れるか。社長がそれを訊ねた意味を悟った。

「いかがです？ 私の考えたプランは。あらゆる人に受け入れてもらえる、最高のプランだとは思いませんか？」

安心の価値観を比べるつもりなのだ。過去と現代の。

「二十四時間体制の大病院です。近頃問題の産婦人科医も常に五人以上を常駐させ、それ以外のあらゆる分野の診療科も多数の医師を配置。誰もが平等に治療を受けられて命を救われる病院施設と、こんな祈っても祈っても報われる保障など何もない一宗教施設。一体どちらが現代の人にとって求められているのでしょうかね」

おじさんは先ほど、人々が安心を得るために神社を訪れると答えてしまった。それは間違いじゃない。あの質問の答えはそれしかない。でもだからこそ、こちらには逃げ道が残されていなかった。

わざわざ産婦人科の話を出したのは、水分神社への当て擦りか。

「で、でも……それは、安心の種類が違——」

「違うんでしよう、何も。安心とは人が衛生的に生きていく上で不可欠な精神状態。得られる場所は違っていても、それは同

じ安心です」

こんな、人の心を何も分かってないヤツに安心なんてものを諭される屈辱に震える腕を押さえる。その社長に目を向けてみれば、取るに足らないものとても対峙しているように酷薄な笑みを浮かべて平然と立っていた。

「もう必要ないかとは思いますが、これを」

言うと社長は更なる紙束を持っていた鞆から取り出すと、おじさんに手渡す。その際におじさんの腕が震えていたのを見て笑みを濃くするコイツを、本当に俺は許せない。

しかし、俺の怒りの後ろ盾であるはずのおじさんの震えは、その紙束を見て止まってしまった。何なのかと俺も見てもみれば、それは――

「約五百人分の署名です。私のプランに賛同していただけた方々の」――どうすればいい。これを覆すにはどうすればいいんだよ。

その沢山の人の名前が書かれた紙束は、破こうと思えば簡単に破けるはずなのに、燃やそうと思えば簡単に燃やせるはずなのに。しかしそれはどうしたって俺たちの手の届かないところで俺たちの存在理由を明確に否定していた。

これが、今生きている人たちの意志だったのか。

隣のおじさんに目を向ければ、既に震えは止まっていて、いつも俺たちへと向けられる笑みの絶えなかった笑い皺のある顔にも、今は何も浮かんでいなかった。ただ諦観だけが窺える無表情を張り付けている。

「お分かり頂けましたか？」決着はついただろう、そう聞こえた。

俺たちを完膚なきまでに捻り潰せた快感に満足そうに溜息をつく社長のその一言で――俺の中の何かがぶつんと切れた。

俺は知っている。こんなピンチの時、漫画やドラマみたいに都合よく助けてくれる神様なんていはいしない。敬虔な宗教信者なら神の試練とかって称すのかも知れないが、神様も残酷な試練を課すものだ。こんな乗り越えようもない試練を。

ふと疑問に思うのが、最近よく聞く外国での銃乱射事件。毎度毎度そんな事件が起きるたびに十人以上の人が死んでいる。そこで死んでいった人たちは、神の試練で済ます事ができるのだろうか。これまで生きてきた二倍三倍、もしくは四倍も生きられたはずなのにそれを無慈悲に奪われて。それでも『こういう人生だ』と納得できるのだろうか？

とまあ何が言いたいかって、祈りが報われない事もあるってことだ。

最早怒りなんてどこにもない。頭の中を巡っているのは水分神社に来てからの事。

俺はここで、多くの人に支えられ、多くの人に出会って、また多くの人に救われた。俺はここで、多くの気持ちをぶつけられ、多くの想いを伝えられ、また多くの笑顔を向けられた。それらは全て、この水分神社が結んでくれた『ご縁』の賜物だ。

それは俺の中に一つの気持ちを生み出している。今、その気持ち顕そう。

水分神社にも配祀されている少彦名神。ちょっとだけ目を瞑っていてください。

目を閉じ、開けば準備は完了。

「――禁厭の一念を通す御針 怨敵調伏！」

躊躇うことなく投げた。全力で。狙うは勿論、俺の怨敵。

一直線に社長へと向かう針。いち早く気付いた爺やが射線上に割り込んでくるが――

「うぬう……！」

頭を庇った腕にその針の先端が触れた瞬間、針にはありえないはずの質量で打擲されたように後方へと吹っ飛んでいった。

これで邪魔はいなくなった。俺は真っ直ぐに怨敵の元へと近づいていく。

今の俺はどんな顔をしているんだろうな。怒っているだろうか。泣いているだろうか。それとも、笑っているだろうか。まあ、どう

でもいいか。

尋常でない様子で吹っ飛んでいった爺やを見て腰が砕けたのか怨敵は尻餅について呆然と俺を見上げている。その顔はやがて、恐怖に歪んでいった。

「今の、何だと思えますか？ 実は神道の呪いの一つなんですよ。つまり、貴方が卑俗だと罵ったオカルトですね。どうです？ それを実際に目の当たりにした感想は」

「ひ、ひい！」

俺が一步近づくと怨敵も尻を滑らせて後ろへ下がる。その姿のなんと滑稽な事か。

「俺の生まれた所は三輪神社と言いましてね。そこには少彦名神と大国主神という二柱の神が配祀されていました。今の呪いは『蔭針』と言いまして、少彦名神が創めた秘伝とされているんです」

そこらに落ちている小石を投げってくるが、そんな非力な投石じゃ手で払う必要もない。

「この二柱の神は禁厭や医療の神とされていていまして『蔭針』も本来は医療用の呪いとして編み出されたんです。しかし三輪神社の祭神の性質により、その『蔭針』も調伏の意味を持ちました」

境内の縁にまで後退し背後にあるのは杉の乱立する山野。容易に逃げる事は叶わない。

「その祭神の名を、大物主神と言います」

「……うおおああ！ く、来るなあ！ バ、バケモノ！」

俺からしたら、お前の方がよっぽどバケモノだったうの。

「大物主神は普段酒の神なんですが、しかし人々が神への感謝を忘れた時、もしくは人々が悪事を働いた時、祟り神として現れます」
災厄は忘れた頃にやってくる、とは良く言ったもので、それは正しく神様への感謝を忘れた頃に大物主神が祟りとして起こしているんじゃないかと俺は思うわけだ。

きつと、目の前で醜態を演じている怨敵は神様への感謝なんて忘れて久しいだろうな。

追いついたところで襟首を掴み、持ち上げる。そして、顔を近づけて言う。

「貴方もそろそろ祟りを受けるべきだ。バイ大物主」

針を逆手に持ち替え、大きく振り上げる。

「た、助け……！」

今さら命乞いか。面白い冗談だな。今まで自分がしてきたこと、これからしようとしたことを思い出してしろ。

「うーん………それ無理」

残念ながら俺はこの腕を振り下ろす事に何の躊躇いもない。それくらい、俺はアンタが笑いながら壊そうとしたものを守りたい。

「せいぜい黄泉で、一日千人殺すって評判の伊弉冉尊と仲良くやっ――！」

振り下ろそうとした腕はしかし、目の前の見苦しい男の桜を散らせる事はなかった。でもなぜだ？ 俺の腕にはちゃんと力が籠っている。そちらを見てみれば、二匹の白蛇が俺の腕に絡み付いていた。そういえば大物主神は蛇の身体だったな――なんて冷めたことを考えていた俺の頭は、その蛇の正体を目にしたところで一瞬にして沸点を超える。

俺の腕を、歯を食いしばりながら止めていたのは、縁の腕だった。

「な、……なん、で……」

俺は呆然とし、初めて縁に心からの怒声をぶつけた。

「何で今さら庇うんだよ！ 散々コイツに傷つけられたお前が、どうして……！ どうしてコイツを守ろうとするんだよ！」

「違う！」

それでも縁は俺の腕を放そうとしない。それどころかますます腕に力を込めると俺の怒声を覆い包むほどの声量で叫び返してきた。

「こんな人、どうでもいい！ 私は、康司君が、この人と同じになっちゃうのが嫌！」

縁の叫びは途中から涙混じりになっていき、それを聞いた俺の頭は途端に温度を下げていく。こいつは今なんで泣いている？ 誰の

せいだ？ 誰が縁を泣かせた？

——俺だろうが。泣いているコイツを救いたいと願ったはずの、俺のせいだろうが。

込めていた力が抜け、手に持っていた針がカチンと小さな音を立てて石畳に落ちる。そして腕から手を離れた縁はすぐに俺に抱きついてきた。もう俺に同じ事を繰り返させまいと。まるで、あの日のお返しとでも言うように。

「今の康司君、凄く怖い顔してた！ 凄く嫌な顔してた！ この人と同じ顔してた！」

……気付いてたさ。俺はずっと笑ってた。コイツを叩き潰せる喜びに下卑た笑いを浮かべてた。でも、それでも——

「っ……だったらどうすればいいんだよ！ コイツがこの世に生きている限り、水分神社は救われない！ 俺はここに、ここに住む人たちに一生掛かってでも返しきれないくらいの恩が有るんだ！ それを、その全部を守るには他にどうすりゃいいってん——」

最後まで続けられなかったのは頬に衝撃が走ったからだ。パアン、という景気のいい音を立てて。

そちらを見て、俺は固まった。

「そん……っ、そんなこと、で……恩を、返せるって……！」

——静流さんが泣いていた。

笑みの形で見慣れてしまった顔を、見たこともないくらいくしゃくしゃにして。

「うっ、それが……あ、……貴方の、家族孝行ですかあ！」

二度目の平手が来たが、そこにはもう叩く力はいれられておらず、優しく滑るように俺の頬を撫でるだけ。でも、俺にはそっちの方が効いた。

二度と私に貴方を叩かせないで、そう言われているように思えたから。

「私は、……康司さんが、家族、孝行って……言ってくれた、時……凄く嬉しかった！ それがこれじゃあ……悲しすぎます……！」

静流さんは立っているのも辛いのか俺の肩に額を乗せて、そのまま泣き入ってしまう。

唇を噛む俺に、続いて声をかけてきたのはおばさんだった。

「神社で生まれ育ち『蔭針』を修められるほど神道に親しんできた貴方なら当然知っていることと思いますが、神道は結ばれた『縁』を守護します。貴方がその先の行動をしてしまったのは、私たちと貴方の『縁』はどうなってしまうのです？ 自分から神様の顔に泥を塗るのは止めましょうよ」

そちらを向けば、やはり目に焼きついている笑顔はない。考えなしの行動で、この人からも笑顔を奪ってしまったのか？ 俺は。

「それに一部の伝承では、三輪神社の祭神である大物主神は大国主神の和魂とされていたはずです。多くの者の悪意に翻弄され泣き叫んでいた因幡の素兎を救った心優しい神である大国主神の、和魂だったはず。そんな神様の名前を持ち出して素兎を泣かせてどうするんですか」

胸元にかかる熱は何かと見てみれば、俺のシャツに滲みこむ縁の涙だった。

「縁さんと私たちの縁は貴方がいたからこそ結ばれたものです。もしこの神社が無事だったとしても、そこに貴方がいなければ何の意味もありません。履き違えないでください」

……………これは、キツイな。

俺は今まで、この人の怒った姿など見たことがなかった。だからこそおばさんが怒る時それは何時だって本気だということだ。その言葉の一つ一つが俺には大きな意味を持って頭に入り込んでくる。それはきつと、俺がこの人に救われたあの日から。

顔を上げれば、それぞれの表情を浮かべている皆の顔。しかしそのどれもが俺を見て、俺を想い、俺の無事を願ってくれているのだと伝わってくる。

泣きそうになった。嬉しさもあるが、しかし、それ以上の理由がある。

怖かったのだ。俺があ腕を振り下ろしていたら、もうこの輪の中には戻れなかった。縁が必死に俺を止めてくれなければ、二度とこの人たちの心からの笑顔を見ることはできなかった。一度は覚悟をしていたはずなのに、いざそれを想像するとこれ以上ない恐怖に襲われ愕然とした。

結局、俺は皆を守るつもりで、皆に守られたんだな。社長に滑稽だ滑稽だと言っておいて俺だっけかなりのピエロっぷりを晒してたんじゃない。

もう一度針を握る覚悟は、できそうになかった。

再びあの醜声が耳朶を汚したって。

「……は、はは、くはあははは！　な、なんだこの三文芝居は！　こんなお涙頂戴の猿芝居で改心する人間がいるとでも思っているのか！　くかか、愚かだ愚かすぎる！　流石は寄り集まって不気味に呪文を唱えるしか出来ない宗教家ども！　樂觀的に過ぎて始末に負えん！　どうにしろ交渉は私の勝ちだ！　さっさとこの権利書を渡し——」

勝ちを確信してさぞ気持ち良く吠えていただろう社長だが、そこで新たな声が割り込んできた。しかしその声というのは明らかに——
——おにゃあ！　おぎゃあ！　おぎゃあ！

赤ん坊のものだった。

音源はどうやら階段の方。境内にいた全ての人が同時にそちらを向く。果たしてそこにいたのは赤ん坊を抱いたお母さんと、その旦那さんらしき人だった。お母さんの方は急に泣き出してしまった我が子とこちらとを交互に見てはオロオロしている。

「「あっ」」

と声を上げて驟雨の如く突然現れたその一家に目を見開いたのは俺と静流さん。

向こうも俺たちに気付いたらしく、奥さんの方は顔を綻ばせると赤ん坊に振動を与えないように細心の注意を払いながらこちらへと駆け寄ってくる。一方の旦那さんが決まりの悪い様子なのはしょう

がないかとも思う。

「えー……っと、お取り込み中でしたか——って、どうなさったんですか！」

静流さんの赤くなった瞳を見て泣いていたのだと理解したらしい奥さんは、つい大声を出してしまい、泣き声のポリウムを上げてしまった腕の中の赤ん坊を慌ててあやし始める。自分だけ立ち止まっているわけにもいかなかったのか遅れてきた旦那さんも静流さんの雰囲気覚えていたようで、その違いに目を見開いている。

その人たちと既知だった俺と静流さんはともかく、他の人はこの二人の事を知らない。が、赤ん坊の元気のよすぎる泣き声は説明する暇すら与えてはくれなかった。

それにしても、その泣き声のなんと旺盛なことか。知らず知らずのうちに俺の口元には微笑が浮かんでいた。他の人を見遣れば、やはり同じように微笑んでいる。

その声は未来を生きる活力に満ち溢れていて、こちらにまでその元気を分け与えてくれているようにも感じる。ま、この空気が堅くて泣き始めただけなんだろうけどな。

でも、どちらにしたって俺たちの中には確かに希望が生まれていた。俺はさっきまで、かなりシリアスなシーンを演じていたはずなんだけど、そんな空気など大型ファンの前に漂っている風船のように吹っ飛ばされてしまっている。きっとこの子にしたらヘリウムよりも軽い気体だったんだろうな。

しかーし。ここには一人だけヘリウムをシアン化水素に変換する未知の科学装置が存在するのだ。

「……その五月蠅い餓鬼を黙らせてもらえないか。腹立たしくてかなわん」

自分だってこんな風に泣き叫んで母親や周りの人を困らせた時期があるというのに、そこにはやっぱり思考がいかないんだな。別に期待してないけど。

気分良く勝利者宣言していたところを邪魔されて、新参者に憎々

しげな視線を向ける社長。その悪人面に奥さんはひっ、と一步を引き、旦那さんの方は奥さんと我が子を庇うようにその前に出て社長を睨む――が、すぐに驚いたように目を剥き、携帯を取り出すとどこかへ連絡し始めてしまった。

俺たちから少し離れて喋っていたため内容は聞こえなかったが、たぶん仕事に関するものだろう。やがて携帯をズボンのポケットに仕舞うと戻ってきた旦那さんは、俺たちでも奥さんでもなく、社長に向き直った。

「あなたは、稲葉秀一郎さん、ですね？ 稲葉建設社長の」

『……！』これは旦那さん以外の全員が息を呑んだ音だ。何で知ってるんだ？

「だ、だったらどうした若造が！」

旦那さんのそんな得体の知れない行動に明らかに虚仮威しの叫声を返す社長。しかし、旦那さんはそれを気にする様子もなく、ふーむ……、と唸りながら俺たちを見回し、やがておじさんの持っていた書類に気が付いた。

「その書類、見せていただけませんか？」

「え、ええ」

咄嗟に渡してしまうおじさんからは良い人オーラが滲み出ています。

「ふーむ……」

唸りながら書類をぺらぺら捲り、企画書をあらかじめ見終わった時点でこの水分神社が窮地に立たされていることを理解したのだろう。それでも表情を崩さずに次の紙束に目を通し始めた。

皆が押し黙っている中で、旦那さんが署名の書き連ねられた紙束を捲る音だけが響く。終わるまで数分。誰も彼も喋ることも動くこともせず、ただじっと旦那さんの理由の見えない行動を見守っていた。

「ふむ」

そして、また唐突に口を開いた。

「稲葉社長。一つ、質問をよろしいでしょうか？」

「な、なんだ？」

気圧された社長は従順にも返事をしてしまう。しかし、その次の瞬間のうろたえっぷりは見事なものだった。

「この署名の人数が、稲葉建設の従業員数とほぼ一致しているのはどうしてでしょう？」

聞かれた瞬間、目に見えて惑いだす社長は、簡単に陰謀の端っこを見せてしまった。

そう、汚い陰謀だ。このうろたえぶりを見るに、旦那さんの言っているセリフは図星を指してるようだ。どうして旦那さんが稲葉建設の従業員数なんて情報を知っていたのかは分からないが、これはチャンスかもしれない。

「どういうことです？」

おじさんも迷わず攻勢に出た。

「そ、そんなの偶然に決まっているだろう！」

自らに刺さる視線は総じて温度を下げていき、やがて自分がアウエーになったと感じたのか社長は遂に開き直った。

「だ、だが偶然じゃなかったとして私に何の罪がある！ 貴様らに咎められる筋合いなどないわ！」

……これはもう、黒ってことでよろしい？ あれだ、探偵モノのアニメとかドラマで追い詰められた犯人が『だったら証拠を見せてしろ！』っていうアレと同じだ。

旦那さんが呆れたように嘆息する。

「……稲葉社長、昨日はどこで何をなさっていたんです？」

「き、昨日は別荘に……」

さすがは社長。通常勤務日であるはずの平日とか関係ねえ。

「ニュースも御覧にならなかったのですか？」

ん？ それは俺も知らないぞ。この社長に関するニュースが何かあったのか？ 周囲を見てみれば他の家族も皆首を捻っている。

パトカーのサイレンが耳に届いたのは、その時だ。

電気ショックでも食らったかのようにビクウッ！ と全身を強張らす社長を嘲弄するようにそのサイレンは水分神社の下で停まり、続いて複数人が階段を駆け上ってくる音が伝わってくる。

啞然とそちらを見ている社長に呼びかけ自分の方を向かせる旦那さん。その手には、どこかで見たような黒い手帳のようなものが掴まれていた。

「昨日、稲葉建設の立ち入り調査を行いました。稲葉秀一郎さん、貴方の逮捕状を取得した上でね」

スーツを着た男性四人が境内に踏み込んできた。そしてあつという間に社長を取り押さえてしまう。それでも社長は旦那さんに視線を固定したまま、口から魂でも吐き出しているかのようにぼけーっとしていた。

聞こえているのかいないのか分からず苦笑した旦那さんは、それでも社長に言葉を掛ける。種明かしをするように。

「どうしてバレたのか分かっていらっしやらないようですね。簡単に言いますと、貴方は社員からも嫌われていた、ということですよ。内部からこれだけ同じ証言が出てきては、どうしようもないですよ。ね。求心力の無かった己を恨んでください」

旦那さんと敬礼を交わすと男性四人は社長に手錠を嵌めて連行していく。引かれるまま階段を下り始め、視界に赤いパトランプが入ったところで「うおおおおお！」と暴れだしたが、自分よりも大柄な男性四人に囲まれていては為す術なし。

今日これまでのシリ阿斯が嘘のように、稲葉秀一郎は敢え無く御用となった。

全員でポカンと口を開けたまま、沈黙が場を支配すること数十秒。一番初めに言葉を紡いだのは、これまで静寂を保っていた日向だった。泣き笑いの表情で目元を拭いながら零したのは次のようなセリフ。

「神様が、守ってくれたのかな……。私たちと、水分神社との縁を」
これまた全員がハッとして、弾かれたように顔を上げて三つの山

形の本殿を見る。特に俺は無意識の内にそちらへ向かって土下座でもしそうな勢いだった。

俺がさっき『都合よく助けてくれる神様なんていはしない』とか思ったから、拗ねた神様がその偉力を見せてくれたんじゃないだろうか。

ほんと、お茶目な神様なこと。

でも——本当に、ありがとうございます。

泣いていたはずの赤ん坊は、今では愉快にきゃっきゃと笑っていた。

エピローグ

もうお分かりかと思うが、旦那さんは警察の人だった。正しくは司法警察職員とか言うらしいがよく分かったのでどうでもいい。それでも今、目の前の卓袱台には刑事ドラマで良く見る黒々した手帳が置かれているのだ。テンションが上がらないはずがない。しかしこの旦那さんと浅からぬ因縁？　がある俺としてはじっくりと見られないでいる。それに気付いた奥さんが脇を小突き、旦那さんは漢方でも飲んだ時のように苦々しく顔を顰めたのち諦めたように嘆息すると、その手帳を俺の方に押しやってくれた。……つうか、一般人が見ていいのだろうか。

ただ今社務所の居間にて丸い卓袱台を囲んでいるのはおじさん、お婆さん、静流さん、日向、俺、縁、恭子さんの七人と、俺たちのメシア様たるご一家三人を含めた、遂に合計二桁突入の十人だ。

そういえば名前をまだ明かしてなかったが、このご一家は有吉（縁起が良い！）さんといって、旦那さんである孝介氏と奥さんの菜月さんご夫婦、そしてその第一子である美月ちゃん（女の子）だ。ゴメンなさいね大人気なくて、と俺に会釈をしてくる菜月さんの様子からすると孝介氏は早速かかあ天下に陥っている模様。

テレビをつけてみれば、どのチャンネルでも画面上の方に白文字で『稲葉建設社長 稲葉秀一郎氏逮捕 公正取引法違反で』というテロップが何度も流れていた。それだけ大きな事件だったらしい。首を捻っているティーン四人に孝介氏が説明してくれたところによると収益を水増しして発表していたとのことだ。そうすることで『この会社は儲かっているんだ』と勘違いした人がワンサカその株を買い、つり上がった株価のお陰で社長の持つてる自社株の含み益もホクホク、という全貌らしい。さっぱりだ。

その孝介氏は卓袱台を挟んでおじさんと向かい合うと、先ほどの書類を見ながら何かを話していた。

「こちらの企画書の件ですが。こんな企画が審査を通過した記録は一切ございませんのでその点はお安心を。そもそもこの神社のある区画は新都心の開発区域には指定されていません。おそらくこの土地を手に入れた後でどうしてもするつもりだったのでしょうか」

「は、はあ」

「そもそも、こんな企画案をコンペに出したところでゴーサインを出す人はまずいないとは思いますがね。神社を潰してまで病院を建てるなんて、日本人としてありえない」

「そう言って頂けると、我々としても嬉しい限りです」

「もちろん私などより神主様の方がよくご存知かと思いますが、神社というのは古くからその土地にあり、その地域性を表徴する重要なファクターです。それをむざむざ壊すなんて日本国内でだけでなく海外からもバッシングを食らいますよ」

良かった。例えば目的はそれぞれ違っても、日本人はまだ神社の意義を見てくれている。孝介氏は何の気なく言ったのかもしれないが、春風駘蕩なおじさんの皺の寄った笑みからも喜びようが伝わってくる。それを見ていた俺にはオイディプスコンプレックスなんて言葉が必要ない事を再確認した。何せ、こんなに心安らぐんだから。

やはりあの社長の方が特異だったんだと安心したところで俺はふいに縁を見る。あんなにだっただとはいえ、縁の唯一残っていた肉親が逮捕されたのだ。もしかしたら落ち込んでいるかも――

「わーぶにぶにー」

……大丈夫そうだった。日向や静流さんと一緒に菜月さんの腕に抱かれた美月ちゃんの頬をつんつんつきながら一点の翳りもなく笑っていた。しかしそれも強がりなのではと俺が訝っていたところ、

「んー？ なあに、その顔。私は大丈夫だよ？」

縁がこちらに気付いた。

「本当は私ももう少し何か感じるかなーとか思ってたんだけど、全然大丈夫だった。私、本気であの人の事が嫌いだったみたい。罰当たりかな？」

いや、そんなことはないだろう。

悪人は悪人でしかありえない。その点、社長は確かに悪人だった。何の打算もない、純粋な悪だ。

一方で、もし縁があんなでも私の父親だから嫌わないで欲しいと言ってきたのなら、俺は不本意ながら従うつもりだった。でもこの分なら嫌いなままでいられそうだな。どう言い繕ったって嫌いなものは嫌いなんだ。誰にも文句は言わせない。

それ以前にあの社長は自分から娘との縁を切ったのだ。とやかく言われる筋合いも無いだろう。加えて今の俺は、親であるということが子供に対するあらゆる免罪符にはなりえない事を知っているからな。

「それに」

.....嫌な予感。

にやっと笑って立ち上がると俺の隣にぴとっと寄り添ってきた縁は噴火中の桜島のように顔を赤らめると、俺への災難と言う形で降り注ぐ火山弾を放出してきた。

「おじさんとおばさんが、将来的に私のお父様とお母様になるんだもんね！」

やはり予感は的中してしまった。丁度話し終わったおじさんと孝介氏含め部屋にいる全ての人に聞こえるような大声で宣言してくれたお陰で、全員の度肝を抜いている。おじさんもおばさんも満更でもなさそうな顔しないでください！　って、そもそもそれを初めに言ったのはおじさんだった！

どんどん外堀から埋められていっている感じがするのは俺の気のせいだと誰か笑い飛ばしてほしいところだが、残念ながらこんな些細な願いには神様も聞く耳を持ってくれないらしい。もしかしたら俺はとんでもない悪女に目を付けられてしまったんじゃないだろうか——そんな恐怖が心の大地に芽生えつつあった。

「私も、子供欲しくなっちゃった」

不吉な事を言わんでくれ。今の会話の流れだとますますヤバイ。

ふと眼前から迫ってくる気配を察知してそちらに目を向けると一枚の胡麻つき円月輪が俺の脳天をがち割らんと迫ってきていたのだが、俺は泰然と焦ることなく目を細める。

そして――

『……!』

煎餅口キヤツチを成功させた。既にこの競技の泰山北斗である俺には造作も無いことだったが、見ている人にとってはビックリだったらしい。……なんだか、アシカショーに出演するアシカの気分になった。

胡麻の風味を楽しみながら咀嚼しつつ隣を見てみれば縁が顔を河豚みたいになっている。そんなに煎餅が食いたかったのだろうか。

そうではなかったらしく縁は次に日向の方を向くと、

「……なんか、癪に障るんだけど。それ」

毒を吐いた。きつとテトロドトキシンだな。

「何の話？」

「前から思ってたんだけど、貴女も分かっててやってるでしょ？」

「何の話？」

二人は同時に立ち上がる。

「ちよっと向こうで話しましょうか」

「いいけど？」

そして無言のまま何処かへと立ち去っていった。日向は無表情だったのだが縁の方は満面の笑顔で、それはそれは凄い笑顔。顔に影がかかって見えるくらいには頬の上がった素敵な笑顔だった。

「ああと、そういえば」

一番姦しい二人が居なくなっって何かを思い出したのかぼんっと手を打ったのはおぼさん。

「本日はどうしてこちらに？」

と、有吉夫妻に問い掛ける。確かにそれを聞いていなかった。おじさんも失念していたようで額を一度叩くと自分に苦笑した。

「そうでしたね。それを聞いていなかった」

忘れていたのは有吉夫妻も同じだったらしく、お互い顔を見合わせる苦笑し合う。首に抱きついてくる美月ちゃんを支えながらおじさんに向き直った。

「その、今日は……『初宮参り』、というもので伺わせて頂きました」

それには神社関係者である俺たち四人も驚いた。その単語が出てきたことにおばさんは頬に手を当てて感嘆の息を吐いている。

「『初宮参り』……、よくご存知でしたね。最近は依頼もめっきりなくなりましたのに」

「ええ、私も最近知りまして……あのーそれで、私どもはあまり作法のようなものも分かっておらず……、その、初穂料はお幾らほど包めばよろしいのでしょうか？」

おじさん、おばさん、静流さん、俺の四人は揃って顔を見合わせると微笑する。どうやら考えてる事は同じなようだ。

「初穂料なんていただけませんよ。有吉様ご一家は私たちにとっての恩人なのですから」

当たり前だのクラッカー。古いか。

「え、でも――」

「でしたら、今後ともここ水分神社とご縁を結んでいただくということ、どうでしょう？」

渋る菜月さんも、この家族にとって遠慮というものがどれだけ無力なのかを思い知っただろう。その証拠に、苦笑いしながら頷かざるを得なくなっている。

「……はい、それでしたら。よろしく願います」

「分かりました。それでは準備いたしますので少々お待ちを」

居間を出て行くおじさんの背中をおばさんも追っていく。かくして、俺と静流さんと恭子さん、そして有吉ご一家の六人が残された。まあ、恭子さん以外の五人は過去に一度顔を合わせているんだけど。一人はお腹の中だったけど。

人数も減ってきて静かに感じるようになった空気の中、穏やかな

笑みを浮かべながら静流さんと恭子さんの二人は美月ちゃんを見つめていた。やっぱり母性本能みたいなのがあるんだろうな。

そのまましばらくまったりした静寂を楽しんでいたところ、そのしじまに身を委ねたような口調の菜月さんが喋りだした。

「この前は、ありがとうございました」

「いえいえ、そんな」

謙遜などではなく心からの感想だ。美月ちゃんの笑顔を見られただけで元は取れた――そんな俺のキャラと違う本心を口走ってしまいうそうなくらいには本気の、な。

「もしかしたら、あの時こちらの水分神社に来なかったら、この子は生まれてなかったかも知れないですね。そう思うと皆さんには感謝してもし切れません」

美月ちゃんをゆらりゆらりと揺らしながら、

「先ほどのお嬢さんの話じゃありませんけど、水分神社が私たち夫婦とこの子の『縁』を守ってくれたんだと思ってるんです。ここで治療をしてもらってからは一度も体調を崩すこともなく、こうして母子共に健康なまま出産できましたから。本居宣長公にならって言うなら『みくまりの 神誓いの なかりせば このあが身は 生まれこめやも』です」

そこで申し訳なさそうに俯いている孝介氏を見る。

「この人はあくまで反対してたんですけどね。『そんなことより病院行け――！』って。顔真っ赤にして怒っちゃって。ふふ」

なるほど、あの時の呪詛にはそんな背景があったのか。でも、もうそんなの気にしちゃいない。この人は既に俺の中で旦那ーバスから旦那イスにクラスチェンジを遂げている。それに、こうして顔を赤くして俯いているのが、この人精一杯の謝意なんじゃないかとも思えてきたしな。全くシャイな人だ。

明るくて懐の深そうな菜月さんと、シャイだけど誰よりも家族の事を想っている強い孝介氏。その二人はもう俺的ベストカップルだった。

「でもやっぱりこちらに来て正解でした。友人から教えてもらったんです。最近水分神社に妊婦さんを専門に診る鍼師の先生が来たって。すごい効くわよーって言ってたので、どんな人なのかと思ったら、まだ若い男の子だったんだもの。さすがに驚きました」

「はあ、すいません」

いえいえ、と菜月さんは笑顔で首を振り、

「今では、この子が私たちの目に見える絆になりました。子は鎚って言いますけど、いざ親になってみるとその言葉の意味が判る気がします。あ、それでなくても愛してますけどね。旦那の事」

女性はこのいう恥ずかしい事を恥ずかしげもなく平気で言う。もちろん俺は羞恥にますます顔を赤くする孝介氏に同情しますよ。

「そうだっ。私、あれから神社とか神道とかに興味持ちちゃって、自分で色々調べてみたんですけど」

その時に初宮参りも知ったんだろうな。

「そうしたら面白いことを見つけてまして」

顔を輝かせながら俺と静流さんに顔を近づけてきた。

「神道って、決まった経典が無いんですね」

俺と静流さんは面食らった。そういえばそうだ。キリスト教で言うところの『聖書』やイスラム教の『コーラン』のような聖典は神道では指定されていない。ただ『日本書紀』や『古事記』を見て神様の個性を見出し、それに基づいて信仰を確立していった。元より自然発生的な宗教であったから当然なのかもしれないが、神社に住まう人間である俺たちは、それを不思議に思うことすらなかった。

神社とは一定の距離を置いており、他の宗教由来のイベントも多数ある一般社会で生活している菜月さんはしかし、それが『面白い』と言う。

「これって凄いことだと思いませんか？ 信仰に決まった形を要求しないってことなんですよ？ もちろん基本的な作法や土着の習慣みたいなものはありますけど、それでもやっぱり神社に来てお参りする、ただそれだけです。こんなに柔軟な宗教があるんだって、私

驚いちゃいました」

そんな貴女に俺たちは驚いていますよ。俺たち以上に神道を語ってくれる、そんな貴女に。嬉しくないはずがないだろう、自分たち以上に神道のことを考えてくれている人に出会ったんだから。

「きつと水分神社が安産に御利益があるなんていうことも、神道だからこそ可能な考え方なんですよ。神様の名前を変化させるなんて、他の宗教じゃ出来ませんよ。恐れ多くて」

その通り、水分神社が安産祈願で信仰されるようになったのは『水分』を『みこもり』に訛らせて本居宣長が参拝した事がきっかけだ。もしかしたら、それ以前から信仰自体はあったのかもしれないが、どちらにしろ天水分神と国水分神の名前を訛らせた人がいるのだ。確かに、これは凄いかもしれない。まあ元が人間の生きる源とも言える水の神様だから、本質的には間違っていないのかもしれないけどな。

ぜひ菜月さんには稲荷神社の事も調べて欲しいね。あの御利益大盤振る舞いの神社も。

「その水のような柔らかさ、沁み込みやすさが今もこの日本から神社がなくならない理由だと、私は思います……………って！ すいませんっ、私ったら偉そうに……」

「いえ、きつと仰るとおりです」

頬を上気させて興奮していた菜月さんの跡を静流さんは笑顔で引き継いだ。

「神道は遥か昔から大和の人によって信仰されてきました。今と同じようにそこには色々な信仰があったでしょう。豊作であったり、祈雨であったり。でもそれらは全て人々が生きていく上で必要だったから、書物に見える神に祈る事から始まりました。稔りの悪い地域などでは稲荷神に豊作を願い、そしてそれが叶ったら人々は神に感謝してその年の初穂を奉納する。それを毎年毎年繰り返す事で信仰として成立していったんです」

自分にも言い聞かせるように、深く感じ入っているのか静流さん

は目を瞑っている。

「教祖などおらず、人と人との繋がりの中で育まれていった想い。それこそが神道だったんですね。気付かせてくれて、ありがとうございます」

菜月さんは照れ笑いを浮かべる。抱かれた美月ちゃんもきやつきやと手を叩いているのは、お母さんの笑顔が嬉しいんだろうな。

静流さんの感謝の言葉を聞きながら、またこの居間の中で連鎖していく笑顔を見ながら不意に俺はこんなことを口走っていた。

「……もしかしたら、神道の本質っていうのは『感謝』なのかも知れませんか」

昔の人々は神に願い、それが叶うと神に感謝して初穂を献上した。その時の皆はきつと笑顔だったことだろう。もちろん時には神様からこつ酷いお仕置きを食らう事もあったのだろうが、神々に感謝して、神様と一緒に楽しんでいる祭りの際には皆が笑顔で自分たちの生きている世界に感謝していたに違いない。

「……そして、それが日本人の『心』なんじゃないでしょうか」

急に真面目に語りだした俺を見て目を丸くしている恭子さん、これは貴女に貰った言葉にも繋がる話なんですよ。

日本人にとって神社が確かな価値を持っているなら神社が無くなることはない。まどろっこしい言い方をしたりはしたが、その恭子さんが俺に教えてくれた言葉にあった『価値観』というものが、この『感謝』だったんじゃないかと俺は思う。

そして、それが――

「それが今も日本人の中に生きてるからこそ、日本人である今の俺たちがいるんですよ」

周囲を見てみれば皆が笑顔。俺も自分の顔を触てみると笑みの形に歪んでいる。

この笑顔は、遥か昔の人たちから受け継がれてきた、連鎖してきた笑顔なのだ。

――笑顔って凄いなだな。

どうやら俺たちは壮大な流れに取り込まれてしまっているらしい。でも、悪くない。

その時、話が終わったらしい日向と縁が戻ってきた。目に見える外傷はなかったので暴力沙汰にはならなかったみたいで一安心。続いて初宮参りの準備をしていたおじさんお婆さんも「準備が整いましたよ」と有吉ご一家を呼びに来た。

四人に共通しているのが、入った居間の中の雰囲気がいい感じにしんみりしていて首を捻っているという事。皆して戸惑っている今がチャンスだな。

思い出すのは、水分神社に来る前のこと、水分神社に来た時のこと、水分神社に来てからのこと。

その間に育まれたありったけの『感謝』を込めて。

俺の『笑顔』が皆に連鎖する事を願って。

「いつも、ありがとうございます」

終始朗らかに進行した初宮参り。

ニコニコしながら正座していた菜月さんを、まるで離婚原因第一位の価値観の相違を見つけてしまったみたいに悲哀の籠った目で見つめる孝介氏。式の主役である美月ちゃんはポカンと玉串を振るおじさんを見上げているだけで、当たり前だが何をしているのかサッパリといった感じだったが、その表情は俺たちに新たな笑顔をプレゼントしてくれたのは言うまでもない。

初宮参りの御祓いが終了し、これで美月ちゃんも氏子入りですよ、とおじさんが言う。と菜月さんが我がことのように喜んでいた。氏子入りの意味が分かっていないらしい孝介氏は終始寂しそうにしていたが大丈夫。ちゃんと貴方も氏子ですよ。

でも心配はないか。二人は美月ちゃんを挟んで今ではちゃんと微笑み合っている。まあそれは孝介氏が菜月さんの笑顔に合わせたような按配だったが。夫婦円満の秘訣——もしかしたら、かかあ天下なのかもな。

玄関で靴を履いている有吉ご一家の見送りをしていた俺たちの中で一步を前に出たのは静流さん。

伝える言葉は、きつとアレだろうな。

「またいつでもお越しく下さいね。今後とも、『ご縁』がありますように」

皆さんも、ご縁は大切に。

その後。七人全員が揃った居間にて交わされた会話をここに追記しておく。

「静流さん。何だか俺、色んな神社行きたくなりました」

「ええ、そうですね。私もです」

「それじゃあ今度、二人で行きませんか？」

「え、えっ？　そ、それって……」

「「ちよつと！」」

目の前から海苔付き円月輪が二枚ギュルギュル飛んできたが、どうやら片方は縁の手から放たれた物らしい。さっきの話し合いで何かしらの協定があったのだろうか。

でも俺はめげない。両手で円月輪を白刃取りしつつ、静流さんへと言葉を重ねる。

「どうですか？」

「――はいっ。私なんかでよければ」
ガッツポーズ。

「「何よそれ！」」

一先ず俺は静流さん一筋なのだ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0681k/>

カミサマのご縁

2011年1月3日11時25分発行